

資料

(平成五年十月)

第三十八回「合宿教室」(厚木)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

— “合宿教室” 38年の歩み —

回数	年度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・関正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
累計・参加人員			10,976名	

# 第三十八回 “合宿教室（厚木）” 全参加者の感想文と和歌詠草



と き 平成五年八月七日（土）から十一日（水）まで四泊五日間  
 ところ 神奈川県・厚木市立「七沢自然教室」  
 参加総数 二七一名

## 目 次

“はしがき”に代へて	……………	理事長・小田村寅二郎	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳	……………		5
“合宿教室”の日程表（四泊五日）	……………		6
第38回 “合宿教室”のあらまし	……………		7
感想文と第二回目の“短歌詠草”	……………	参加者全員	27
短歌詠草	……………	参加者全員	113
あとがき	……………		139
カメラ・レポート29枚（29ページから85ページの左頁に掲載）	……………		

“はしがき”に代へて

小田村寅二郎（数へ、八十歳）

（本会理事長・元亜細亜大学教授）

今から三十七年前の昭和三十一年（一九五六年）に本会が創立して以来、一年も欠かすことなく続けて来たこの「合宿教室」は、本年は第三十八回目を、八月上旬の四泊五日間、神奈川県厚木市立「七沢自然教室」で開催しました。この施設を使用させていただいたのは、一昨年八月に次いでこの二回目ですが、この二年間のあひだに、足立原・厚木市長さんをはじめ、市議会、市の教育長さん、七沢自然教室の所長さん以下、職員各位の御尽力によって、立派な「集会棟」が新設され、その竣工を、この合宿教室開催の二日前に間に合せていただけだ、といふ誠に有難い恩恵を受けての合宿開催でありました。多大な市費を以て作られたこの「集会棟」には、四百名を十分に収容できる冷暖房付の大講義室をはじめ、教室の会議室のほか、前回使用の折に大変苦勞した「入浴三交替」も解消できる新しい「浴場（男女用それぞれ）」の増設などが含まれ、何とも有難い施設の充実にありました。それとあはせて、前回の開催の折と同じく、市当局ならびに市教育委員会の「後援」の名目のもとに開催されたことも有難いことでした。

さて、全国津々浦々から馳せ参じてくださった参加者諸君（六十一大学から、男女学生二五二名（うち女子学生五十二名）、社会人二十一名および主催関係者九八名、合計二七一名（明細は五頁に）は、旅装を解く間もなく新装成った「集会棟」での開会式（八月七日午後二時）に列席し、開会宣言、国歌斉唱二回、平時、戦時を問はず祖国日本のために尊い生命を捧げられた先人の御霊に一分間の「黙禱」を捧げたあと、参加学生を代表して、中央大学文学部四年の草野直樹君が、「この四泊五日間を、お互ひに心を働かせる努力のもとに語り合ひながら、平素の大学生活では得られない楽しい経験をしようではないか」と訴へたのに対して、全参加者は「この合宿教室に参加したからには、自ら進んで飛び込んでいかななくては」との気持にさそはれていったやうでした。

場所も良し、丹沢連峰に連らなる「鐘が嶽」の麓、空気は殊のほか澄み切つてをり、緑の濃さが目にしみる環境に包まれて、今年の「合宿教室」はこのやうにしてスタートしました。

さて、お招き申し上げた講師は、第二日の午後から、評論家・筑波大学名譽教授の村松剛先生が、「維新群像と現代日本」と題し、第三日目の午前には、文藝評論家・東京大学名譽教授の佐伯彰一先生が、「日本文化の深層」と題して、それぞれ一時間半の御講義と、そのあと質疑御応答をして下さいました。実は大変に希有なことでしたが、両先生ともに、二、三週間前から御健康を害され、御入院のやむなき事態になってをられました。私ども主催者一同は困惑に暮れましたが、お二人とも、自分の話を聴くために集つてゐる人たちのゐる所には、何としても出向きます。との強い御意志を示され、両先生とも、それぞれの御入院先からのお越し、そして病院への御帰院といふ、まことに有難い御行動をおとりくださつての御出講でありましただけに、いはば精魂を傾けての御所懐の御披露でありましたし、質疑への御応答にも力がこめられたお声をうかがふことが出来ました。御出講のあと、両先生とも「少々疲れました」と仰言つたお言葉が耳底に今も残つてをります。参加者一同は、御病氣をおしてのことは十分承知してをりましただけに、両先生から戴いた多大な学恩に対しては、心からの感動を以て感謝した次第でした。

また、第四日目の午後には、私ども同人一同が久しく敬慕申し上げてまゐりました、東京大学名譽教授・文学博士の宇野精一先生がこの合宿を見学して下さい、かつ短い時間でしたが参加者一同に、お心こもるお話をしてくださいました。数へ年八十四歳とはお見受けできないほど、毅然とした御姿勢と御声咳に接し得たことも一同に深い感銘をお与へくださったことでした。

ちなみに、御高齢の方の御登壇は、昭和五十六年の第二十六回（阿蘇）での熊本大学名譽教授の松本唯一先生（九十歳）、昭和五十八年の第二十八回（雲仙）での国際政治評論家の齋藤忠先生（八十二歳）、昭和六十一年の第三十回（阿蘇）での元東京大学教授の市原豊太先生（八十二歳）、ならびに昭和六十二年の第三十二回（阿蘇）での元侍従次長の鈴木一先生（八十七歳）以来の得難いことであつた、と記憶してゐます。

さて、この「合宿教室」では、「学問」と「人生」と「祖国日本」と「世界の平和」といふ四つの命題を今年も掲げました。いまの日本の大学生活では、これら四つの命題に何らの統一性・関連性が見られないため、この合宿教室では、そのことへの反省の上に立って、この四つの命題を何とかして各自の心中に統一的に把握してもらはうと、参加者諸君に強く期待しました。これらへの対処には、結局一人びとりが、学問の名に値する真の総合的な学問を求めつつ学生生活を確立するのだけではない、といふ重要事を把らへてくださった、と思はれました。

一方、大学生諸君にとって、「友情、友との付き合い」の問題は、大切な関心事でありますので、「上<sup>うへ</sup>っただけの遊び友だちではなく、真に心を許し合ふことの出来る友だちを持ちたい」といふ願望に対して、この「合宿教室」では「こちら側がどういふ心掛けで自分自身の心を整へて相手に相対していけば、真に心を許し合へる友と出会うことができるか、それにはどう努力すべきか」についても、各班ごとの、胸襟を開いての「班別討論」、「輪読」、各自が詠んだ和歌についての「相互批評」などを通じて、具体的な経験を積んでくれたことは、各自の大きな収穫となったと思はれます。

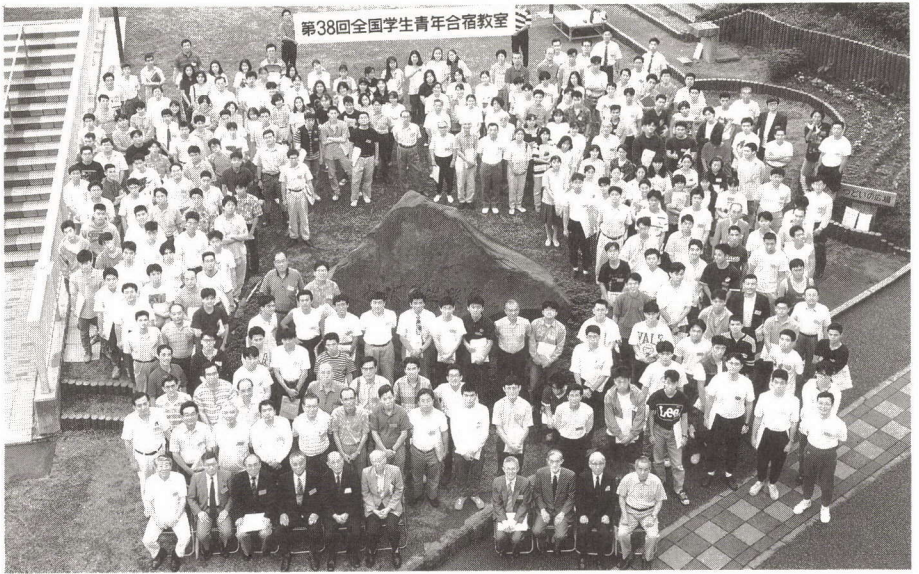
なほ、ここに編じたこの『感想文集』は、全参加者が「解散の間ぎは」に走り書きしてくださったものです。紙面の都合上全文をそのまま載せ得なかったことは、なにとぞご容赦いただきたいと存じます。この「文集全体の編集」には、十余名の方々（編集後記に記載）が、公務・社務の余暇をさいて取り組んでくださったことを、心から感謝してをります。

また、最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難い御支援の数々に對しまして、会員一同に代はり、心から厚く御礼を申し上げます。

来年（平成六年）の「合宿教室」（第三十九回）は、八月六日（土）～十日（水）の日程（四泊五日間）

で、熊本県阿蘇国立公園、阿蘇町の「阿蘇の司<sup>つかさど</sup>・ピラパークホテル」で行ふことに決定してをり、その

合宿運営委員長には、熊本在住の白濱 裕さんを煩はすことになりました。よろしく御協力のほどを。



「第38回合宿教室」記念撮影（参加者 271名） 於・厚木市立「七沢自然教室」

参加者

（学生班 六十一大学）（洋数字は参加学生数）

- 東北大 1 筑波大 1 茨城大 1 東京大 2 千葉大 1
  - 横浜国立大 2 防衛大学校 2 新潟大 1 富山大 5
  - 福井大 2 静岡大 1 愛知教育大 1 奈良県立商科大 1
  - 徳島大 1 高知女子大 1 九州大 3 福岡教育大 1
  - 大分大 1 長崎大 3 熊本大 4 熊本女子大 1 拓殖大 28
  - 早稲田大 9 亜細亜大 7 中央大 2 明治大 2 淑徳大 1
  - 千葉情報経理専門学校 1 玉川大 1 関東学院女子短大 1
  - 青山学院大 1 創価大 1 桜美林大 1 北里大 1
  - 立正大 1 国学院大 1 日本大 3 金沢工業大 10
  - 福井工業大 9 金沢経済大 6 長野大 2 上田女子短大 1
  - 愛知文教女子短大 1 京都外国語大 4 神戸女子大 1
  - 大阪電気通信大 1 京都女子大 1 関西学院大 1
  - 大阪樟蔭女子大 1 福岡大 3 九州女子短大 1
  - 九州産業大 1 九州国際大 1 日本デザイナー学院 1
  - 九州造形短大 1 九州女子大 1 宮崎産業経営大 5
  - 尚網大 1 熊本商科大 1 日本文理大 1 米田国際大 1
- 計 一五二名（うち女子五二名）

（社会人班） 会社員・公務員・教員など計二一名

（招聘講師） 二名（来賓） 六名（国民文化研究会） 八五名

（事務局） 四名（写真） 一名

総計 二七一名

第38回 全国学生青年合宿教室（七沢） 日程表 平成5年

8月 7日 (土) (第1日)	8月 8日 (日) (第2日)	8月 9日 (月) (第3日)	8月10日 (火) (第4日)	8月11日 (水) (第5日)
	(起床) 洗面・清掃 (7:00) 朝の集ひ 朝食	(起床) 洗面・清掃 (7:00) 朝の集ひ 朝食	(起床) 洗面・清掃 (7:00) 朝の集ひ 朝食	(起床) 洗面・清掃 (7:00) 朝の集ひ・朝食 (8:00) (合宿を顧みて) 合宿運営委員長 小柳志乃氏 (8:20)
	(8:30) (講義)	(8:30) (講義)	(8:30) (講義)	参加者感想自由発表
	福岡県立太宰府高教諭 占部賢志氏	文芸評論家 東京大学名誉教授 佐伯彰一先生	国文研・副理事長 九州造形短期大学教授 小柳陽太郎氏	
	(10:00) (10:10)	(10:00) (10:10) 質疑応答 (10:40)	(10:00) (10:10)	(10:00) (10:10)
	班別研修 輪読	記念写真撮影 班別研修	班別研修	感想文の執筆 および 第二回 短歌創作
	(12:00)	(12:00)	(12:00) 地区別懇談会 (12:30) 昼食	(11:30) 班別懇談 (12:00) 清掃 (12:30)
	昼食 休憩	昼食 休憩	休憩	開会式 (このあと昼食) (1:30)
	(1:30) (講義)	(1:00) (短歌創作導入講義)	(1:30) (講話)	
(2:00) 開会式 国文研・理事長 小田村寅二郎氏 オリエンテーション 合宿運営委員長 ㈱日本興業銀行証券部 小柳志乃氏 合宿指揮班長 神奈川県立津久井高校教諭 大日方学氏 (3:30) 班別自己紹介 班別輪読 (5:00) 夕食 入浴 休憩	評論家 筑波大学名誉教授 村松剛先生 (3:00) (3:10) 班別研修	日商岩井㈱ ガス石炭本部副部长 澤部壽孫氏 (2:20) レクリエーション ウォークラリー (七沢周辺)	東京大学名誉教授 宇野精一先生 (2:00) (短歌全体批評と講話) 国文研・常務理事 事務局長 長内俊平氏 (3:30) 班別短歌相互批評 (第二回)	
	(5:00)	(5:00)	(5:00)	(5:00)
	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩
(7:30) (合宿導入講義)	(7:30) (所感発表)	(7:30)	(7:00) (慰霊祭の説明) 北九州市立病院・技師 森田仁士氏 (7:30) 慰霊祭	
熊本県立第二高校教諭 白濱裕氏	福岡県立水産高校教諭 菅原享二氏 (8:30) (8:40) 班別研修 輪読	班別短歌相互批評		
(8:50) (9:00) 班別研修			(8:30) (8:40) 班別懇談 (9:30)	
(10:00) 就床 (10:30) 消灯	(10:00) 就床 (10:30) 消灯	(10:00) 就床 (10:30) 消灯	夜の集ひ (10:30) 就床・消灯	

夏季合宿セミナー

短歌創作



# 第三十八回 “合宿教室” のあらまし

第一日

(八月七日・土曜日)

降り続いた雨も上がつて、いよいよ第三十八回全国学生青年合宿教室開催の日となった。丹沢山系の緑の山々に囲まれたここ厚木市立七沢自然教室には、全国各地から学生・社会人が次々に参集した。従来、九州各地で開催されてゐた合宿教室がこの神奈川県七沢自然教室で行はれるのは、一昨年に続き今年で二回目になる。参加者は管理棟正面玄関に屋上から下げられた「友よと呼べば友は来たりぬ！」の垂幕に迎へられて受付を済ませ、ただちに所定の宿泊棟に向かひ、開会式に備へた。

## 開会式

わづか二日前に竣工した集会棟大講義室に九州国際大学法経学部三年佐藤公治君の開会宣言が響き、第三十八回全国学生青年合宿教室が開始された。国歌斉唱の後、祖国日本の為に貴い命を捧げられた全ての御霊に、一分間の黙祷を捧げた。次に主催者側から国民文化研究会理事長小田村寅二郎先生が「世界が本当の平和を迎へるには、一人一人が心を動かせる力をつけなければなりません。それは自分の付き合ふ相手が今何を喜び何を悲しんでゐるかが分かる、分かつてそれを自分の喜びとし、悲しみとできるように心を鍛へて行くことであり、さういふ力を養ふ合宿にして欲しい」と述べられた。また、来賓を代表して厚木市長・足立原茂徳氏が「ここを我家と思つて遠慮なく使つてください」と挨拶された。最後に参加者を代表して中央大学文学部四年草野直樹君が「何か一つでも皆で共感で

きるものを見つげませう」と参加者に呼びかけた。

開会式終了後オリエンテーションに移り、合宿教室運営委員長である小柳志乃夫氏（録日本興業銀行勤務・39歳）が、「相手の立場に思ひを寄せながら、話すことよりむしろ人の言葉を聞くやうに心掛けてください。それがこの合宿の大きな特徴です」と述べ、オリエンテーション資料をもとに、合宿の概要・趣旨について詳しく説明した。続いて、指揮班長の大日方学氏（神奈川県立津久井高校教諭・30歳）によつて合宿生活細部にわたる注意事項が伝えられた。

この後、参加者は宿泊棟の各班室に戻り、班毎に参加した動機やどういふ学生生活を送らふと思つてゐるかなどを互ひに披瀝して自己紹介を行ひ、昨年の合宿記録集『日本への回帰第28集』を輪読した。

### 合宿導入講義 「現代青年の課題 —— 知性と感性の恢復を求めて ——」

熊本県立第二高校教諭 白濱 裕 氏



氏は、ソ連崩壊後世界では民族紛争が頻発し、国内では昨日細川政権が発足したものの、今後日本の進路は不透明であるといふ混沌とした情勢の中で、私達が一青年としてまた一人日本人として如何に生きて行つたらよいか、皆さんとともに考へたいと語り、講義を始められた。

氏は現在の大学の現状を象徴的に表すものとして『大学を問う』（新潮社）の記事等を引用し、大学での講義が学生の潑刺とした向学心に応へ得てゐないために学生の意欲を喪失せしめてゐる。また学生自身も人間関係によつて傷つくことを嫌ひ、自分をさらけ出さない人格不問の希薄な人間関係を求める傾向にある。更に世界青少年意識調査において、日本の若者は世界の若者に比べて個人生活志向が強く、自国に役立ちたいと考へてゐる若者が大変少ない等、現在の若者の現状を示された。これらの風潮は戦後日本の理念であつた生命尊重至上主義・経済至上主義の延長上にあるが、その風潮に埋没してしまつてゐる私達に対し、「日本の若者も機会

さへあれば、立派な志と行動をもつて世界に貢献する若者はかりだと思ふ」と、カンボジアで国連ボランティアとして活動中、銃弾に倒れた中田厚仁さんの言葉を引用し、その生き方に触れられた。

厚仁さんは小学二年生の時アウシュビッツ収容所を訪問し、その体験が国際平和に貢献しようといふ志の基になったこと、また大学卒業後は国際貢献に関係する就職先を探されたこと等を紹介された。そして「信ずるもののためには、命を捧げても行動する、といふ崇高さをもつた人間を示してくれたことが、厚仁の救ひであると思ひます。(『文芸春秋』—桜とともに天に召された息子—)」といふ父武仁さんの言葉を引用し、「この父武仁さんの言葉には、日本人が忘れてしまつた人間としての誇りがあるのではないか」と指摘された。そして生命尊重を声高に叫ぶのみで、理想を現実と誤認した第二現実(竹山道雄)の迷妄から覚めきれず、自分の生き方また国際社会での日本の進路について思考停止状態に陥つてゐるのが現状で、これは知的な怠情以外の何物でもないと痛烈に批判された。

最後に、紀元前五世紀、アテネの青年達に「大切にしなければならぬのは、ただ生きるといふことではなくて、善く生きる」といふことなのだ」と生き方を問ひ続け「青年を惑はせた」として刑死したソクラテスの生き方に触れ、「時代は隔たつてもソクラテスの時代も現代も状況は変わりません。ソクラテスの言ふ魂の世話とはつまり心を鍛へるといふことです。心を鍛へ、一体何を大切にして生きるべきか、自らの生き方を問ふのが最終的な学問の目標ではないでせうか」と問ひかけられ、自分の知性と感性を存分に働かせて学んでいくと、講義を結ばれた。

講義終了後、参加者は宿泊棟の各班室に戻り、導入講義を受けて班別討論に移つた。オリエンテーション資料の「班別討論の進め方」に従つて、先づ皆で講義内容を確認し合ひ、その後、講師が一番伝へたかつたことは何か、どこが最も重要なことだつたかといふことに留意して討論が進められた。

尚、この班別討論は以後の各講義の後に行はれていつた。全国から集まつた見ず知らずの班友を前にして、最初はやはり緊張のためか意見も少なく、発言者も限られてゐたが、班員がお互ひに打ち解けるに従ひ、次第に発言も多くなり、時には反論し、時には共感し

合ひながら、班員相互の心の交流が深められていった。

## 第二日

(八月八日・日曜日)

合宿の日程は、毎朝六時半の起床から始まる。洗面・清掃の後、参加者は宿泊棟を出て、朝霧のかかる丹沢山系の山々を見渡しながらブレイホール前のふれあひ広場・すぎの木広場に向かふ。広場では「国旗掲揚」「ラヂオ体操」が行はれたが、今回は雨天のためブレイホール・集会棟で行はれた日もあった。

## 講義 「この人を見よ―若き日の体験と課題―」

福岡県立太宰府高校教諭 占部賢志氏



氏は先づ、幼年期に野原に花を摘み、異年齢の子供と遊ぶ経験が極度に減少し、社会のために尽くすよりも個人の趣味を大事にしたいと答へた青年が近年極端に増へてゐることをデータをもとに指摘された。しかし、さういふ現代の青年の中にも、困難に立ち向かはうと決意し、自分を磨いてゐる青年が周囲には必ずあると述べられ、そのやうな気概は各自の心の中に必ず備はつてゐる筈であつて、今大事なのは各々のさうした心を見定めてゆくことではないかと訴へられた。

そして、青年の姿を彷彿とさせる例として、本居宣長の若き日の体験が挙げられた。酒に溺れた留学生生活を母が一心にたしなめてゆく手紙、離縁した背景に忘れられなかつた女性を何としても娶りたい気持ちがあつたと推測される日記を辿られ、青年期に受けた傷や願ひが宣長の学問と深く結びついてゐるといふ大野晋氏の指摘を示されて、学問ひいては人生の本質に迫る際に如何に青年期が重要であるか参加者に強く注意を促された。

更に氏は、幕末の志士で、維新に活躍した人々の師である吉田松陰を取り上げられた。「活きた学問を志しての西国遊学、膨大な学問の領域にさいなまれた江戸での挫折、命を顧みず友との約束に身を投じた脱藩、どの場面でも自分の課題と真正面から取り組む松陰の姿勢は、我々に青年そのものの姿を感じさせ、驚きを与へ、惹き付けて止まない」と話され、我々を豊かな歴史の世界に誘ひながら話を結ばれた。

## 講義 「維新群像と現代日本」

評論家・筑波大学名誉教授 村松 剛 先生



先生は先づ、明治維新が日本の歴史上画期的出来事であったことを述べられ、その到達点であると同時に明治憲法成立に至る出発点であった『五ヶ条の御誓文』に関し、今は亡き昭和天皇が、敗戦後の日本の出発点としてこれを『新日本建設ニ関スル詔書』（昭和二十一年元旦）の冒頭に、なぜ強い御意思の下に掲げられたのかを詔書に沿って語っていかれた。即ち先帝陛下は、日本にもかういふ立派なものがあつたのだよと、長きに亙る戦争に敗れ自信を無くし失意の淵に沈んでゐる国民に対し、近代日本の出発点である『五ヶ条の御誓文』の精神に立ち返ることを諭された。

「勅旨公明正大、又何ヲカ加ヘン：須ラク此ノ御趣旨ニ則リ：新日本ヲ建設スヘシ」と。そして、日本の伝統は世界でも一級のものであり、これにふさはしい価値を日本人が発揮してこそ真に国際社会に奉仕できるので、といふことではなかつたかと。そして、占領政策として宣伝された「天皇の人間宣言」などといふ、この詔書に付された俗称に惑はされることなく、明治維新の出発点に戻つて優れた伝統に恥ぢない国家を造るといふ、この詔書の持つてゐる意味を思ひ出して頂きたい、と強く訴へられた。

その後、先生は嘉永六年（一八五三年）の米国のE・Hパルマーの建白書（先生御自身が直接米国で入手された英文の史

料)等を詳細に辿られつつ、そこに見られるペリー来航以後現在に至るまでの一貫した米国の対日政策が日米戦の一大要因であったことの御指摘等、驚くべき歴史事実から現今の危機的な国際情勢の話まで、実に幅広い御講義を展開していかれた。

最後に先生は、日本国憲法は占領管理法であり日本人が自分で考へたものではなく、明治人の偉大さは、西欧列強の武力進出といふ危機に当たつて、自分たちで自分たちの歴史に合ふ国造りを行ったことであり、冷戦終結後の今日、日本は文化的体質や伝統に則した国造りを歴史からも国際社会からも課されてゐるのであると語られ、御講義を終へられた。

### 所感発表

初めに、福岡県立水産高等学校教諭の菅原亨二氏(写真下右・神戸商船大学商船学部・昭53卒)が登壇された。氏は先づ「生徒達の本音の気持ちを知りたい」といふ強い思ひから短歌の指導に取り組まれた体験を話され、ハワイ・東支那海での乗船実習の折に生徒が詠んだ短歌を紹介しながら、厳しい実習を通して自分のやることを見つけ成長して行く様を、その生徒達の短歌を通して生き生きと語られた。特に、中学校の時からぐれて高校でも長期欠席が続く教師にも反発し、「乗船実習には参加したくない」と言つてゐた生徒が、自分の役割を怠れば乗組員の人命に関わる乗船実習を経験して精神的に生まれ変わり、「将来は船に乗りたい」と言ふやうになつたといふ貴重な体験を語られた。最後に、「生徒が本来持つてゐる素直で豊かな心は、ほんの小さなきつかけで呼び起こされて生き生きとした姿に変はつていく。その心が短歌を通して手に取るやうにわかるやうになりました」と語り、発表を終へられた。

次いで、饗日立製作所エネルギー研究所勤務の松井哲也氏(写真下左・九州大学工学部修士・昭59修了)が登壇され、小林秀雄氏の言葉を引用して、理想と空想の違いについて触れられ、現代が生きる力が弱くなつてゐる時代であることを指摘された。そして「豊かな心は経験を豊かにし、貧しい心は経験を貧しくする」といふ言葉を紹介され、「一人一人が豊かな心を取り戻すしかない」と強く語られた。続いて、「美を求める心」



の文章を引用して、科学ではない別の次元の学問があることを指摘され、「美しいものを感じる心は誰にでもあるのです。ただ、それが大事なことだと自覚することが大切だと思ひます。現代は、豊に感ずる心を育てるといふ学問の道が失はれてゐます。私達一人一人が、豊かな心を持って人生を生きて行くならば、その中から自分の身丈に合った理想が育つて行くのではないでせうか」と語られ、最後に明治天皇の御製「心」を紹介して発表を終へられた。

### 第三日

(八月九日・月曜日)

## 講義 「日本文化の深層」

文芸評論家・東京大学名誉教授 佐伯彰一先生



先づ先生は、日本が明治開国以来欧米から様々なものを摂取した結果、今や日本文化は「雑種文化」とも言はれるが、「果たして日本の文化は完全に雑種化してしまつてゐるだらうか」と問題を提起された。そして、和歌について「記紀万葉の時代に出来た詩形が今でも生きて使はれ、「サラダ記念日」などがベストセラーになることなど外国では信じられないことなのです」、さらに、ギリシャの神殿は遺跡として残つてゐるだけだが、同じくらゐ古い歴史を持つ「神社」は、なほ生きた神社として残つてゐること、また知人のイタリア人が「灯笼流し」を見て、先祖の霊を慰める習俗が今に息づいてゐる光景に痛く感動したエピソードなどを紹介され、「確かに日本は雑種文化の中にあるが、一方では意外なくらゐに、純種文化といふべき古い習俗が息づいてゐるのです」と述べられた。次に、文学作品のいくつかを紹介しながら日本人の習俗の实例を提示していかれた。まづ『平家物語』を挙げられ「源平戦ふ時は敵味方として描かれてゐるが、後半になり平家の死者が増へ滅亡が近づくと、全体の調子が敵、あるひは憎しみ

といふものから離れ、平家の人々の魂を鎮め慰めようといふ鎮魂歌の様なものもが基調になつてゐる。そしてこれは現代の作品『暗い波濤』（阿川弘之著）や『黒い雨』（井伏鱒二著）にも通じてゐるのです」と述べられた。そこで先生は靖国神社参拝の問題に触れられ「日本人にとつて死者の霊を慰めるといふ魂の問題なのであり、大臣の参拝が公的か私的かといふのは私達の習俗から離れた全く愚かしい議論です」と指摘された。

最後に「私達は紛れもなく雑種文化の中に生きてゐるが、心の底には古代から連綿と続いてきた『共同の無意識』のようなものが流れてゐます。私達は、魂の問題を日本人がどう考へて来たのかといふことに思ひを馳せ、深い心の層の中にある共同の無意識を発見し守つていく必要があるのではないでせうか」と訴へられ講義を終へられた。

## 短歌創作導入講義

継日商岩井大阪エネルギー部部长 澤部 壽 孫 氏



先生は先づ「短歌を詠み互ひに批評し合ふことは、お互ひが裸になつて付き合ふといふこの合宿で、重要な意味を持つものなのです」と前置きし、学生時代に「防人の歌」に触れて感動した経験を語り、短歌とは飾らないありのままの思ひを表現するものであると述べられた。次に短歌の意義として、自分の感動を表現して味はひ、豊かに感じる心を磨くことだと話され、一首一文・題材・用語・連作等、短歌の詠み方について例を挙げて説明しながら「自分の心・体験を素直に生き生きと大胆に詠む」ことが大切であると指摘された。そして「短歌は私たちの祖先が遺してくれた貴い文化遺産であり、先づ短歌を詠むことが大切です。難しく考へずに、皆さんの清らかな心のこもつた気持ちを短歌に詠んでみてください」と呼びかけられ、最後に短歌相互批評の手順を示して「相手の気持ちをおしはかる努力をするのが相互批評の場であり、そこにお互ひの心が通ひ合ふ楽しい世界が実感できるのです」と述べられて講義を終へられた。



## レクレーション

今回は合宿教室では初めての試みである班対抗のウォークラリーが行はれた。これは指揮班長の大日方学氏が今春より幾度もこの地に足を運び、自然教室の職員の方々の協力のもと、綿密に練り上げたものであった。折からの不順な天候のため雨が心配されたが、皆の気持ちを通じてかウォークラリーを実施することができた。講義後直ちに競技説明が行はれ、指揮班長のピストルの合図で各班毎にそれぞれのコースに向けて出発した。参加者は丹沢山系の自然を楽しみつつ、各所に用意されたクイズに答へながら班員と共に楽しい一時を過ごした。

夕食後、班別短歌相互批評が行はれた。短歌導入講義で澤部氏が示された手順をもとに、友の詠んだ短歌を、それがどういふ気持ちで詠まれたのか、より正確な表現はないか、などを中心に味はつて行つた。短歌に表現された言葉を通して友の気持ちに迫るといふ経験が、参加者全員によつてなされたのである。

講義 「日本の国柄―皇太子さまをめぐるお歌を中心に―」

社団法人国民文化研究会副理事長・九州造形短期大学教授 小柳陽太郎 先生



最初に先生は「国柄とは、その国に本来備わつてゐる他の国にはない美しい世界であり、頭で知るのはなく心で感じとるものです。そして、日本の国柄とは天皇の御存在を抜きにしては考へられないものなのです」と、日本の国柄について皇太子殿下の御歌を中心に語つて行かれた。

先づ、皇太子殿下の御成婚における雅子妃殿下のお妃教育では和歌の時間が五分の一を占めており、皇室では和歌が大変重要なものとされてゐることを示された。また雅子妃殿下に和歌を指導した岡野弘彦氏は「天皇が年初めにおおらかで力強く歌を詠まれることで、人々の心はさはやかに、野山は生活力がみなぎる。歌は日本人の魂のエッセンスであり、百年前までは皆、歌を詠んでゐました」と雅子妃殿下に語られたこと、また雅子妃殿下が歌を大変熱心に楽しく学ばれたことを紹介された。さらに先生は、皇室における和歌の意義について「歌を詠むといふことは、自分の心をやまと言葉で正確に表現し、日本人としての心を、深くすがすがしく洗ひ清めながら鍛へてゆくといふことであり、皇室の伝統の中で脈々と受け継がれてゐるのです」と語られ、和歌が日本の国柄において大きな役割を占めてゐることを念頭に、日本の国柄について考へてほしいと訴へられた。

次に皇太子殿下の御歌を読み上げられながら、その御歌にうかがはれる皇太子殿下と昭和天皇・今上天皇皇后両陛下との暖かい心の通ひ合ひを紹介してゆかれた。

終はりに福沢諭吉がその著『帝室論』において、「我帝室は日本人民の精神を収攬する中心であり」、「独り萬年の春として」存在されると説いてゐることを紹介されて、国を支へてゐる掛け替へのない命として天皇がをられることを指摘され、皇太

子殿下の御成婚を国民が共に喜び合つたといふ事実、合宿での和歌創作と相互批評の体験、そして皇室の方々の御歌に身近に接した経験を基に、美しい日本の国柄に対する正しい認識を育てて行つてほしいと述べて、講義を終へられた。

## 講話 「伝統について」

東京大学名誉教授・文学博士 宇野 精 一 先生



「私は伝統といふものが好きであり、また大切であると思つています」と語り出され、普遍的な人類の産物である文明に対して、文化とは伝統に即したものの、民族の生み出したものであり、その代表的なものと言語であると述べられた。そして、本セミナーでは全参加者が短歌を詠むことに言及され、「歌を詠むといふのは大変よいことです。和歌は日本の伝統文化の中心であり、二千年くらいの伝統を持つてゐますが、これほど長い歴史を持ち、現在でも多くの人に作られてあるといふのは世界中でもその例がない。また日本人ならだれでも歌が作れますが、それも世界中に例のないことです」と述べられ、「その伝統を一番保持していらつしやるのは皇室です。宮中でのお祭りや和歌、これだけではぜひ伝えていただきたいものです」と述べられた。最後に、「皆さんは和歌を詠んで伝統を伝えていくといふ体験をなさいました。これを契機に折に触れて和歌を詠むようになさるとよい。人間形成の上でも大変重要なのです」と述べられ、御講話を終へられた。



「短歌は鉛筆とノートを持つて野原に出て詠む、といふものではない。美しい風景に出会ひ、それを友や家族にも見せたいと思ふ、その思ひのままに歌を詠み、葉書に書き送つてほしい」と、友や家族を偲ぶ心がそのまま歌を詠む心につながることを示され、折々に歌を詠むことの大切さを指摘された。そして客観的な科学の世界と自己内面にまことにある世界とは別物であり、まことにある世界は、心で知る・身にしてみて感じるといふ知り方でしか捕らへることはできない、それは幼心・真心の世界に瞬時にして帰るといふことであり、短歌の世界であると述べられた。そして、歌を作る第二のこつは素晴らしい歌を読むことだと話され、参加者全員の詠んだ歌の載つた歌稿からいい歌を紹介しませうと、短歌の全体批評に入られた。水産高校の生徒が乗船実習の際に詠んだ歌に対する感動の歌、合宿で心が開かれ軽に見知らぬ人と挨拶ができた喜びを詠んだ歌、病を押して御出講された講師を思ふ歌等々、用語・文法の誤りは指摘されつつも真心溢れる歌の数々を朗々と読んでゆかれ「素晴らしい歌を声に出してどんどん読んでください」と呼びかけられた。

## 慰 霊 祭

森田仁士氏（北九州市立八幡病院放射線科技師・39歳）による祭式の説明の後、参加者は雨の中ブレイホールに設けられた齋場に整列し、慰霊祭が厳肅に執り行はれた。三井甲之先生の和歌を朗詠し、お祓ひの後、警蹕の声と共に一同最敬礼にて御霊をお迎へした。献饌の後、古川修氏（本会理事）の祭文奉上、上村和男氏（本会常務理事）の御製拝誦と続き、小田村寅二郎先生（本会理事長）の玉串奉奠と共に一同御霊に対し礼拝を行ひ、さらに「海行かば」を斉唱した。祭壇はホールの壇上に設けられ、お祭りの様子は参加者に

もよく分かった。撤饌の後、再び警蹕の声と共に、一同最敬礼を以て御霊をお送りし、慰霊祭を終へた。

## 祭文

平成五年八月十日 われらここ緑濃き大山の麓・厚木七沢自然教室に集ひ 第三十八回全国学生青年合宿教室を営みて  
四日目の夜を迎へぬ

朝・夕に学びこしこの七沢のさやけき草原に立つプレイホールを齋庭と定め きよめまつりて

とこしへにみ国まもりますみ祖おやのみたま またみ国のために尊きいのちを捧げましはらから達のみたまのみまへにさ  
さやかなれども 海の幸 山の幸をそなへまつり みたまなごめのみ祭りを仕へまつらんとす ここに謹みて告げまつ  
らくは この美はしきやまとしまねを とことはに榮えゆかしめむと祈るわれらは たまきはるいのちをこめて 汝いまし  
みことたちのみ心を偲び 汝いましみことたちの遺のこしたまひし みいのちのこもれる数々のみ言葉を学び そを われらが  
こころに生き生きと甦よみがへらせつつ み国の内・外にみてるまがごとこのことを 力の限り打ちはらはむと われら  
もろともに力合はせて学びつとめ 萬世よろよかけて世のまさみちをきりひらかむと誓ひまつらむ  
天あまがけるみ祖おやのみたまよ 願はくは われらのゆくてをまもらせ給へと 合宿教室参加者一同に代り 古川修謹み敬ひ  
畏み畏みも白す

明治天皇御製

人

をちこちに別れ住みても国を思ふ人の心ぞひとつなりける

心

国の為身のほどほどにつくさなむ心のすすむ道を学びて

孝

いとまなき世には立つともたらちねの親につかふる道な忘れそ

雲

あつまると見れば離るる大空の雲にもにたるひと心かな

をりにふれて

むらぎもの心の限りつくしてむわが思ふことなりもならずも

### 昭和天皇御製

朝海

天地の神にぞ祈る朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

迎年祈世

西ひがしむつみかはして栄ゆかむ世をこそ祈れとしのはじめに

帝室博物館移管

いにしへの姿を語る品あまた集めて文の国たてまほし

千鳥ヶ淵戦没者墓園

国のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

旅

遠つ親のしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく

## 夜の集ひ

合宿教室は早くも最後の夜を迎へ、夜の集ひとなつた。最初にウォークラリーの成績発表・表彰が行はれ、ウォークラリーの準備に当たつた指揮班長の大日方学氏に参加者全員からの感謝状が贈られた。そして小田村寅二郎先生の音頭により坂東一男先輩(註)アサヒビール飲料取締役・本会理事)から今年も届けられたビールで乾杯し、班別・大学別に楽しい出し物が続いた。講義と討論に集中した日々を送つてゐた参加者も、時を忘れて過ごした一コマであつた。

### 第五日

(八月十一日・水曜日)

## 合宿を顧みて

合宿運営委員長・(株)日本興業銀行勤務 小柳 志 乃 夫 氏

氏は合宿の準備段階から開催期間中の様々な出来事を紹介され、「この合宿にはいろんな人の思ひが込められてゐるといふことを感じます」と語り、「皆さんはこの四泊五日間、どんな思ひがしたでせうか」と問ひかけられた。そして「四日前には見ず知らずだつた人と討論や班生活を通して次第に話ができるやうになつた、それはささいな経験ですが、心が通ひ合ふことの喜びを確かに経験されたことではないでせうか。しかし、最後まで心を聞くことができなくて、もどかしい思ひでこの合宿を終へる人、また講義内容が難しくついていけず悔しく思つてゐる人もゐるでせう。それはそれでよいのです。ただそのことをもう一度自分で確認して欲しい、悔しいと思ひ、それに立ち向かつていく、乗り越へようと努力することが

大事です」と述べられた。次に、この合宿で学んだこと、感動したことを更に充実させていくために、ここで会った友達と今後とも友情の和を深めて行つて欲しいこと、またぜひ本を読んで欲しいことの二点を呼びかけられた。そして読書の指針にと運営委員会で作成し参加者に配付した「読書の栞」を紹介され、その中から特に黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』・『新抄明治天皇御集昭憲皇太后御集』（角川文庫）を取り挙げて、「私は明治天皇御製から様々な人生の指針を得て来ました。ぜひ皆さんも読んでいただきたい」と述べられた。最後に「皆さんはこの合宿で様々なことを学び、様々なことを経験されました。その中で疑問点も沢山出て来たのではないでせうか。是非その疑問を自分の課題として持つて帰つていただきたい、そしてその疑問を今後読書を通して、また友人との間で問うて行つて欲しいと強く思ひます」と述べて話を終へられた。

#### 参加者感想自由発表

合宿教室も今やすべての日程を終了しようとしてゐるが、参加者がこの四泊五日間の合宿を通じて抱いた思ひを自由に発表する「参加者感想自由発表」の時間となつた。司会がこの時間の趣旨を説明し発表を呼びかけるや直ちに手が上がつて次々に参加者が登壇し、自らの思ひを参加者全員の前で語つて行つた。この合宿では様々な問題が提起されたが、それに対し「高校生の時アルバイトで参加したが、今回大学生として参加し、班別討論を通じて今まで考へたことのないやうなことを考へる事ができ、本当によかつた」また、「今までの自分の価値観を否定された。今まで自分が考へてゐたことが本当にそれだよいのか、もう一度考へ直したい」等の発言があつた。班における友達との交流に関しては「班の人達が自分の言葉を一所懸命に聞いてくれたのが嬉しかつた」、「様々なタイプの学生が参加してゐて驚いたが、その人達と自分の思ひをぶつちあつた。これは普段にはない貴重な体験であり、学校の友人にも伝へ来年もぜひ参加したい」、「言葉の裏側に相手の気持ちを感じるのには難しいことだと分かつた。しかし友達の気持ちを心からわかつてあげられるやうになりたい」といふ感想が発表された。短歌に関して「短歌創作・相互批評を通して、生半可な理屈は通用しないことが分かつた」「短歌には本当にそれを



詠んだ人の心がそのまま表れることが分かった」、また合宿参加が二回目になるといふ参加者から「去年の合宿に感動して今年も参加した。この合宿では自然に素直になつて心を開くことができる、こんな雰囲気のはめつたにないのではないか」「初めて参加した時はいろいろな反発を感じたが、今回は皇室のすばらしさを素直に感じることができた」、その外、自分の思ひを短歌に託して発表する学生、なかなか殻を破れず最後まで心を充分に開けなかつたことが悔しいと涙ながらに苦しい胸のうちを語る学生もあり、参加者一同胸を打たれる思ひで聞き入つた一時間半であつた。

## 閉会式

四泊五日の合宿教室もいよいよ閉会式となつた。参加者は各班において感想文執筆そして最後の班別懇談を終へ、集会棟に参集した。国歌斉唱の後、参加者を代表して九州国際大学法経学部三年佐藤公治君が「真剣に話し合へる友を得ようといふ呼びかけでこの合宿に参加しましたが、短歌相互批評の折、友がどのやうな気持ちでその歌を詠んだのか班員皆で思ひをめぐらした、そのやり取りの中に自分の求めてゐたものが確かにあることを確信しました」と挨拶した。続いて主催者を代表して嵯国民文化研究会副理事長・寶邊正久先生が「この合宿中、班での友達の言葉や講義での先生の言葉に何かを感じたといふ実感があつたらうと思ふ。その友達やその先生との縁をどうか大事にしていきたい。私達は生身の人間ですから、心が敏感に感じる時もあれば感じられなくなる時もある。しかし、あの時にあの友達のかういふ言葉に自分は感じたんだといふ実感は、自分を支へ自分を導いてくれるものです」と述べられた。そして明治天皇御製「もろともになすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき」を拝誦され、「どうぞ友達を大事にしてください」と呼びかけて挨拶を終へられた。

その後、大妻女子大嵐山高校一年小林祐子さんのピアノ伴奏により全員で国民文化研究会の前身日本学生協会の式典曲「神州不滅」及び行進曲「進めこのみち」を斉唱し、熊本商科大学商学部一年喜多村純君が閉会宣言を行つて合宿教室の全日程が無事終了した。

式の後、本合宿に献身的に協力してくださつた七沢自然教室職員の方々に参加者一同でお礼を述べ、互いに別れを惜しみつつ七沢自然教室を後にしたのであつた。

来 賓

東京大学名誉教授・文学博士

厚木市市長

厚木市教育委員会教育長

厚木市教育委員会学校教育部長

厚木市立七沢自然教室所長

助言者の紹介

元 日特金屬工業(株) 常務取締役

(株)公正不動産 代表者

(株)中央塩ビ製作所 代表取締役会長

元 政法大学人事部長

舞岡八幡宮 宮司

高千穂商科大学講師

東京短資(株) 顧問

宮崎産業経営大学経済学部教授

(学)尚綱学園監事

(株)不動産コンサルタント 代表取締役

元 山陽自動車学校 社長

(株)千代田コンサルタント代表取締役専務

航空自衛隊航空教育隊生徒隊第一教育科 教諭

神奈川県立横浜平沼高校教諭

宗教法人 乃木神社 祓宜

キユーピー(株) 財務部部长

東京医薬専門学校非常勤講師

方栄産商(株) 取締役石油営業部部长

(株)日産クレジット 社長室

新日本製鐵(株) 環境プラント部部长代理

拓殖大学 外国語学部教授

小田原市立富水小学校教務主任

(株)講談社 広告局次長兼広告企画部部长

(株)竹中工務店国際事業本部営業情報課長

神奈川県立湘南高校教諭 亜細亜大非常勤講師

三菱重工業(株) 監査役事務局

富山県立富山工業高校教諭

(株) B S 金明 代表取締役

東急建設(株) 東京支店 工務部次長

福岡県立新宮高等学校 教諭

亜細亜大学 助教

神奈川県立秦野曾屋高等学校 教諭

中島法律事務所 弁護士

九州大学医学部 循環器内科 助教

戸田建設(株) 開発事業統括部 開発計画部

関西熱化学(株) 研究所

熊本市役所 生活環境事業部 防衛庁 調本横浜支局 検査第一課

山本 茂夫

川路 光子

柴田 悌輔

古川 修

今林 賢郁

松本 幹男

岩越 豊雄

磯貝 保博

稲津利比古

山内 健生

島津 正数

岸本 弘

中田 一義

奥富 修一

小野 吉宣

東中野修道

原川 猛雄

中島 繁樹

小柳 左門

青山 直幸

天本 和馬

折田 豊生

鏗 信弘

(株)日本興業銀行 証券部 調査課

福岡市立原小学校主任主事

防衛施設庁 施設部 施設対策第一課

日産自動車(株) 宇宙航空事業部MLRS推進室

北九州市立八幡病院 放射線科技師

大阪府立交野高校教諭

東洋精密プレス工業(株) 営業部主任

出光興産(株) 店主室

福岡県立須恵高校教諭

三菱電機(株) 相模原製作所

航空自衛隊 中央航空通信群 通信保全隊

タマポリ(株)

(株)ルーツ

日本真空(株)

東京理科大学講師

安信住宅販売(株) 新宿センター

(株)千趣会

公務員

神奈川県立津久井高等学校(定) 教諭

日本青年協議会 研修局

熊本県立第二高校 教諭

農林水産省

小諸市役所 建設部建設課管理係

山岡 城子

小柳志乃夫

奈田 明憲

山根 清

内海 勝彦

森田 仁士

絹田 洋一

阿川 信次

広島 秀明

那須 三元

工藤 可哉

神谷 正一

吉川 理夫

最知 浩一

北浜 道

八木 秀次

松吉 基光

桐山 澄子

木村俊一郎

大日方 学

佐瀬 竜哉

今村 武人

森瀧 亮介

中澤 栄二

アダムンド工業(株)

熊本県立天草高等学校

東京銀行

三重県立四日市西高校非常勤講師

全日本学生文化会議

甘木公共職業安定所 管理課

Jダイナー東海

電源開発(株) 石川石炭発電所 発電課

陸上自衛隊幹部候補生

東急工建(株)

福武書店

合宿運営委員

指揮班 小柳 志乃夫・白濱 裕・八木 秀次・奥富 修一

大日方 学・阿川 信次・工藤 可哉・吉川 理夫

最知 浩一・久保田 真・岡山 英一

事務局 磯貝 保博・山根 清・中澤 栄二(事務協力者)

蘇原 幸枝(本会職員)

大妻女子大学嵐山女子高等学校一年 小林 祐子

日本女子大学附属高等学校一年 金刺 博美

青山 詩野

放送・記録班 松吉 基光

写真班 田上 富実子(九州造形短大研究生)

真田 博之

久保田 真

新屋 信隆

三林 浩行

清水久仁子

古川 広治

岡山 英一

佐藤順一郎

中富 仁

濱口 和久

茅野 輝章

大島 伸一

修一

修一

修一

修一

修一

修一

修一

修一

修一

修一

修一

修一



# 走り書きの感想文集

(各班別に収録)

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままに掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目的のものです。

さしのぼる朝日のごとくさはやかに  
もたまほしきはこころなりけり

考えること、感じることのすばらしさ

(拓殖大学 外国語 一年 浦田幸則)

自分の思想を持たずに目先の問題についてだけ考えていた自分に恥かしさを感じた。講義を聞いて同感するところや納得するところがあつたのに、班別研修のときには何も言いたいことが言えない。どうしようもなく切なかつた。でも、自分の欠点に気付くのは難しいと言われる中で、それを見付けることができたのは大きなプラスとなつた。考える、感じることのすばらしさをとつともなく感じたい機会だつた。これからまた大学の中でもまれ、おしあうわけだが、自分の考え、主張といったものを他人に伝えられるように、そして他人の気持ちも分かつてあげられる心を備えるように努力したい。

人生は自分で開くものなればこれからどうする浦田幸則

### 楽しかつた班別研修

(富山大学 工 二年 北川哲也)

これまで自分の学生生活に不満を持っていましたが、合宿が終わつた今では、素直な気持ちのままに生き自分の出来ることを精一杯やろうと思つて至りました。

今回、班別研修では何より楽しい時間を過ごせました。真面目に思うままを語りあうことの大切さを心に刻み込みました。

この合宿では何ものにも変えることのできない素晴らしい経験をさせていただきました。本当にありがとうございます。

友だちの語りし言の葉受けとめて我が欠点を省みるかな

### 素直に意見を言いたい

(金沢経済大学 経 三年 田近智久)

班別研修では自分の感想だけは述べたものの、班友の意見に対していろいろ考えようとするのですが何をしゃべつていいのか分からなくなり、班別研修に参加していかないような状態になってしまうことも初めのうちがありました。しかし地区別懇談会で、自分を合宿にさそつて下さつた中田さんが「恥をもつたらだめや」と言つておられ、また班員の北川君も「分からなかつたら分からないの意見があるんじゃないですか」と言つてくれたので、何か自分の中でいい子ぶつていたものがとれてしまつて、その後の研修から自分で質問をしたりして初めて参加したような気持ちになりました。これからいろんな人と話し合いをすることがあると思うので、これを機に素直に自分の意見を言いたいと思います。

講義中目をこすりつつ聞いているとひしひし伝はる師の熱意かな

## 厳しくも楽しかった合宿

(中央大学 文 四年 草野直樹)

今回初めて班長を務めさせていただいたのだが、自分の力の無さを思ひ知らされた。講義を聞いてみて感じたことを班別研修で思ふやうに言葉にできないで苦しんでみた班員がゐたが、助けることができなかつた。また、講義に感銘を受け班別研修のなかでもっと理解を深めたい、先生の最も訴へたかつたことに迫ってゆきたいと思つてみた班員にとつても、物足りない司会者振りだつたらう。

反省すべき点は多々あつたが、それでも合宿は楽しかつた。班友達と語りあつてゐると、疲れも時間が過ぎるのも忘れてしまふ。厳しくも楽しい四泊五日を過ごせたことを班員の皆に感謝したい。

閉会式直前に

「合宿が終りますね」と我言へば「これからですよ」と答ふる友あり

ありのままの心で感ずる

(愛知教育大学 教 四年 藤井倫明)

この合宿で一番強く感じたことは今までの自分がいかに寂しい心の持ち方をしていたかということです。多少の知識をもつて知つたかぶりをしていた自分を恥ずかしく思います。大学で世の謂わゆる「学問」を重ねるにつれて理屈っぽくなり空疎な議論ばかり好んで、本当に素直なありのままの心で

カメラ・レポート1



全国各地より続々と参加者が到着する。受付で名札と資料袋を受取ってから、各自の班室へと向かふ。

感ずるということをいつの間にか忘れてしまっていました。長内先生は「学問とは人間がいかに生きるべきかを学ぶことなんだよ」とはっきりとおっしゃいました。今までこのことは頭では分かっていた。しかし何かすっきりしませんでした。今回講義中の先生の姿を見、声を聞き、やっと実感できました。先生は頭の中で考えて口先で話しておられるのではない、心で話しておられると強く感じました。

神代より我が血に流る日本の誠教はありがたきかな

## 日本人であることを再確認した

（横浜国立大学 工 一年 齋藤 匡）

日本という国や日本の伝統などについて普段あまり深く考えることのない自分にとって、この合宿は自分が日本人であることと再確認するよい機会となった。

班別研修では他の班員の意見に圧倒されてなかなか自分の素直な気持ちを言葉に表せなかった。他の人の考えを聞いて自分もそう思っていたんだと気付かされることもたびたびあった。自分の気持ちを素直に出せる人を誇らやましく思い、感じていることをうまく言葉にできない自分に腹立ちをおぼえることさえあった。

しかし、短歌相互批評で歌の持つ素晴らしさや、レジュメの中の小説の一文に感動を覚えた。この感動こそがこの合宿最大の収穫であったと思う。

夜更けまで共に語らふ友どちの瞳に映るは我が心なり

## 価値ある人生を

（早稲田大学 社会科学 三年 高橋秀和）

導入講義で白濱先生が、そして占部先生が言はれたが、吾々の価値感はずいぶんに変化し、価値ある人生を見出せぬやうに成つてみるとこの四泊五日で痛感した。皆本質的には真剣な生き方をしたいと希つてゐるにも拘らず、何処かで茶化さないと気が済まない。「ヒルネダイスキ人間」の「イ」である「一応〜」と言って断定を避ける傾向は、断定的な生き方即ち一直線に突き進む生き方を避ける傾向だと思ふのである。自分の本質を見出すことを意識的にか無意識的にか避けてゐるのだと思ふのである。そして自分自身が「一応〜」の相剋から抜けられてゐないことを痛感するのである。

合宿を振り返って班友を思ふ

如何ならむ人ぞ班なりと不安抱きて班室へやに入りぬ

五日とふ日々は長きと思へどもふと気が付けば感想文書きをりぬ

それぞれ夫々の班友のこと色々々に思へば尽きぬ別れ難しとの思ひ

## 第二班——男子学生——

### 皇室の尊さに触れた

（亜細亜大学 国際関係 一年 行本勢基）

この合宿に参加してみても、日本の伝統文化の本質について



考える機会を得たと思っています。自分達の世代においては欧米の、特にアメリカの影響を少なからず受けています。そして自国の文化をほとんど顧みる機会を得られずにいます。そんな時、この合宿において、世の中で騒がれているような天皇制、右翼という次元を超越した皇室の尊さに触れることができたのです。日本の文化・伝統を我が国で一番体現されている天皇について学ぶことは本当に大切であると思われました。またその折々の和歌に触れてみると、その人がらの温かさ、心の広さに驚かされると共に、深い尊敬の思いさえもしてきました。TV、新聞などであれだけ身近な存在に感じられていたのに、実際何も知らずにいた自分が恥かしくなりました。

朝集ひ終はりし時の空見れば待ち望みたる青空なりけり

### 班員の気持に感激

(金沢経済大学 経 二年 高橋 寛)

このセミナーに来ての大きな収穫は、今まで会ったことのない人達との出会いであり、そういう人達と班別研修や休憩などで話し合ったという経験です。そうした経験の中で特に感激したのは、班別短歌相互批評において、自分の短歌を真剣な顔付きで見ても、何とかして僕が言おうとしていることをよりはつきりと短歌に表現できるように意見を出してくれた班員の気持に触れたことです。

みなさんの感想聞きて我思ふ皆のふかさと自分のあささ

カメラ・レポート2



主催者を代表して、(社)国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「この合宿では、心を聞いて自分の思ひを班員に語りかけて下さい」と挨拶された。

## 悔やまれた

(金沢工業大学 工二年 高寺忠雄)

本当のところ心の中では「こんな難しくてかたくるしいことなんか知らなくていいや」と思っていたのです。しかし、班別研修を重ねていくうちに、今まで世の中の大事な事について真剣に考えていなかった自分がはさしくなり、合宿の後半からは講義をまじめに聞きました。でもやっぱり分かりませんでした。でもわずかながら感じたことを自分の身のまわりの事とあわせてなんとか発言しました。班のみんなは大きいと発言していたのに、自分は緊張しっぱなしでした。もう少し新聞やニュースを見ておけばもうちよつとしっかりした意見が言えたのにと悔やまれました。合宿が終わった後もこの気持を忘れずに日々修煉にはげんでいこうと思えました。

真夜中の寝言飛びかふ班室で今夜も起こされひとり眠れず

## 目がさめた

(関西学院大学 文二年 竹岡 淳)

心の安寧と潤いを得ることができた。日頃の生活において左翼の人士と知識と理屈だけの不毛の議論を繰り返してきた私は、当初、この合宿の意味を勘違いをして、肩ひじを張ってどんな論戦が待ちかまえているのかと、胸を高ぶらせながら七沢の地に乗りに込んできた。しかし、その姿勢のあやまち

を長内俊平先生に正され、ようやく目がさめた。わずか五日という短い期間で、自分自身ではっきりと自覚できるほど己れが変わったのは生まれて始めてのことである。そして心から共鳴し合える友や年長者と出会えたこと。これまでそのような人々と出会えなかった私は大学生活において、一人悶々と苦悩し続けてきた。しかし、私の地元にも私と志や理想を同じうする方が地道に活動しておられることを知り、救われた思いがした。

京都女子大小森美智子さんの感想発表を聞き

乾きたる我が心根に壇上の乙女の涙しみ渡りにけり

## 感謝の気持で一杯

(宮崎産業経営大学 経二年 永石白馬)

人間、人生、世界、魂、心、感じる、考える、想う、などというようなことを、心から話し合えてすごく嬉しかったです。自分の無知で未熟なままの思いこみ、思い上がりは真実どころか、結果を何も生まないんだなあとしみじみ思いました。この物質文明の渦まく現代社会にあつて、何が真の大切なものなのかが忘れられつつある中で、このような団体があり、こういう風にして合宿がもたれていた、というのを知り、何かこう嬉しくてたまらない思いがしています。今回この合宿に参加でき心から感謝でいっぱいです。班の人達と語らい、交わり、本当に嬉しいひとときをもたせて下さって涙いっぱい、の気持です。本当によい機を得て、心がまた息をふきかえ

した心境です。ありがとうございます。

合宿のくすしき教へにえも言はれずげにわが魂のうれしかりける

## 印象に残った小柳先生の御講義

（拓殖大学 外国語 三年 千葉竜太郎）

短歌創作ではけっこう直されたが、自分なりにも楽しめたという感じだった。本当に感じて、本当に感動して歌を詠むことを学ばされた。心を働かせ本を読むことも学んだ。

小柳先生の御講義が印象に残った。今まで天皇家というものをなめていた自分が先生によって見方を変えてくれました。天皇家のやさしいキャラクターというものが伝わってきた。もう一つ。国旗掲揚で注意されたが、はずかしい気持はなくインターナショナルなことを一つ学んだ。最後の感想でも自分の気持が言えてすっきりした。友達もできた。班別研修ではおちついて物事が言えるふんいきでよかった。

小柳先生の御講義をききて

すばらしき師のご講話を耳にして今までの我を反省したり

国旗掲揚のとき

眼たげな目をこすりつつ見上ぐれば美しき旗に我国感ず

国がらとは感じるもの

（九州大学 工 聴講生 松岡篤志）

「首相の親任式」とは天皇陛下が親しく任じ給ふところに大切な意義があるのであり、マスコミが使ふ「任命式」で



厚木市長・足立原茂徳氏から「この厚木・七沢の地で、生涯にかけての師と友人を見つけ下さい」とご挨拶いただいた。

は全く意味がなくなつてしまふ」との小柳先生の言葉にはつとさせられた。この合宿では感じることに、心を働かせることの大切さを一貫して学び、小柳先生も「国がらとは考へてわかるものでなく感じるものだ」とおっしゃつて皇太子様をめぐるお歌を心をこめて拝誦し、御自身が強くお感じになつたことを実に言葉豊かに語つて下さつた。そして吾々はそのお歌とお話を通して皇族の方々のお心に触れ、正に「和氣を催す」やうな感慨を覚えたのである。そして自分が美しいと心から感じたものが覆ひ隠されたり、誤解されてゐれば、瞬時にその非、誤りをも捉へること、それが「感じる」ことではないかと思つた。

合宿も閉会を迎へ七沢の空を覆ひし雨雲晴れゆく

### 皆んなグワン張れよ

(山口県立高森高校教諭 宝辺矢太郎 41歳)

面白く活気のある班であつた。四十のおっさんである事も忘れ、話し合ひの輪に加はつてゐた。皆、飾らず、自分の氣持を真直ぐ語つてくれたと思ふ。講義は本当にどの御話も素晴らしく、皆の口から感動の言葉が溢れた。特に菅原先生、小柳先生の歌を通しての御講義の後の皆の声は、頭の操作からは生まれやうもない真実に満ちてゐた。感じる自分の心の再発見に驚き喜んだと言へやうか。せつせつと語つてくれた松岡君、なかなかの論客の竹岡君、よくノートをとつて一生懸命に語つてくれた永石君、なくてはならない潤滑油であつ

た千葉君、いつもにこやかで飾るところのない行本君、朴訥豪快な高橋君、寡黙だけれど何ともいい笑顔の高寺君、諸君らに会へて幸せでした。皆んな元気でグワン張れよ。

つらくともころつくしてすごしたる日々思へばなみだぐましも

### 第三班 男子学生

いろいろな考えを知つた

(長野大学 産業社会 四年 長島正武)

私は知人の紹介でこの合宿にやってきました。自分が何をやるべきか、何をしたいのか分らずに悩んでいる人は参加すればためになると聞きましたが、私はやりたい事もあるし、進む道も自分なりに考えを持つているつもりなので、合宿に参加する必要は無いと思ひました。正直に言うところ、義理で参加したのです。参加の動機がこういうことなので、実際に講師のお話しを聞いても涙を流して感動するどころか印象にも残っておりません。ただ、いろんな大学の方達と話していて、いろんな考え方をしている人がある事を感じました。それだけでもこの合宿は無駄ではなかつたと思ふことにします。

七沢の自然のごとくふるさとの山も昔と変らざれと願ふ

やる気がなかったので苦痛だった

(金沢経済大学 経 二年 高橋博昭)

この国文研の合宿があると知ったのは、大学一年の時でした。先輩から勧められましたが行く気がありませんでした。今年に行く人が決まっていたせいか話しかけられませんでした。でも、先輩が就職試験のため行けないから、急ぎよ自分が行くことになりました。先輩の話からは大したことないと思いましたが、予定表が届き開いて見るとスケジュールがつまっていました。これは地獄だと思って来てみると、やはり地獄でした。やる気が無く来たもので、講義の間も苦痛で眠たくてしょうがありませんでした。国文研の皆さんの話は右よりなものなので、どちらでもいい、しいて言えば左よりの自分にはついて行けませんでした。でも、この合宿で、やる気が無ければ何をしても無駄だということ学びました。

山の中見渡す限り山山山時には山もいものなりけり

胸を張れるよう一所懸命生きたい

(富山大学 工 二年 浜多広輝)

僕の合宿の目的は、多くの人達の話聞くことでした。特に学生時代を一所懸命に過してきた人の話を聞いて、何か一つでも刺激になればと思えました。最初の目的の通り、多くの人のいろんな人生を見て聞いて、とても楽しかったです。自分が今度は学生時代を振り返って一所懸命やっていたなと



合宿運営委員長の(株)日本興業銀行勤務・小柳志乃夫氏が、四泊五日間の研修を過ごす上での心得を述べた。

胸を張って言えるようにこれから頑張ります。

また、今回の合宿でも驚いたのは、班長の銚さんが短歌で僕たちの事を友と詠んでおられたのが印象に残りました。20才も年下の僕たちを同等とみなしてくれた銚さんに感謝するとともに、自分も20年、30年後、そのような態度で接していきたいです。

班員と語りあひつつ食べる飯はしが進んではや三杯目

### 語らいの中で学ぶものがあつた

(金沢工業大学 工 二年 大原伸成)

講義の内容は非常に難しく分からないことがほとんどでしたので講義の最中に居眠りをする場面も多々ありました。

この合宿で他の方々の意見を聞き、自分の考えが変わつたと言ふことはありません。しかし、有意義じゃなかつたという訳でもありません。班員、班長さんとの語らいの中で学び得るものがありました。これだけでも、ここに来た甲斐があつたと思います。自分には天皇制がどうか、右翼だとか左翼だとかはあまり興味がありません。天皇が歌われた短歌がすばらしいと感動した訳でもありません。講義の内容でははつきり心に残つて今後の自分の人生を左右するものはないのですが、他の地域の方々といろんな事を話し、語り合えたのは良かったと思います。

すばらしき緑の深き山々に晴ればれしたり空も心も

### 短歌を作る喜びを知つた

(拓殖大学 外国語 二年 妻籠延寛)

私が合宿に参加して得たことは、まず初めに、短歌を作る喜びであり、そして、同部屋の人といろいろな話をできたことです。

七沢の緑の森に陽が映えて心も晴ればれ最終日五日目

### 全国の友と知り合えた

(拓殖大学 外国語 三年 石田 知)

合宿の収穫といえば、全国各地の大学生や社会人と知り合えたことだと思う。最終日を前にした夜、班の人たちと酒をくみ交わすことで初めて心の交流があつたんだと実感した。自分の場合はいやいやこの合宿に参加したので、一つでも収穫があつたことは大きな意義があると思つた。

合宿は自分の考えとはあまりにもかげはなれていようだったので、講義の時間はただただ耐えることだけを学んだ。これも収穫の一つと言えるのかも知れない。

非常にすらくきびしく疲れる合宿であつた。

考への全く違ふ合宿にもう来るまいと心に誓ふ

## 村松、佐伯両先生の御講義に感動した

(防衛庁調達実施本部 鏝 信弘 40歳)

村松、佐伯両先生の病を押しての御講義に深く感動しました。特に村松先生の御講義は淡々と静かに語られる中に却って心をゆるがされるものがありました。昭和天皇が日本には日本人が独自に考へた良いものがあることを示された、即ち明治天皇が天地神明に誓はれた五箇條の御誓文を示されたのが、「新日本建設に関する詔書」であることを指摘されたが、このことはよく考察するべきことだと思ひました。また、佐伯先生の日本文化の深層、日本人の共通意識の中には古神道的な要素があるといふお話には共感しつゝ、お話を聞きました。

み病を押して我らに語らるる師のみ思ひを偲びまつるも

明治天皇天地祇に誓はれしみ旨受け継がむとふみことのりぶみくり返しみことのりぶみ誦しつゝ、倦まずたゆまず進みてゆかむ

### 第四班—男子学生—

自分を見つめることができた

(金沢経済大学 経 四年 近間常孝)

この合宿は初参加で、不安や期待まじりの中、飛びこんできました。これまで大学生生活でまじめに話す友もそれほどお

カメラ・レポート5



「合宿導入講義」。熊本県立第二高校教諭・白濱 裕氏は「現代の大学生は個人の世界に埋没し、いかに生きるかを自分の感性を働かせて真剣に問ふことがなくなってゐるのではないか」と問題提起された。

らず、学校の先生と話していても価値の相対化が深まるばかりで悩んできました。雑誌を読んで、同じような悩みをいだく学生と心を聞いて語り合いたい思いで参加いたしました。参加してみても、スタッフの方々と班長さん、班付きの方々の大変な御尽力に、今ではありがたく感謝しております。短歌では、なかなか思いを表現できず、またそれを相互批評で直されるとときには、言つて下さる人の気持ちも考えず投げやりになつたりしてしまい、なかなか素直になり切れずにいる自分をみつめることができませんでした。これを持ち越えることは難しいですが、次回までに鍛えて参加したいと思ひます。

長内先生の講義にて

語らるるひとつひとつの言の葉によみがへりしは父と母なり

短歌の相互批評にて

越えられじ閉ざす心にむちうたむ無邪気な心に戻りたきなり

## 新しい発見

(金沢工業大学 工 三年 佐藤 隆)

合宿期間中も不満は消えませんでした、「新しい発見」、自分と同じような思想の人間からは決して生れることのない考えに気が付かされた点はよかつたと思ひます。ただし、パンフレット等を書いてある「この合宿を通じて心から語りあえる友をえよう」と言う事を本当により深く実施するのならば、レクリエーションの時間をふやしたり、班別研修の時間をもっと多くとるべきだと思ひます。特に講義の数がこれほ

どあると消化不良を起こして身についていかないと。最後の夜は、班の中で夜遅くまで色々な意見をかわせた事は良かったと思う。とりあえず、もっといろんな事を考えて学んでいって、来年もう一度顔を洗い直して参加してみたいと思ひます。

長内先生の話しを聞きて

「豊かなる心」の意味をもう一度考へ直して心に刻まむ

合宿最後の夜に班員と語りあつて

合宿の最後の夜にいつまでもつきぬ話しを友と語りぬ

朝風の音を聞きつつ約束すもつと学んで再会したし

自分の話を真剣に聞いてもらえた

(亜細亜大学 法 三年 松井 章)

いろいろな地域から集つてくる人々の話を聞き、自分の思ふ所を語り、相手の答へを少しでも理解したい。そんな気持ちで参加しましたが、講義や素晴らしい仲間の言ふことが、どれだけ理解できたかは疑問です。しかしこの合宿で、自分の稚拙な話を真剣にきき答へてくれる人々に出会へたことは自分の人生に大きく残る出来事となり、また一歩進むための大きな推進力になると思ひます。普段あまり本も読まず、疑問に真剣に取り組むことを怠つてゐるため、しつかりとした意見や感想を出せず、苦勞しましたが、自分の気持ちを出来るだけ素直に発表できるやうに努力したことは、非常に良かったと思ひます。合宿が終つてもこの気持ちを忘れずに、日々



努力して行きたいと思ひます。

杜の中共に語りし良き友のそれぞれの夢何時か叶はむ

何時の日か叶へし夢を持ちよりて七沢の地で再び会はむ

## 観念的に国のことを考へてゐた

(九州大学 文 一年 井野口武志)

この合宿では、自分の学ぶ姿勢について考へさせられたやうな気がする。多くの御講義の中でもとりわけ長内先生の御講義が非常に印象的であつたが、それは「判らないこと」を判らないと感じること、また言ふことが自分でできてゐないのではないかといふことである。自由感想発表では他の人の言葉から気づかされたことを明確に人に伝へようとしてゐる諸先輩方に感動した。長内先生が国をおもふといふことは自分の両親・兄弟・友人のことをどれだけ痛切に感じるかであるといはれたことを思ひ出すと、自分は国のことを考へるといふのを非常に観念的に考へてゐるやうな気がした。国をおもふとはどういふことであらうかとは一向に考へなかつた自分、判らないことをなほざりにしてきた自分に腹立しさを感ずる。

長内先生の話しを聞きて

わからぬをわからずといふことこそが賢しきわざと先生かたりぬ

自由感想発表

ともびとのつつみかくさぬ告白に吾がいつはりもおのづと知らさる

カメラ・レポート6



合宿一日は、「朝のつどひ」で始まる。七沢のすがすがしい空気を胸一杯に吸って、眠気を覚ます。

## 自分自身と正面から向かい合った

(福井工業大学 工 四年 鈴木康之)

合宿に参加するのは二回目なので結構リラックスして臨めたと思いますが、班別研修では意見はあまり言えず、心から自分を相手に表現しきれなかったと思います。しかし最後の夜は誰も眠ろうとはせず、朝方の四時半過ぎまで話し合う事が出来ました。その時うれしく思えたのは、天皇・政府等の話の内容よりも、それをお互いに考えている行動であり、その時は自分も年下の学生にも恥じらいなく本心から質問する事も出来ました。先生の講義を聞いて歴史や文学を覚える事よりも、自分自身と正面に向かい合った事の方がプラスになったと思います。最終日の意見発表の時に自分と同じ様な意見を涙を浮かべながら述べる女子学生に深い感銘をうけました。自分に自信が無くなりかけた時には合宿に参加したいです。

自由発表にて

我が思ひ言葉つまりつ女生徒の語る思ひとひとつなりけり  
胸のうちきつくハンカチにぎりつつ語る乙女の涙忘れじ

## 熱き人生論を語り合った

(拓殖大学 外国語 二年 山口尊之)

班別研修では、自分が何を言うべきか考えているうちに、別の話題に移ったり戻ったりするのでとても追いつめられた感じだった。次第にグループの人と話をするうちに相手の性

格などがわかり自分から問題提起をしたりするのに夢中になつていった。ただ話し合いで相手を納得させるほど知識も無く常に自己訓戒を心の中でしていた。班別研修は自分の中に新たなジャンルとしての知識向上を目標めさせる貴重な体験の場であり、今後の学業に結びつけた。四日目は熱き人生論を共に話し合い、今後とも何らかの形で接点を持つていこうと言われちゅうちよなく握手を交わした。三林さんも同じ気持ちになって自らの経験を語ってくれたので年齢差を超えて対等に話すことのできた自分に自信が持てた。

価値観は違ふけれども熱き目で同じ経験語る若人  
口でなく心が通ふ一時は口では言へぬ感動起こる

## 感動のある人生を送りたい

(三重県立四日市西高校非常勤講師 三林浩行 27歳)

小柳陽太郎先生は御講義の最後に「お互ひの国柄の美しさを感じ合ふ所に本当の世界平和がおとづれるのではないでせうか」と言はれた。長内先生は「おいしいものを食べたら、お父さんお母さんにも食べさせたいと思ふでせう」と言はれた。僕はそのやうなことをこれまで一度も思ったことなかった自分を知った。三日目に短歌相互批評の時間をつくったのはとてもいいことだと思った。以前よりかなり早く班員と打ちとけられた感じを持った。

感動のある人生をおくりたし、豊かな心”の意味思ひつつ  
緑なす七沢の地でとてもいい友達得たりなんとうれしや

また色々課題ができた

(福岡大学 人文 二年 岡田 聡)

何か自分が変わって来た様な気がする。人と接する際にも少しづつ相手のことを考える様になったのは、昨年の合宿での経験から今までの思索の結果なのだろうか。今回参加するにあたっては前回にこりて講師の考えていらっしやることを少しでも感じ取ろうと言葉一つ一つに注意しながら聞くことと思っていた。実際はなかなかうまく出来なかったがそういう意識を持つようになったのも少しは進歩した証しだろうか。合宿に参加してまた色々課題を持つことが出来た。さらに感性を磨くよう努力すること、吉田松陰先生の御文章を班で輪読して「講孟劄記」などを読んでみようと思ったこと、また「万葉集」などのその他の古典も勉強しようと思っっている。

今朝歩きふと思ひたり我もまた挨拶出来ぬ現代人かと

取り入れられたものがある

(拓殖大学 外国語 三年 川崎良典)

一昨年も参加し今回で二回目となる。この七沢での合宿、前回はもう二度と来ないぞと思っ合宿を終えたのにまた今年

カメラ・レポート7



二日目の午前、福岡県立太宰府高校教諭・占部賢志氏により「この人を見よー若き日の体験と課題ー」と題された講義が行われた。氏は本居宣長、また吉田松陰の若き日の姿に触れられ「自分の課題に真正面から取り組む青年そのものの姿は、私達を惹き付けて止まない」と語られた。

も来てしまい、苦痛の日々を過ごしてきました。前は何も得るものがなく、つらかった日々思い出し心に残ってはいませんが、今回はなんとなくではあります。何か自分自身の中に取り入れられたような気がします。今回は絶対に来ないぞと思っている中、ふといつの日かこの場に來ているのではないかと思つた自分が不思議です。でもこの合宿には何かそう僕をひきつけてくれるものがあるのです。

感動も共感もなく終へたのに何か不思議な魅力を感じる

心で感じる事ができた

(横浜国大学 経営 二年 野崎 譲)

一 昨年での合宿では、講義、輪読、討論や慰霊祭といったものを形として覚えるというか頭の中でとらえ考えるといったことで終わっていたものが、今回はそれらのものを心で感じるといったことができたように思います。佐伯彰一先生も言っておられたように、私達日本人の「共同の無意識」という深い心の層を発見し、守ることが大切であると考えます。無意識を意識すること—この難しい、私達に課せられた作業の下準備のようなものがこの合宿で生まれた、そんな気がします。

晴れわたるその空見れば昨年熱き夏の日の思ひ去来す

朝起きて晴れわたりける青空を見上げれば心すみわたりゆく

読書をしていくぞ

(福井工業大学 工 二年 杉山正洋)

五日間の生活の中で最初はただ漠然と来ていただけですが、自分自身の課題を見つけることができました。それは読書をするということです。自分は普段の生活から本を読むということをしませんでした。そんな中で先生方の御講義を聞き、班別討論をする時、言葉や知識の足りなさから自分の意見をうまく表現できなかったり、みんなについていけないところがありました。こういう時、自分はいへんくやくしく、またとてもなさけない思いをしました。そしてこの合宿に参加して一つ成長しようと思ひ読書しようと思ひ決意しました。最初は少しずつ簡単な本から読んでいこうと思つています。最後に一つ言えること、それはこの合宿に参加できてよかったです。

合宿で学びし事を明日からの生活の中に生かし行きなむ

自ら動くことの大切さを学んだ

(新潟大学 医 一年 幸田久男)

この合宿に参加していきなり頭からバケツ十杯分くらいの水をかけられたような気がした。大学に入学してからの三、四か月間、何となまけていたのだろうかと痛感した。

一日、二日とたつうちに議論というもののおもしろさみた

いなものが分かってきた。今までの自分は今ある状況を不満に思いながらも妥協し、自分以外の何かが変えてくれるなどと考えていた。だがそれでは何も変わらないことを知った。自らが何かを提案、議論あるいは実行をしてはじめて変化がおこることを学んだ。これからの自分の行く末に指針を与えてくれたこの合宿に心から感謝したい。

班友と共に語りひし五日間かくにうち足りし時我知らざりき

## 和歌についてじっくり学べた

(早稲田大学 教育 四年 鈴木由充)

今回の合宿では和歌についてじっくり学ぶことができたことが最も心に残っております。水産高校生の歌、皇太子殿下をめぐるお歌、防人の歌……。「心を働かせることは大切だ。」ということは知りつつも日々の生活の中ではついそれを怠ってしまいます。

小林秀雄先生のお話で「理想」と「空想」ということができてきましたが、実に「理想」というものは切実な実感や体験の中からしか出て来ぬものであり、それ故に自らの抱える悩みや問題点、課題点などはそれこそ自らを深く省る中からしか生まれて来ません。そして本当に心の底から感じることが見つかつたならば、必ず一歩足をふみ出すことができる筈です。その自分を見つめ、更には相手を思いやる心を培うものが短歌、しきしまの道であることを深く感じました。

カメラ・レポート 8



講義の後は各班に戻り、講義についての感想や疑問を真剣に語り合ふ。

「自己を知る」ということは本当に難しい。人の創った和歌を詠んだり自分で和歌を創ってみると如何に自分の気づかないことが多いか、自分を誤っていることが多いか、深く考えていないことが多いかに気づく。

長内先生が「本物の和歌を詠むこと」とおっしゃられていた。これから日々明治天皇御製を詠み味わいつつ、折にふれ歌を詠むように心がけたいと思います。

皇太子さまをめぐるお歌を拝して

すめみ  
天皇の深き慈愛に包まれてお健やかにぞ育たれし皇子はも

豊かな心を失つてゐた

(株)福武書店 大島伸一 25歳

知らぬ間に豊かな心を失つてゐる自分に気がつき悔しく思ったことが今回の最大の収穫であるかと思ひます。この悔しさをしっかりと胸に刻み、心を働かせる訓練をしていきます。短歌をこれから半年毎日詠む、過去に縁のあった人たち(合宿ないしサークルで出会った友ら)に葉書を書く、この二つを早速今日より実行します。

来年の合宿には清々しく大きな期待を持って臨むやうにいたします。

学生の時の気持ちを思ひ出しけふより半年毎日歌詠まむ

## 第六班 男子学生

慰霊祭で自然に頭が下った

(宮崎産業経営大学 経 一年 居波忠信)

私は高校の時から「君が代」を歌うのをさけてきました。その理由は、現代社会の中に載っていた「君が代」の意味は天皇万歳のみを歌う歌であると知ったからです。

しかし、この合宿の講義の中でその意味が間違ひであることに気づかされました。昭和天皇の御製を読みその内容の深さに考えさせられるものがあり、自分で和歌を作る難しさを知った後だったので、より一層考えさせられました。

戦争により自国を守る以外に道がなく、祖国を守るために命を失つていった先人達についての御講義の内容の深さは忘れることが出来ません。その上で行った慰霊祭では自然に頭が下がりました。

慰霊祭にて

この国の御盾となりし御元祖らの苦難を思ひ 頭下からむ

合宿の熱き思ひを胸に秘め明日への一歩いざ踏み出ださむ

今後の人生に生かして行きたい

(福井工業大学 工 三年 榎山英範)

このセミナーに対して初めはあまり良いイメージを持って

はいませんでした。そして実際に来て講義を聴いてみると、やはり九〇分間という時間は学校でいつもなまけているせいかつらいものと感じられました。しかし講師の先生方の熱意のこもった話には、眠くてもしつかり聴かなくては、という思いをさせてくれるものがありました。又、講義後に行われた班別研修でも、班員すべてが自分の意見をしつかりのべ、わからぬところは教え合う、というまさに心の底から話し合えたのではなかるうかと感ぜずにはおられませんでした。この合宿で学んだことを今後の人生に生かして行きたいと思っています。

時たつが早きものと感ずるは苦勞し終へた為であるらむ

### 理想を吐ける人間になりたい

(早稲田大学 政経 三年 田中裕一)

感想発表の時、吾が大學の高橋君が「それぞれの立場で戦つてをられる方々の姿は美しい」と言はれるのを聴き「私もさうありたい、さうあらねばならない。」と痛感しました。登壇された諸先生方、小田村先生はじめ國文研を擔ひ繼承し續けて來られた方々は、己を使命を體を張り命をまかけられ全うされむとしてゐます。顧みて私はどうであらうか、自らの「天命」を體得してゐるであらうか、また己が職分に精魂込めて打ち込んでゐるであらうか、否、相も變はらず迷ひ、或ひは小林先生のため「空想」の世界をブラついてゐるだけでありました。先生方のやうに、地に足をつけてしつかりし



食事も各班ごとに食卓を囲む。おいしい料理をいただきながら、会話も弾む。

た「理想」を吐ける人間になりたいと切實に思ひます。来年一まはりには必ず大きな人間になって來ることを誓ひます。

### 詠草

ますらをの悲しき命を受け繼ぐは吾等われらをおきて他ほかあらうめやは

### 六班の皆さんまたお会ひしませう

(甘木公共職業安定所 古川広治 27歳)

厚木市の皆様方、病を押して登壇された村松先生、佐伯先生、国文研の皆様、そして運営委員の皆様、ありがとうございました。

六班の皆さん、またお会ひしませう。班付の折田さん、短歌の批評ありがとうございました。

ひさびさに青空のぞけし空に高く日の丸のはた風にゆらめく

### 一日一日が感動と反省の連続

(拓殖大学 外国語 四年 玉谷豪俊)

松本先生の紹介ではじめてこの合宿に参加いたしました。が大変深い感銘を受けました。御病気を押されての村松先生の御登壇をはじめ、合宿の意図するところもわからずに各地より集まった学生を一つにまとめられた運営部の方々の熱意と御努力、この日本の国を思い、日本人の心を正して行かれようとする諸先生方の熱い御心の一端に触れさせていただき、又、その御姿に触れ、一日一日が感動と自分に対する反

省の思いの連日でした。又、班別研修という場は特に、自分にとって大きな勉強になりました。

またぜひ参加したいと思ひます。できれば自分の友人を誘つてこれたらと思ひます。この学びを日々の生活の中でさらに深めてゆきたいと思ひます。

壇上で涙流し語る友がらの真摯な姿やいとまぶしかりけり

### 勉強を今のうちにやる

(静岡大学 人文 一年 幡掛正泰)

「長いようで短い」これがこの合宿の感想の一つです。

はつきり言つてこの合宿に來る事は、いやでいやでたまらなくて、新幹線の事故が合宿の一日前に起こった時には「なんで一日はやいねん。一日ずれてたら合宿が一日減つて楽やつたんけ。」と真剣に思ひました。

しかし今振り返つてみると、確かに予想通りの内容もありましたが、むしろそれを吹き飛ばすような事ばかりでした。

一番痛切に僕が感じたのは「勉強を今のうちにやる」という事です。先輩の人々の話や先生の講義などで、本当に今の僕が勉強していない事を思い知らされて、自分が情けなくなり、そう思うようになりました。

最終日にやっと夏らしい青空と太陽にめぐまれて

太陽の光を受けた五日目の私の心も晴れてゆくかな



## 第七班―男子学生―

社会にでても多くの人に接し心を豊にしたい

(福井工業大学 工 四年 吉川 浩)

自分は今回で二回目の参加になります。前回よりも班別研修で発言出来た事を嬉しく思いました。情ない事ですが自分は講義の内容が殆んど頭に入りませんでした。しかし班別研修は楽しくすごせました。日程や進行の仕方等、少々の不満もありましたが、生涯忘れる事の出来ない合宿でした。来年自分は社会人になります。社会に出ればいろんな考えを持った人がいる筈です。自分の考えが正しいと思っても妥協しなければならぬ事もあると思います。もっと沢山の人と接し、人の話を聞き、自分の意見を述べ、自分の心を豊かなものにしてゆきたいと思えます。尚講義の中で一番面白かったのは体験談でした。地元に戻ったら友人に話してあげたいと思っています。

心からおつかれさまのひとことを交せる友を多く作れし

短歌―風情あふれる日本の伝統―に触れて

(拓殖大学 外国語 三年 田中義孝)

最初は嫌々ながらこの合宿に初めて参加した私ですが、今最終日を迎えて、自分の魂が強いエネルギーに満ちているの

カメラ・レポート10



二日目の午後、評論家・筑波大学名誉教授・村松 剛先生は、ご病気の身を押し御講義をなされた。先生は敗戦後に発布された『新日本建設ニ関スル詔書』の冒頭に『五ヶ条の御誓文』が掲げられた重要な意味について、昭和天皇の御心をお偲びしつつ、お話しされた。

を感じます。これから続く日本人としての自分の人生の中で、選択に迷った時やどうしたら良いか判らなくなった時に、自ずと進むべき道しるべを得た様な気がします。又、沢山の先生方から伺った講義のおかげで、今迄解けなかったいくつかの謎を解決する事が出来ました。そして一番の収穫は日本文化に古来から生き続ける短歌を詠む喜びを知った事です。きつとこの合宿に参加していなかったら、自分は一生この風情あふれる日本の伝統に触れる事はなかったでしょう。

#### 合宿を終へて

風わたる木々が奏でる涼しき音を充実感とともに味はう

#### 自分で考え、感じる事の大切さを知った

(早稲田大学 政経 一年 福島康二)

全国から来られる人々の意見、考えを聞き、「何かを得たい」という思いで合宿に臨みました。参加して本当に良かったと思っただ事は「知識収集に陥りつつある自分」に歯止めがかけられた事でした。自分は様々な本を読む事がそのまま「心を鍛える」事になると考えていました。確かに物を考える時も本から得た知識は必要でしょう。しかしそういった知識を鵜呑みにして自分で考え、感ずる事を忘れてしまうのが一番怖い事です。「心を鍛える学問」とは様々な知識の中から、本当に自分で考え、自分で感じるという事なのであると、この合宿で気付かされました。

集ひ終へわが心ぬちに浮ぶるは「ありがと」とふこの言葉のみ

#### やさしい先輩の説明に感激しました

(金沢工業大学 工 三年 田村寿久)

この合宿へは先輩の紹介で「つれて来られた」と感じずに参加しました。合宿ではどの様な事をするのか判らず、不安になっていたところで合宿のスケジュール表をみますと講義の連続です。頭が痛くなりました。講話の時間、先生が話される事を友達はレジメにメモをし、班別の時にメモした事を発表しようとしていましたし、自分のレジメを開けると真白、何も書かれていません。何か講話の内容をメモしようと思いつながら、何も書けぬまま四日間が過ぎました。自分はこの合宿で何をしようとしているのか判らなくなっていたところ、最後の晩に三林さん(国文研)と話す機会がありました。三林さんにさきほどのレジメのメモの事を話したところ、自分にとっても判りやすく話をされてくれました。他の人には当り前の事かも知れないので内容には触れませんが、自分にとっては合宿に来て得た始めての喜びでした。初日に誰かに相談していればもっと楽しい講話の時間になったと思います。くだらない事だと思っただ事でも思い切つて聞いてみるものだと思います。

雨の中仕事をせんとカメラ持ちとやらを探す姿うつつくし

## 高校教員の方の講義が判りやすかった

(中央大学 文 四年 内田雄一郎)

自分がこの合宿に参加したきっかけは両親や叔父の強い勧めがあったからである。父母も叔父もかつてこの合宿に参加した経験があり、「お前もこの合宿で社会勉強をしてこい」と勧められたが、いまだに合点がいていない。「社会勉強」のチャンスは日常生活の至る所に転がっており、それを勉強と感じ、自分のものにしていくのが人間の本来の勉強と考えているので、この「わざわざ機会を設けて」という考え方に納得できなかったのである。合宿中に様々な講義を聞いたが、高校の先生の話は明朗で判かりやすかった。それに較べて、大学教授の話はひとりよがりですまらなかった。

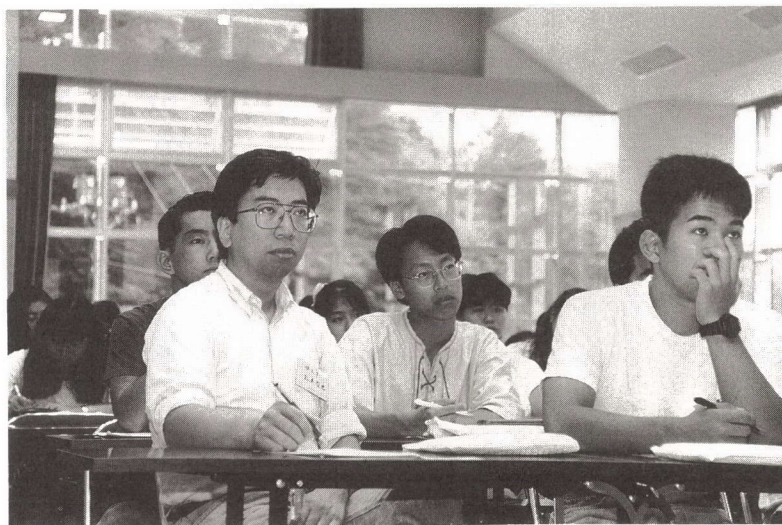
長雨の晴れて

霧晴て空青みゆく七沢の木立をゆらす八月の風

## 自分「心」の信じられる様努力したい

(宮崎産業経営大学 経 一年 中松典久)

短歌の相互批評で私の短歌が全て叙景歌である事が指摘された。私は自分の考えた事を素直に言葉にする事が出来ない様だ。言葉にした途端、自分の考えとは違ってしまいう様に感じられる。勿論技術的な未熟さも多分にあるだろうが、私は己の「心」そのものを信じていないのでないかと気付かされた。講義の折、引用された小林秀雄の次の文章が、こうした



村松先生の御講義を真剣に聞く参加者。

意味で私の心に強く残った。

「言葉の邪魔の這入らぬ花の美しい感じを、そのまま持ち続け、花を黙つて見統けてゐれば花は諸君に嘗て見た事もなかつた様な美しさを、それこそ限りなく明かすでせう。」己の「心」を信じられる様になつた時、日本人である私はきつと様々なものを見出すのではないか。様々な日本の美しい自然を、自分の心の内に持てる様、私は己の「心」を信じる努力を試みてみたい。

神代より変らぬ碧き大山に急ぎ流るる群雪の影

感動はほとばしる様に言葉となる

(電源開発株) 中富 仁 26歳

全体感想発表を聞きながら、合宿の講義に激しく反発した大学一年の頃や、知識で相手を納得させようとした二年の頃を思ひ出しました。當時を思へば空疎な気持ちだったのです。今は本当に感動し得た気持が、その人からほとばしるようい言葉となり、それが胸をうつのだと思ひます。

班員は皆良く頑張つてくれました。感謝しています。

吉川君

きびきびと班友の布団をたたみゆく君の姿はいとすがすがし

福島君

とつとつとおのが気持ち話しゆく君の言葉の我が胸を打つ

中松君

傘がなく雨にぬれむやと私のこと迎へてくれしやさしき君かな

内田君

大学に帰つて後のきつかけをこの合宿でつかめしといふ

田村君

講義中悩みし君の気持ちをば思ひやれず申し訳なし

田中君

無口なる君なれば胸内中伝はりしこと数多くあり

## 第八班 男子学生一

心を磨きたい

(東京大学 理工 一年 公文貴之)

「心をきたえる」、これは小田村寅二郎先生が開会の場におつしやられ、この合宿全体に通じた課題だつたと思ひます。言い換えると「感性を働かす」とか「頭ではなく心で物事を感じとる」ということになると思ひますが、御講義に來られた先生の誰もがこれらの言葉の意味を説いてこられたのだと感じました。僕は自分が生きていくうえで何を目標にすればいいのか、どうすれば毎日を楽しく過ごせるのか、とずっと悩み考えていました。しかし松井先生が御講義の中で、理想とは今いる自分の状況の中から見出すものだ、とおつしやいました。そしてそれを見出すにはやはり感性を研ぎ澄まし、心を働かせなければいけないでしょう。「心を磨く」この言葉を胸に、今後やつてゆきたいと思ひます。

七沢に集ひし友と別れ惜しみ語らひつきぬ夜更けるまで

### 本を読んで自分自身を変えたい

(日本デザイナー学院 一年 安部雅俊)

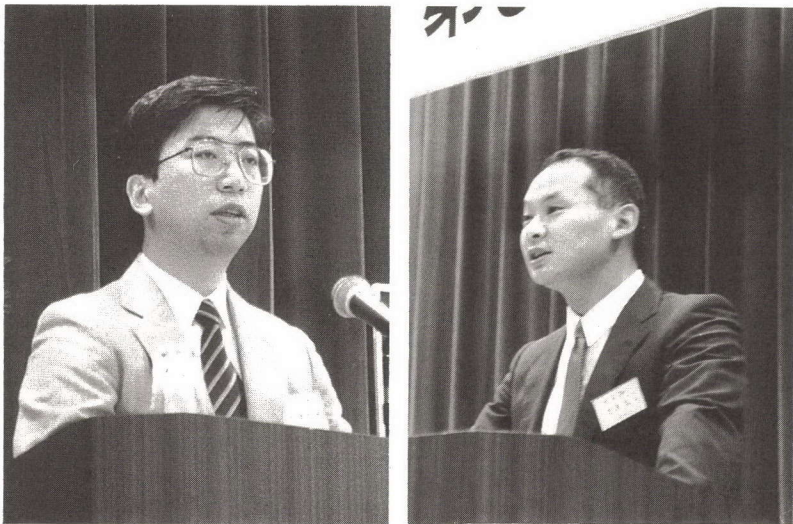
私がこの合宿教室に参加したのは、自分の目標を決定しなかったからです。私は自信が全然なく、人に会っても声をかける勇気がないのです。こんな事だから高校時代友達が出来ず、目標もなく、ただ家でじっとしている、そんな生活を送っていました。で、自分を変えようとこの合宿に参加した、先生方の御講義は自分はほとんど理解できなかった。難しすぎると思った。自分はこの体験で、もっと本を読まなくては、自分を変える為にきたんだから、と思った。私は「本を読んでいく」という目標を立てて、これからの日常生活の糧としてがんばっていきたいと思う。これと和歌の事だが、自分はまだまだ自分の知らないので、家で和歌を作っていく、自分を知り感性を磨きたいと思う。

これからは和歌をつくりて感性を磨き努力を続けゆきたし

### 今まで考えもしなかったことについて考えた

(福井工業大学 工 二年 水野智弘)

最初はこの研修に来るのがいやで、思ったとおり講義はむずかしく、他の学生達はかたくるしい人ばかりでした。初めのころは正直言って早く帰りたいかった。しかしたった四泊五



「青年体験発表」。福岡県立水産高校教諭・菅原亨二氏(写真右)は、航海実習の折に生徒が作った短歌を紹介され「短歌を通じて生徒一人一人の生き生きとした心が本当に判るやうになった」と語られた。

(株)日立製作所勤務・松井哲也氏(写真左)は、学生時代から読んでこられた小林秀雄氏の文章を紹介され「自分の身の丈に合った理想を見出すためにも、真に心を豊かにする学問をしてゆきたい」と語られた。

日のこの短い期間に、かたくるしい人達も明るい笑顔などが出てきて打ち解けていくことができた。そのおかげで友達もでき、途中からではあるけど楽しい日々をおくることができた。今日で研修も終わりですが、今になってみると講義中に寝てしまった事や、班別研修の時にあまり意見が言えなかった事が少々気にかかり、もっとしっかりやれば良かったと悔んでいます。思っていたより楽しくためになるし、今まで考えもしなかった国についてや文化について深く考え、みんなで話し合ったり色々体験したことのない事ばかり体験することができうれしかったです。

「こんにちは」山道歩く知らぬ人あいさつすれば笑顔が返る

### 辛いが実のある講義だった

(拓殖大学 外国語 三年 堀越孝行)

今回でこの合宿は二度目となる。毎日の俗的な生活の中に属している自分と、極めて久しぶりに学問をしている自分のギャップに我ながら驚いている。一昨年に一度経験しているものの、五日間の絶え間ない集中は他の何に勝るものもなくきつい。しかし、楽だが実のない大学の授業、辛いが実のある合宿の講義、果たしてどちらの方が自分のためになるだろうか。残り一年の大学生活の中でゆっくり検討してみたいと思う。

最近になって急にサッカーチームが沸き起こったが、世界大会の予選を目にした時、観客は皆日本の国旗を力強く左右

に振って応援していた。そこには国旗に対するこだわりがない。これからの日本はそういう自然な考え方が必要だと思う。刻々と山降りる時せまりくる自然教室の空は曇りて

### 何かをする意志を持ちたい

(早稲田大学 文 三年 小野恭史)

五日間山上にこもって修業した気分ですが、山を下りたらまた普通の生活が待ってゐる。その時はここで学んだことを忘れずに生活したいです。ここで学んだこと、いや感じたことは今ではもう普通の生活から失はれつつあるものではないか。しかし本当に人間にとつて大事なものである。小林秀雄先生の御文章に「感じることも学ばなければならぬ」といふことが書いてありましたが、私もさう思ひます。昔の人が自然に感じてゐたことを、今の日本人は忘れてしまつてゐるから、大事なものに気づかない。自然に感じることにすら器用になつてしまつてゐる。この合宿ではさういふことに気づかされます。「ああ自分は全然ものを知らなかつた」とか「日本でこんな国だったのね」といった感想が言ひたくなる。しかし問題は、それからどうするかで人間は違つてくる。自分から何かをするといふ意志が生まれなくてはならない。そこから行動を起こさなければならぬ。今のところ、かう考へてゐる。

七沢の森に集ひ来し若人ら心ゆくまで語り合ひたり

壇上で涙ながらに話しをる友どちの姿いとどたうとし

さらに学びを深めていきたい

（九州国際大学 法経 三年 佐藤公治）

私は昨年の阿蘇に続き、今回で二度目の参加となった。今回は事前準備から合宿に携わったが、この間いろいろ貴重な経験をさせていただいた。二度の登壇、特に閉会のあいさつに関しては大勢の人を前にして自分の思いを述べることの難しさ、そしてあの緊張感といい思い出となるだろう。

さて、今回の合宿で自分の印象に残ったことは、初日、二日目の白浜、占部両先生の講義の中で、いかにして「機会」を得るかということ。この点に関していうと、私がこの合宿を知ったのは雑誌の広告という「機会」であった。メインである短歌相互批評は、自分の創作した短歌の批評をうけて考えさせられた気がした。

昨年の阿蘇合宿以来、何度か合宿に参加したり輪読会等で学んできたが、この合宿を契機にさらに学びを深めていき、来年の阿蘇合宿に参加できればと思う。

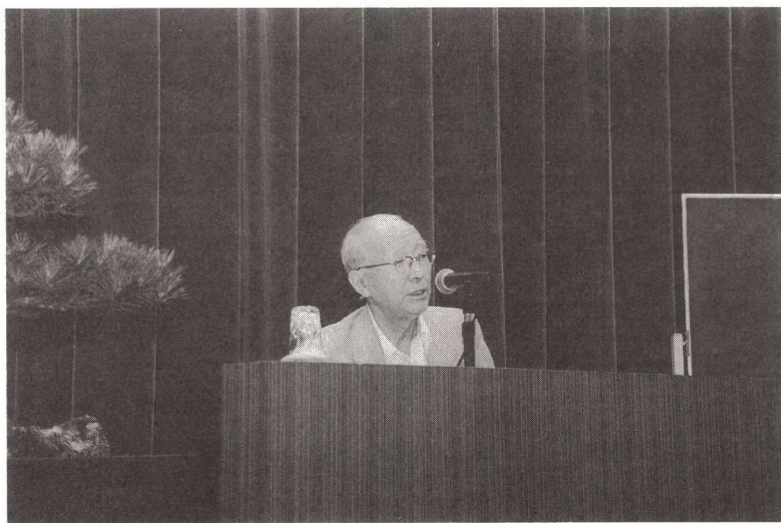
合宿を思ひ浮かべてこれからも学ぶ気持ちを持ち続けむ

現実的な視点もまた忘れるべきではない

（福井大学 工 四年 山本 明）

いかにやさしく愛すべき人でも、指導者は自分の理想のために国民を苦しめてはいけないと思います。スポーツや芸術の世界では、成功してもしなくてもその理想と努力は評価さ

カメラ・レポート13



三日目の午前、「日本文化の深層」と題する、文芸評論家・東京大学名誉教授・佐伯彰一先生による御講義がなされた。佐伯先生もまた御療養中の身であられながら御出講下さり「私達は紛れもなく雑種文化の中に生きてゐるが、心の深い層の中には“共同の無意識”のやうなものが流れてゐるのです」と御指摘になった。

れるべきです。しかし政治を行う者にかぎっては、冷酷なようですが、結果が出なければその理想も努力もなかったことと同じになると思います。

文化・伝統などはたしかに科学的な視点でははかれません。しかし、政治というものはきわめて散文的なものであり、文学・芸術と同じ視点で考えることができなと思います。「心」で感じることも大切ですが、現実的な視点もまた忘れるべきではないと思いました。

ひさかたの雲の切れ間の青空に我こちよく空をながむる

「慰霊」は歴史の核ではないか

(福岡県立須恵高校教諭 那須三元 36歳)

今回は大いに学生の人達の考えを聞くことができ、また大変研修に集中することもできて、たつぷり学ばせていただいた合宿でした。様々な講義を聞き、様々な課題を新たに見出すことができましたが、帰ったらどの課題から取り組むのか、合宿の疲れを癒しながら、ゆっくり確認したいと思ひます。特に「慰霊」といふことについては、先人に対する自然な「慰」の精神こそが過去と我々をつなげるものであり、歴史の核をなすものであることに、佐伯先生の御講義を聞いて気づきました。そのことを今後じっくり考へて行きたいと思ひます。また、今回参加した方々との出会ひを大切に、できるだけ多くの方々と今後も付き合はせていただきたいと思ひます。有難うございました。

様々のことを学びしセミナーも今終らんとして心満ち足る  
セミナーの疲れ癒して新しき課題に向けて励みたしと思ふ

## 第九班—男子学生—

参加して良かった

私の所属しているサークルが毎年参加しているので、私も今回初めて参加させていただいた。初めから不安がいっぱい、途中で帰りたくなったが、最後まで続けられたのは、班の人達のお陰である。

自分が感動したことは病苦にあらながらも無理をして来て下さり、私達の為に御講義をされた村松剛先生、佐伯彰一先生の御姿であった。もう一つは和歌創作であった。自分の感じたことを三十一文字に表わすことの難しさ、やっと歌が出来たことの喜びを味わった。みんなの創った歌を読んでいくと、その時々情景が浮かんできて面白かった。

最後に御講演をされた先生方をはじめ全ての人達に感謝の気持ちを表明して終りたい。

木々そびゆ厚木の山に囲まれて四泊五日を皆とすごしぬ



何とか自分でやっていきたい

(拓殖大学 外国語 三年 根岸宏之)

講義が終わった後班に帰って行う討論では、自分は考えこんでいる事が多かった。その時に班つきの先生が「難しい考えでもそれを自分の言葉で考えることが大切なんだ」とおっしゃったので、自分でも少しは五日間をういつた中で、何か身についたのかなと思ったりもします。でもこういうことは、続けなければ意味がないとも思いました。僕らも地元で酒を飲んで語るけど、こんな難しい話題はしないから。でも何とか自分でやっていきたいと思えます。

七沢で語り合ひたる五日間最後にみんなおつかれさま

友

(金沢工業大学 工 四年 中村真悟)

この合宿に来て最初に感じたことは、自分がここにいるのが場違いじゃないかと思つたことだった。そうして何回か班別研修をしているうちに自分の意見が出せるようになった。ここに来て自分で考え感じたことを言葉に出して言えるようになったことはよかった。さらにいつも考えたこともないことを初めてあつたような人と話すのもおもしろいと思った。先生がたの講義はたいへん役に立ち、自分の視野の狭さを痛感させられた。これからもがんばっていきたい。

最終日前夜

この会に集ひし仲間集まりて友でみようと益交はす



御講義の後には質疑応答の時間が設けられてゐる。言葉を選び真剣に質問をする参加学生。

## 自然な感情

(福岡大学 経 三年 別府正寛)

合宿が終はるにあたり今、自分の中にある言葉は、「學問とは大きな事實の輯積に耐へて、一人の人間がその重壓の中で膨大な事實を貫徹する一つの筋道を見出して行く作業」である。自分も長内先生のやうに内から正に溢れてくるが如く次々と故郷の歌を口遊み懐しむことの出来る日本人、小柳先生のやうにじっくりと言葉そのものに迫り、そこからしみじみとその人の心を感じられる人間、菅原さんのやうに人の眞心を引き出せる人間になりたい。又佐伯先生のお話を伺ふ中で、死者の存在を意識しお祭りすることにより、先人の思ひを受け継ぐことが出来るのではないかと気付いた。肩肘を張らず、本來持つてゐるごく自然な感情を大切にし、持ち續けていきたい。

合宿の最終日にてやうやくも七沢の空晴れ渡りたり

## 共に学ぶ親友

(熊本商科大學 商 二年 喜多村純)

この合宿で、久しく私が忘れてしまっていた向学心が、再び芽生えてくるのが分かりました。共に学ぶ親友をつくることとがいかにか大事なことを痛感致しました。私は共に切磋琢磨できる仲間がいないと、どうしても意志がくじけがちになります。これからは、全国にできた親友たちのことを思い出

しながら、それを励みとして勉強していくと同時に、我が熊本県にも共に学べる眞の友人を見付け出し、その輪を広げていく努力をしようと思います。私にとつてこの合宿は人生の大きな転機となるような気がします。

最後に、この合宿でお世話になりました諸先生、諸先輩、自然教室の方々、及び事務局の高校生の方々に厚く感謝を申し上げます。

相学び四泊五日と過ぎてゆき再び友は各地に分れぬ

ああ友よ必ず会はう阿蘇の地でそしていつまでも共に学ぼう

## 心の稽古

(日本真空技術(株) 北浜 道 32歳)

肉体を鍛へると云へば目に見えるから誰でもわかる。心を鍛へるには具体的にはどうすれば良いのか。四泊五日間身を以てそれが問はれた。そしてこれからも問ひ続ける問ひである。思ふにそれには、本物に触れる経験を積む事だらう。何が本物かは最後は自分で判断するしかないが、先づは先輩や先生の紹介により当てる事だと思ふ。当てるみれば本物か偽物か、と云ふより自分に必要か必要でないか直覚するものだ。善に飢えてゐればさうなる。さうして本物に触れて、手さぐりで手応へを感じていつて、いつかはその物が見えてくる経験を得るに至るだらう。そんな心の稽古を積んで、いつか又どこかで会ひませうや。酒を酌交しているんな話をしよう。そんな日を心待ちにしてをります。

班別短歌相互批評にて班友の歌を読みつゝ

討論時あまり話さざる君なれど素直なる思ひ詠み給ひけり

同じ如過せしなれど気付かざる小川のせせらぎ詠み給ひけり

我も又君の詠みたる歌により清きせせらぎ聞く心地して

## 第十班—男子学生—

楽しく充實した時間をすごした

(亜細亜大学 法 三年 松田裕幸)

今回初めて班長といふ大役を任されたといふことについて私は何よりも不安であった。班長を務めることに自信がなかった。だが実際に討論を始めてみると、班員の人たちはすなほな心をもつて講義での所感を述べてくれたり、真剣に私の言ふことを聞いてくれた。ふだん私も話し合はないやうなお國のこと、社會のこと、さらに人生などのやうなことを真剣に話すことができた。私はすなほな心をもつて話してくれる、耳を傾けてくれる班員、友らの姿がすばらしく、うるはしく感じられた。だから前に思った不安も消えて、班員の人たちと楽しく充實した時間をすごすことができた。ふだんからでも、一人でも多くかうした友をつくりたい、かうしたつき合ひをしたいと思った。

雲の間ゆ長く絶えたる日のひかり目にもまぶしくうれしく思ふ

カメラ・レポート15

# ニ 月 廿 二 日



短歌創作の前の「短歌創作導入講義」に於て、短歌創作の意義、作り方の基本などを具体例を挙げながら判りやすく話される日商岩井(株)勤務・澤部壽孫氏。

何か感じるものがあつた

(筑波大学 体育 一年 小柳正道)

いろいろな先生方の御講義をお聞きして、僕にはそれらの先生方の言われているのが本当に自分にとつてためになつたなあと思う。小中高校、大学では学べない心の話。言葉では言い表わせない感じるということ。先生方の話されたことは人間にとつてなくてはならないことではないかと思う。班別研修でも自分の考えをすなおに話すことができ、友達の間もさまざまな意見も聞けて、人それぞれさまざまな考え方があつた。だとなあとあらためて感じさせられました。

この合宿では本当に言葉では言えないけれど、何か感じるものがありました。その思いを大切に、これからの生活を送っていききたいと思う。

合宿終へ何ともいへぬ感動が我の心を振ひ立たせる

様々の目的を持つ人達と友達になれた

(拓殖大学 外国語 三年 小川哲也)

この合宿に参加して様々な目的を持っている様々な人々がいて、そういう人達と友達になれたことが良かったと思います。しかしながら自分は目的が違うというか、あいにく天皇や和歌には全く興味がないので、はっきり言って講義や班別研修の時には苦痛でした。こんな輩がこの合宿に参加して、

班員のみんなや班付の先生にはたいへん迷惑をかけたと思います。みなさん申し訳ありません。

人にはそれぞれ夢があると思います。自分にもあります。それを実現するためには、どんなにつらくても痛くても苦しくてもやらなければなりません。やるしかありません。うだうだ言う前に一歩でも夢に近づくため、とにかくやりましょう。

日本なるものを感じる

(九州大学 文 二年 別府秀俊)

今回の合宿を振り返りまして、日本なるものを感じるということを学ばせて戴いたように思います。

最も強く印象に残っておりますのは、小柳陽太郎先生の御講義で紹介された加冠の儀における皇太子妃殿下（現皇后陛下）の長歌です。歌全体に漲る緊張感と、浩宮殿下に寄せられる溢れんばかりの想いというものが一言一言に込められていて、正しく言辞に尽すことの出来ないものとして私の心に迫つてまいりました。御皇室というものは、又日本というものは理論だけでは語り尽せない、日本人の吾々だからこそ感じれるものがあるんだと、これこそ本当の日本だと感じました。もっともつと日本人のこのころを感じたい、そして自らも先人の生き様に連なつていききたいと思えます。

われもまたいにしへ人につらなりて護り継がむ大和島根を

## 感動したときに短歌を作ってみた

(宮崎産業経営大学 経済 二年 前島 誠)

参加者自由発表では、特に女子に多かったのですが、自分は感じる事ができないとか、心を開いて話をする事ができたとかという感想だったのですが、随分とまじめに人生を考えている感じが十分受け取れました。そうした彼女らはこの合宿を経て、それぞれに何かを得たというような満足したような表情をとるところでしていたように思います。

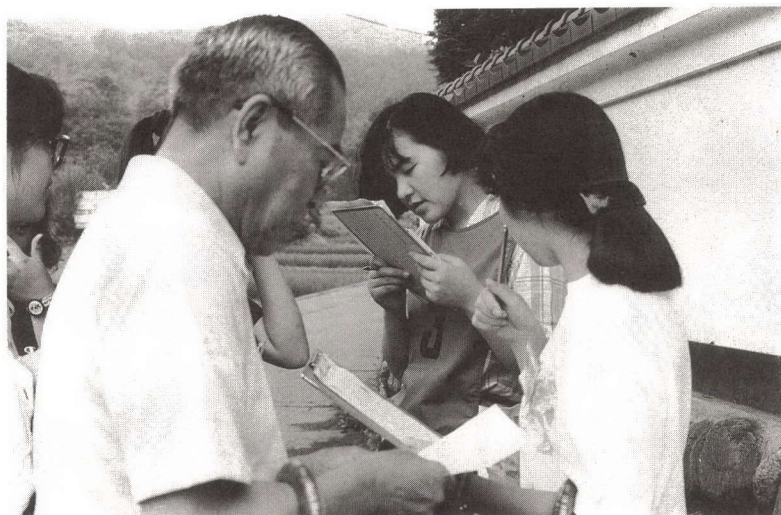
僕はこの合宿で何をしていたのだろうか。講義の内容が難しかったので考えきれなかったし、天皇とか和歌とかは今まで無縁な世界だったので、「今さら何を」という気持ちでした。しかしどんな時にも必ず感動することはあると思うのです。今は下手だけど、感動した時に短歌を作って、うまくなれたらいいなあと思いました。

外に出て眩しく照らす太陽に我気が晴れて腕を延ばすも

## 自分が大きくなった気がする

(金沢工業大学 工 二年 杉山瑞樹)

この合宿の参加が決まった後、短歌を作ることを知り、しばらくして短歌の本がとどきました。理系の自分にとって短歌を作るという事は、無縁のことなので非常にとまどいました。合宿がはじまり講義を聞きましたが、ほとんど眠ってしまい何も聞くことができませんでした。その後の班別研修



七沢の自然の中で「ウォーク・ラリー」。チェック・ポイントの課題を知恵を出し合ひ解いてゆく。

で自分は何を言っていたのか、さっぱりわかりませんでした。が、班員の人は皆、話を聞いていたらしく、わけのわからない事を言っていたので驚きました。

自分には非常にづらい合宿でしたが、何となく自分がひとり回り大きくなった気がします。この合宿で得た事を、後の人生に役だてたいと思います。

今ごろきつと地元には大学での成績が届いている

無情にも必修科目が落ちまくるこんなはずでは俺の人生

班員と楽しく話げできた

(富山大学 工 二年 腰原 健)

私のこの合宿に参加した理由は、先輩の勧めがあつたからです。正直、話を聞いた時はあまり気乗りがせず、それは厚木の七沢自然教室に着くまで変わりませんでした。実際に講義を受けて自分の無知を思いしらされたのですが、学ぶためにやってきたのだからそれでいいじゃないかと思ひ直し、合宿を終えました。ただ、班別研修などでは、ある程度の知識がなければ中身のあるものは行えないと感じました。

班員の方々の真剣に取り組む姿を見、感心させられました。研修や輪読ではあまり活発に意見を發表できない私でしたが、夜に班員全員で話げできて、楽しい思い出になりました。ありがとうございました。

七沢の自然ながめて取る食事かはす言葉もおかずの一つ

## 第十一班 男子学生

勉強して自分の意見を作っていきたい

(福井大学 工 三年 神田儀道)

今回この合宿に参加できた事は、これからの自分にプラスになるだろうと思う。中でも一番自分の為になつたのは班別討論であつた。自分と同年代の人が、十も二十も年上と感じてしまうようなすばらしい意見を言うのである。これからの政治のあり方、天皇の存在の意義、日本の国際貢献、自分のすべきことや生き方等。考えるべきことと知りながらも、心のどこかで自分とは関係ない、どうでもいいと思つていたのだろう。班友の意見に対して自分の意見を言えないのが恥ずかしく、くやしかつた。今後はもっと社会について勉強し、本を読んで先人の考えを知り、自分の意見を作っていきたい。そうすれば先生方の話にもっと感動できると思う。今合宿では大切なことを知ることができた。本当に有難うございました。

班友に己が無知さを知らされて学び直さむと心に誓ふ

慰霊祭に参加できてよかった

(防衛大学 情報工学 四年 畑野将史)

普段触れることのできない日本の文化や考え方を知る事が

でき、大変勉強になりました。一番印象に残ったのは慰霊祭で、昨年研修で行った硫黄島の事が蘇えてきました。負ける事が分かっていながら、少しでも時間をかせいで本土を守ろうとした栗林中将の思いが、激戦地を目の当たりにして胸にせまってきたのです。そして我々若い世代が、当時の人達の心を理解もせずに批判ばかりする姿勢に、非常に情けない気持ちがありました。日本の伝統的な慰霊祭というものに参加でき、理解を深めた事だけでも非常に意義のあった合宿だと思いました。最後になりましたが、様々な立場の人達といういろいろな意見を交わせる事ができて大変良かったです。又いつの日か皆と会えることを願い、筆をおきます。

全国に去りて散りゆく若人とまたいつの日か共に語らむ

### 言葉の貧しさを痛感した

(東北大学 経 三年 山森 明)

討論で自分の考えを表現できなくて参った。和歌を書く際にも、自分の感情を表わす言葉の貧しさを痛感すると共に、批評の時に、友の作品を直してあげたいのとうらはらに、全く友の気持ちを表わせないのが残念に思えた。感情のままに生活する姿勢が、かえって感情を疎かにしていたのだろう。これからは折々に歌を作り、自分の思いを大切に、他人の考えをもくみ取っていける人間になりたいと思った。私も自分の考えていることが空想か理想か分別するのは苦手だが、それを隠さず、素直に表現する勇氣で諸事に当たって



「とうげの広場」で一休み。班の皆で記念写真を撮る。

きたい。最後に、細部にまで行き届いた運営、立派な設備を見て感激した。感謝したい。

五日間を極楽気分で過ごせしもみなのお陰とただ感謝しぬ

村松先生の御講義をお聞きして

命かけ我の目を見し師の君の伝へむとふ思ひゆめ忘るまじ

なぜ日本人同士で分かりあおうとしないのか

(福岡大学 法 二年 小森 誠)

「私は日本を愛している」とどんな切実な言葉で語っても、「右だ」という簡単な一言で片付けられてしまう。これが今の日本だ。豊かな感性とすばらしい日本語を持ちながら、この一言で片付けてしまう。「右だ、左だ」と決めつけ、けなしあつて、どうして日本人同士わかりあおうとしないのだろうか。日本人どうしですら聞く耳を持つととせず、どうして文化も違う世界の人々と手をとりあうことができませんか。「世界平和」などと声高に叫ぶ戦後日本人よ、どうしてそんなことが言えるのか。それこそ空想にすぎないのではないか。大雨のわが九州を思ひつつ親しき友は如何にあるかと

心で知るといふことがわかった

(金沢工業大学 工 二年 杉林克彦)

私は人に誘われて来ましたが、案内パンフレットを読んでも気がすすまないまま参加しました。講義をうけてもよくわ

からないし、班にもどって討論する時も皆についていけず、帰ってしまいたいと思いました。でもそんな中でも思ったより早く、班の人達と今まで知っていた人のように話せるようになりました。講義には最後までついていけませんでしたが、夜、水産高校の先生と握手をした時、何か言葉で表わせないあたたかさのようなものを感じ、これが頭で知ることではなく、身体・心で知るものだと感じました。その時初めて、この合宿に来て良かったと少し思われました。合宿では食事がおいしく、環境もよく、こういう所を提供して下さった厚木市に感謝したいと思いました。

わからない講義を聞いて過ごしても師との握手はうれしく思ふ

自分の価値観を大事にしたい

(拓殖大学 外国語 三年 牧 隆志)

講義と班別討論を通じて感じたことは、人はそれぞれ生まれ育った環境や、接してきた人々によって、性格や価値観が違うのだから、自分の価値観でものを見れば、いちばん納得がいくのではないかということだった。人が何が良いことだから何をすべきだと言っても、当人が大切な事と感じなければ、その事は大きな意味を持たなくなる。人から見つまらないものでも、自分の価値観にみあうものならそれが最良のものだと思う。



## 祖国への信頼感を持つことが大切と思った

(日本大学 文理 二年 田代吉弘)

二回目の合宿に参加し、心が自由になった気がする。かうでなければならぬ、と余りにも自分や周囲に対し求めすぎてゐた、と班別討論で考へたのである。御講義で一番印象に残つたのは長内先生のお話である。愛国心とは、自分達の父母や祖父母に対する愛情と同じものといふ部分が成程と思つた。その愛情とは信頼感ともいへるだらう。昨年合宿で感動したのは、同じ日本人として参加した人達を信頼できるやうになつた事だと思ふ。祖国への信頼感を持つことが今の自分にとって一番大事だと思つた。和歌は今回は長内先生にほめていただき、真にうれしい。おさな心に帰るとはこのやうな事か、と少しわかつたと思ふ。

長内先生の御講義を聞きて

思ふこと思ふがま、に語ります師の君のご我も語りたし

## 和歌の意義について考へさせられた

(大阪府立交野高等学校教諭 絹田洋一 37歳)

今回の合宿で特に心に残つたのは、和歌のお話だった。生徒の和歌を紹介された菅原先生の温かく、さはやかなお話、「心を美しく、すがすがしく整へていく、それが和歌です」と言はれた小柳先生のお話、「文化・伝統の中心は言語であり、二千年の歴史がある和歌は文化の中心です」と言はれた



「班別短歌相互批評」一友の作つた歌を班員の皆で気持ち推しはかりながらも一度考へ直してみる。心と心とが交ふ楽しいひとときだ。

宇野先生のお話、何れも印象に残った。そして両先生が「その和歌の伝統をずっと守って来られたのが皇室であつた」と述べられたが、歴史上、歴代天皇方が日本の進路を正し、支へて来られただけでなく、日本文化の本質的な部分を守つて来られた事に改めて気づかされた。今後できるだけ和歌を作る機会を持っていきたい。それによって、日本の文化伝統の流れの中に身を置く自分を実感できるのではないかと思ふ。

全体所感発表の折、靖国神社の大山氏が紹介された特攻隊員の遺歌をお聞きして

今生の別れを前に一夜明かす子と母君の胸内思はず

別れたる母君のカバンの中にまた母への歌のひそめられしか  
国のためその身果つとも母君の御許に咲ける花ならまほしと  
死してなほ国守らむとふますらをも母の御許に帰りたしとふ  
ますらをの母を慕ひし歌読ます親の悲しみ嘆きやいかに

## 第十二班 男子学生

班員との親睦を忘れない

(福井工業大学 工 一年 鈴木博幸)

私が今回、この全国学生青年合宿教室に参加したのは、部活動の先輩から勧められたからです。

合宿が始まると最初の講義から難しく、一時間二十分とい

う時間は大学の授業よりは短かいのですが、私にはとても長く感じました。その後、班別研修があり班員の方の意見を聞きとても驚きました。皆さん、しっかりとした考えを持ち、それをちゃんと話せる人達ばかりだったからです。

この合宿では「勉強不足だな」ということを一番感じました。またレクリエーションや夜の集いでは、班員と親睦を深めることができ、とても楽しく過ごせました。

ここで出会った友とは今後、会うことはないかもしれないが、決して忘れることはないと思います。

友人と別れる辛さ胸痛む忘れはしない 四泊五日

日本の事を考え、研鑽に励んでいきたい

(日本文理大学 工 二年 鐘築光昭)

開会式の折に、小田村寅二郎先生の話聞き、この合宿教室にかける思いを感じた。中でも新しい世代との価値観の違いを埋めようとなされた先生の願いは、歴史の人物を偲んでいこうとする事と通じるものを感じた。また小柳先生の話も聞いていると、皇太子殿下の御歌に触れていく内に、明るく清らかな思いが何の抵抗もなく入ってきて、自分の心が湧きたつような嬉しさを感じた。また長内先生が、自分の体験から生まれた言葉を話しておられるのを聞き、いろいろある言葉の中にも実感とした言葉を自分の中に深めていきたいと思つた。この合宿はとても有意義で、楽しい時間を過ごさせて頂いた事に感謝しつつ、日本の事を考え、研鑽に励んでい

きたいと思いません。

小柳先生の話を拝聴して

国がらを皇太子殿下の和歌通し唄えば心の清くなりゆく

相手の気持ちになつて考えていきたい

(金沢工業大学 工 一二年 石川和人)

自分が、この国文研の合宿教室に参加した動機は、部の先輩に勧められたからです。最初のうちは班友の豊富な知識と難しい言葉に圧倒されてしまい、殆ど自分の意見を言うことができませんでした。しかし合宿が中盤にさしかかると、いつの間にか積極的に参加していました。参加して行く間に自分の思っている事を相手に分かるよう伝えることの難しさ、自分と正反対の意見を受け入れる難しさを痛感しました。それは、今まで自分が他人の気持ちを考える事なく生きて来たからだと思います。合宿教室に参加してみても、自分は物事の本質を見極めずに偏った方から見て、意見を述べていた事を知りました。これからも、合宿で学んだ相手の気持ちになつて考えるという事を大切にしたいと思えます。

写真班の人へ

写真機を構へる姿に一目惚れ合宿に我は何しに来たぞ



四日目午前、九州造形短期大学教授・小柳陽太郎先生により「日本の国柄—皇太子様をめぐるお歌を中心に—」と題された御講義が行はれた。先生は皇太子殿下の御歌を幾首か読み上げられ「歌を詠むことは、やまと言葉によって日本人としての心を、深くすがすがしく洗ひ清めて鍛へてゆくことであり、これは皇室の伝統の中で脈々と受け継がれてゐるのです」と語られた。

学ぶ気持ちを一いつまでも大切にしたい

(防衛庁陸上自衛隊 濱口和久 25歳)

大学を卒業し、学生時代とは違った感動があったと思います。私自身、学生時代から数えて四回目の参加となり、回を重ねるごとに、ますます自分自身が日本人であることを意識するようになったと思います。また今回、初めて班長として合宿に参加し、班友一人一人の気持ちや思いを、うまく引き出すことが出来きず、班友に色々な面で迷惑をかけたと思っています。

合宿を通じての様々な感動や、学ぶ気持ちを、いつまでも薄れることなく、日常の生活や仕事の中に活かしてゆけるよう日々研鑽してゆきたいと思います。

班別研修にて

班友の思ひをうまく引き出せず私の心はとまどふばかり

日本の為、世界の為に役立ちたい

(米国際大学 国際関係 四年 松田潔社)

今回、国文研初参加で当初の目的の日本の伝統文化、思想の概観を把握する。また欧米との根本的思想の相違点の発見。以上二つの事を自分では達成できたと思っております。たくさん先生の先生方のご講演、班友との語いに参加できたことに非常に満足しております。同時に日本人でありながら日本の事を知らない自分、現代に生きていながら現代を知らない自分

を強く恥じる気持ちも持たされました。日本の歴史を内側からまた感謝と思いやりを持った観点から学ぶことの必要性、重要さを痛感しました。合宿を契機として、自分自身の歴史観、世界観確立を目指して勉強してゆきたいと思います。混沌の時代にゆるぎない自己を確立して、将来は日本国の為、世界の為に役だつ人間になりたいと思います。

山中の四泊五日の合宿は自分を見なおす鏡なりけり

合宿での体験を大事にしたい

(国学院大学 文 三年 江島靖喜)

合宿に参加した第一の動機は、同じ年代の学生の話聞き、刺激や啓発を受けたというものでした。もちろん諸先生方の講義にも興味を抱いていましたが、それよりは班の中での触れ合いを通して、様々な物事に対する無知さを反省し、再生できるような刺激を受けたことが参加の最大の理由です。参加前は果して私の願いとす所が叶うのだろうかと不安を感じた事もありましたが、私の第一の希望に予想以上に応えてくれることが分かり、不安など消し飛んでしまいました。予期していた通り、改めて自分のあまりの無知さに気が、恥ずかしい思いもしました。こうした体験ができたことは、今では嬉しくてしょうがないという気持ちです。私も勉強に励みたいと思います。

就寝前、班友の語らひの場に参加して

様々な背景を持つ若人の言葉に触れて心ふるへり

吾もまたなほ一層の努力をせんと気持ち新たに誓ひをりたり

## 合宿で得たものが必ずプラスに

(防衛大学校 国際関係 二年 小澤 学)

これまで自分が二十年かけて育ててきた価値観を大きく揺さぶった五日間であった。私は自分の考えに絶対の自信を持っていました。ところが合宿が一日、二日と過ぎるにしろ、自分の自信がどんどん揺らぎ始めたからです。今まで自分の理想を信じ、それに向けて生きてきた私は、合宿中大いに悩みました。今、合宿を終えてみて、自分の考えの根底はまだ変化していませんが、やはり合宿参加前とは物の見方が変化したと考えています。とにかく、こうして深く考え悩み、そして多くの友と出会い、議論できたことは大変有意義であった。今後も私は自分の信じた道を歩んでいく訳だが、その時に今回の合宿で得たものが必ずプラスになるであろう。

すばらしき友と出会ひて語らひてこの一瞬を永遠に忘れじ

### 第十三班 男子学生

この合宿での経験をステップにしたい

(福井工業大学 工 一年 岡畑真生)

どんな事でもそうだろうけど、終ってみると長い様で短かったなと思います。



四日目午後、東京大学名誉教授・文学博士・宇野精一先生より御講話をいただいた。先生は、和歌が日本の文化伝統の中心であることをお話され「この伝統を一番保持してゐらっしゃるのは皇室です。宮中でのお祭りや和歌、これだけはぜひ伝えていただきたい」と述べられた。

いろんな人の意見を聞いて反感を覚えることがたびたびあり、それに、ギッシリつまったスケジュールのこともあってすこくつかれました。

初めて合宿に来た日は、班に知り合いが一人もいなくて早く帰りたいの一心でしたが、班のみんなと仲良くなったところで五日がたってしまいました。

この合宿での経験をステップにして少しでも大人になれたらと思います。

帰りたいその一心でできたけれど別れはつらし合宿の友

### 関心をもつことと悔しいと思う気持ちが大事だ

(拓殖大学 外 一年 関野淳一)

最初に来たときどういことをやるのか不安でした。講義の後の班別研修で、発言しようと頭の中で考えていても口に出して言えないので自分の知識のなさがよくわかりました。

三日目の班別短歌相互批評で自分の歌を批評された時、歌の部分、部分を批評されるのはかまわないんですが、最後に班長にその歌を原形も残さず変えられてしまうのがとても悔しかったので、自分は班長に原形を残してくれと言ったら残してくれたので気分が晴れました。

結局、この合宿では、何事にも関心をもつことと、悔しいと思う気持ちが大事だということがわかりました。

合宿でやっぱり自分が得たものは感じることに耐えることかな

### 班員と語り合った最後の夜

(金沢経済大学 経 二年 若新確也)

自分はこの合宿に行かなければならないと決まっていたから、いったいどのような合宿なのだろうかと開始日が近づくにつれ不安になっていました。そして来てみるとやはりその不安が的中し、すぐに帰りたい衝動にかられました。朝は六時半から晩は十時半まで講義の連続、初対面の班員との班別研修。もう耐えられませんでした。しかし合宿も二日、三日と過ぎてゆくうちに班員と言葉をかわせるようになり、班別研修も少しはにぎやかになりました。また、講義は、ひとつふたつ感動したものはありましたが、あまり心に残るものではなく、一番心に残ったことは、班員と語り合った最後の夜のことです。いい経験をさせていただきありがとうございます。

#### 最終日の朝

朝目覚め今日で最後となりぬればなんとこの日のめでたかりけり

### 自分の考え方や物事の見方が変わった

(金沢工業大学 工 三年 谷 章)

一期一会、つまり、出合いで人は変えられるという言葉のとおり、この合宿での講義の内容、講師の先生方、班員と出会い、自分の考え方や物事の見方が少しではあるが変った。今までは日本という国の事や文化についてなど意識したことがなかったが、それらを理解し考えてゆかなければならない

と感じ、今後そうしてゆきたい。

また、「自己確立」との言葉どおり、まず自分自身が物事を正確に感じとり、美しいものを正しく美しいと思う心を養わなければ、自分の考えを口に出して表現するのは難しい事なのだ、色々な先生方の講義から感じとった。

合宿全日程を終へて

長き日も短く感ず得しものは多くの知識と多くの出合ひ

心に残る合宿だった

(拓殖大学 外 三年 水坂真貴)

自分は合宿教室に来る前、かなりハードなスケジュールでかた苦しい講義ばかりだろうと思ひ、その予感通りでした。意外だったのが、自分の班はみんな初参加の人ばかりだったということ。それもあってか班別研修において、みんな自分自身の意見をのべる事を積極的に行いませんでした。最後に一番感じた事は、いろんな所で「私は「右」ではない。職業がら「右」に見られませんが」という事を耳にしましたが、「右」という言葉をやたら意識しているように思いました。しかし、心に残る合宿だったと思います。

最終日天気がよくすがすがし自分の心も同じ思ひす

白浜先生のお姿に感動した

(長野大学 産業社会 四年 末崎彰規)

自分は初めから講義を真剣に聞くつもりはなく参加した。

カメラ・レポート21



(社)国民文化研究会事務局長・長内俊平先生により「短歌全体批評と講話」が行はれた。先生は、友や家族を偲ぶ心そのまま歌を詠む心につながることを示された後、参加者全員の短歌が掲載された「歌稿」の中から真心溢れる歌の数々を選ばれ、批評されてゆかれた。

それは、大学の講義と変らないし、偉い人の御講義は理屈っぽく、聞いていても分からないと思つたからだ。しかし、占部先生、白濱先生等、特に白濱先生は壇上で涙があふれてくるほど熱心にお話されて、自分の耳が自然に傾いてくる内容、目を見張ってしまうお姿にとても感動し、この合宿はちよつと様子がちがうぞと思ひました。また、自分の本来の目的である人との付合いについては、他人を感じ、自分を感じることは難しいが、それが分つた時本当の友人ができるのではないかと思ひました。

合宿の最後は晴れてすがすがし心のくもりとれて帰途待つ

### 「善く生きる」といふこと

(日産自動車株 内海勝彦 39歳)

白濱先生が紹介されたプラトン『クリトン』からの言葉、「大切にしなければならぬのは、ただ生きるといふことではなくて、善く生きるといふことなのだ」が強く心に残つてゐる。そして「善く生きる」といふことは、単に自分自分のことに執着するのではなく、事ある時にはいつでも、他の人々の為に、或は世の中の為に自分の力を捧げる心構へを持つことであると、今思つてゐる。

家庭の一員として、会社の一員として、そして日本人として国のために尽くす道を考へ、実行していくこと。それが私にとつて「善く生きる」ことに至る道だと思ふ。

白濱先生の御講義をお聴きして

魂の世話をせよとふ師の君の言の葉ひたに胸に迫りく

## 第十四班—男子学生—

これまでに持つたことのない親近感

(福井工業大学 工 一年 兼松幹夫)

今回の合宿はもともと仕方なく参加しなければならなかつたので、厚木市に来るまでの電車の中では、行きたくないという気持ちで一杯だった。初日、まじめな話ばかりで今まで考えたこともないので、とても戸惑い、二日目になると頭は混乱状態だった。三日目になると短歌までつくることになり更に困惑した。しかし、できあがつた班員一人一人の短歌を全員でよく吟味し、更にその歌を詠んだ人の心情に合わせ、まるで自分のことのように短歌を手直ししてゆく班員の姿をみて、これまでにあまり持つたことのないような親近感をおぼえた。四日目になると大きな困惑はもうなかつた。その夜は本当に楽しかつた。

今回の合宿で本来の大学生の在るべき姿を痛感させられた気がした。

厚木市の合宿終へて我思ふやつと成れたり日本人に



「感じる心」を磨いてゆきたい

（亜細亜大学 国際関係 二年 宮崎裕二）

本当に心動かされ、考えさせられた合宿でした。特に印象に残ったのは、最後の「参加者感想自由発表」でした。自分も壇上に立ち、「このように自らの思いをぶつけ合い、人生や国のことを語り合う合宿は貴重であり、これからは友にこの合宿を勧め、自分もまた参加したい」と発表しました。この後いろいろな友の感想を聞いてゆくうち少し情けなくなりました。皆はこの合宿で得たものや、素直な気持を発表していました。その中で心を強く打った言葉は、「自分の思うがままに自分らしく生きる。自分が感じたことを素直に信じる。」という言葉で、とても勇気づけられると同時に、「感じる心」との大切さを思い知らされました。みんなの「感じる心」を見習って、自分なりに和歌を詠むなどして、「感じる心」を磨いてゆきたい。

「感じ取る自分を素直に信じよ」と涙を流し君は語りぬ

今までの疑問がわかりすつきりした

（奈良県立商科大学 商 二年 岩瀬幸広）

私はこの合宿に来たのは二回目であるが、正直いって一抹の不安を感じるものがあった。それは昨年初めて参加した阿蘇合宿では初日に台風が上陸して大幅に着くのが遅れたことを思い出したからで、案の定、今年も雨や曇りが続き、全四



長内先生の朗らかなお話により、参加者の顔も自ずと微笑む。

回の朝のつどいの内の二回を屋内で行うはめになった。

しかし、合宿が進み、最終日になると、晴れ間が見えてきた。それは自分が今まで持っていた疑問や間違った考えなどが少しずつわかり、すつきりした……。最終日の今の天候は、いわばそんな私の心を象徴しているかのようである。

最終日の朝の集ひの帰りに

つどひ終はり空より明るくさす光そは我々の志のごとし

吸収したものはとても多い

(拓殖大学 外国語 三年 大木 聡)

私は自主的に参加したとは言いい切れない学生の一人です。こういう合宿の中で皆で考えることに興味や関心はあるのですが、知識はありませんでした。ですから班員の方と対等に討論できるわけがないと思っていました。「何を言ってるんだ、何も知らないくせに。だからこんなタイプの人間は……。」などと思われると考えていました。しかし、それは自分の思い違いだと初日から気づきました。今回半分開き直って、「自分はこれは知らない。」と打ち明けました。すると班長から班員の方々まで皆で自分に教え続けて下さいました。決して自慢気ではなく、心から語って下さいました。そして、私のささいな意見も心から聞き続けてくれました。私は自分の誤解を恥かしく思っています。

長内先生が短歌全体批評の際、私の歌をお歌い下さり、私が歌いかけた胸の内を本心に心から感じとって頂き、とて

も自信ができました。短歌を歌うということは、何か特別なことを考えることでも、飾った言葉を使うことでもなく、感じたことをただ素朴に書きとめるだけで十分なのだと思えています。今回自分に吸収したものはとても多く、心が燃えています。正に充実した五日間だったのです。

信じあひ感ずることのうれしさを体で覚え笑みこほしあふ

予想通りの展開

(金沢経済大学 経 三年 小見茂久)

合宿も予想通りの展開で終わりをむかえた。合宿の始まる数日前から戦々恐々としていたが、実際に始まってみると、まさに期待を裏切らない面倒さであった。こんなことを書いてたらずいだろうと思つたが、これが自分の正直な感想である。まず、講義の内容であるが、どんな言葉で覆い隠してもにじみでてくる右よりの思想。自分は別に反体制主義者でも左よりの思想の持ち主でもないが、講義中や感想発表で朝日新聞等を扱き下ろすのには辟易した。はつきりとした思想を持たない自分が(しかし今の若者はほとんどそうであるが)このようなことを書いてもと思うが、親から学費も仕送りも一切もらっていない自分には、あるのはひたすら現実であり、考えるのは今日の飯、信じられるのは己と金だけである。ただ今回の合宿でこんな自分が他の方々のさまたげになったのではないかというのが、たった一つの懸念である。

合宿が終つてはじめての一言は「これで終りだやっど帰れる」

探しつづけてゐたものを発見した

(九州産業大学 工 四年 津田 峰)

この合宿に来て学んだことを揚げていけばきりがありません。ただ言へることは、この四泊五日、四六時中、感動の中に浸ってをりました。かつてこのやうな経験が自分にあつただらうかと思ふと、ちょっと考へつかないのです。この感動といふものを表現する方法も学びました。和歌を通じて自分の気持ちをはっきりさせること。更にそれを人にわかってもらふこと。これを学んだ時は、何か長く探しつづけてゐたものを発見した思ひがしました。また更に、和歌を通じての友等とのやりとりといふものにも、これが本物のつきあひだといふことに気付かされました。たった四日あまりで旧友以上のつきあひをしてゐる感じがし、その中で友の本当の姿を見、自分の本当の姿を知る。このやうな合宿に参加できたことを感謝致します。

わが心いつはりなしと思ふ身を置に横たへああ気持ち良し

詔書を読み味つた

(徳島大学 総合 四年 倉本聖也)

開会式の小田村寅二郎先生の御挨拶で、先生が、この合宿をたふれるまで続けていかうと思つてゐると仰つた言葉に、この合宿は先生はじめ道統に連なる方々の強烈な願ひの具現



「慰霊祭」。戦時・平時を問はず、祖国日本の為に尊い御命を捧げられた方々の御魂を心静かにお慰めた。

カメラ・レポート 23

であり、その願ひとは祖国日本を自立した立派な国にしたいといふことであると感じました。

合宿の中で感銘を受けたのは、村松先生が御講義で話された「新日本建設に関する詔書」についてでした。「人間宣言」と称されるこの詔書について、私にはその思想的問題点の指摘ばかりが目にとまってをりましたが、まことにうかつながら、じっくりと読み味ったことがありませんでした。明治天皇が天地神明に誓はれ、国民に呼びかけられた「五箇条の御誓文」を、昭和天皇は未曾有の敗戦を迎へた時に、その詔書の冒頭に掲げられた。そのことを偲べばこの詔書を「人間宣言」といふレッテルで括つてしまふことは大きな過ちであることに気付かされます。そして、更に昭和天皇の大御心を偲ぶやう努めていきたいと思ひます。

慰霊祭にて

師の君にならひてをろがみ柏手をそろひて打てば響きわたるも

班別研修にて

率直に己が思ひを述べてゆく友のひとみを見つむる吾は

歩みこし道赤裸々に語りたる友の姿に打たる吾は

もろともに学びかさねて世に出てもつきあひさらに深めゆきたし

心楽しく四泊五日を過せた

(株)日立製作所エネルギー研 松井哲也

第一日目から素直に自分の思ひや過去に歩んできた道を

語ってくれる多くの班友に恵まれ、大変心楽しく四泊五日を過せたことをありがたく思ひます。なかなか自分の思ひを語ってくれぬ友も居りましたが、ウォークラリーや最後の夜の集ひなどを楽しくやってくれてゐる姿を見て、ほっとすると共に嬉しく思ひました。これも不断の各自の場ではなかなかすることのできない、互ひに心を聞きあつていく努力を一人一人が自分なりに努力した結果ではないかと思ひます。この合宿で得た何かはまた各自の場に戻つた時のをりをりにかの形で生きていくのではないかと思ひますし、また、生かして欲しいものだと願ひます。

をちこちゆ集ひし友が合宿を経て親はしき友となりゆく

良き班友ともに恵まれて良き合宿を過せしことをありがたしと思ふ

## 第十五班——男子学生——

合宿で自分の心が癒された

(拓殖大学 商 三年 木下貴博)

自然があふれた所に來るのは久しぶりでした。おいしい空気を吸い、汚れた都会生活で疲れきっていた私の心を癒してくれた。一番良かったのがウォーク・ラリーで、山の匂い、川の匂い、土の匂いが私の心を癒してくれた。最後の夜の集いでは、押し殺していた自分を一気に開放した。ここに集つ

た学生達とは少しタイプが違っていたと自分では思うが、こんな自分がいたと皆の心に残っていてくれたらうれしく感じます。

「こち良い風が窓から入り来てはや合宿も終り近づく」

### 素直に大和魂<sup>（こころ）</sup>を

（千葉情報経理専 経理情報 二年 西島 司）

「少年老ひ易く學成り難し 一寸の光陰軽んずべからず」と言ふ言葉があります。それをこの全同青年合宿教室に於て痛感させられました。今回で此の合宿は二回目ですが、以前より自分の學問の衰退を感じました。合宿後、二、三ヶ月間で墮落し始めました。やはり、これではいかん、と思ひまして今年も知識の獲得及び氣合を入れ且つ友情の輪を広げようと参加しました。「素直に大和魂を」と云ふ目標を掲げてやってきました。日程は厳しいですが、終ってみると有意義であったと実感させられました。これからもこの素晴らしい合宿にはできる限り参加させて頂きたいと思ひます。

風呂からあがりて

湯あがりにきちんとならべた上履きを見人の心をありがたく思ふ

### 自分は一つ大人に近づきました

（金沢工業大学 工 四年 羽賀茂幸）

自分達、若者の為にこの様な合宿を開いて頂きありがとうございました。自分は一つも二つも大人に近づきました。社

### カメラ・レポート 24



「夜のつどひ」では、各有志班、大学別、地区別に思ひ思ひの出し物が披露された。合宿教室最後の一夜、心の通ひ合った友等と楽しむつろぎのひとつときである。

会に出る前に勉強しなければいけない事が、まだまだあると気づかされたと共に、社会に出てからも勉強は続くのだと教えられました。ありがとうございます。この合宿に誘って下さった中田先輩に御礼申し上げます。

西の方君を思ひてながむれど広きみ空に思ひとどかず

### 班友と語り合う喜び

(福井工業大学 工 二年 杉浦信正)

私は、この合宿で色々な事を学べたと思います。まず、講義を聞く時、ただ聞いただけではあまり内容を理解する事ができませんでしたが、その後の班別討論により皆の意見を聞いたり語り合ったりして少しずつ分つていくのが感じられました。その時班友とお互いに意見を出し合い、自分の意見を真剣に聞き考えまた認めてくれた事は他ではなかなか経験できずなんとも言えないうれしい時であったと思います。今回初めての参加で良き友に恵まれ、あつという間に過ぎ充実した日々でした。この合宿で学んだ事を生かし、これからの日本の事や何が正しいのか、自分は何をすべきなのかを自問自答し、己を鍛え磨いていきたいと思えます。

今日よりも明日はますます自らを磨き高めて行かむと欲す

### 自分の意見がためらいなく言える喜び

(北里大学 衛生 一年 平野 誠)

今までの私は、人と議論することが無かったというより、

自分の意見を他人に述べる事が、あまりありませんでした。今回の合宿で自分は議論することのすばらしさと自分の意見が何のためらいもなく言えることの喜びを覚えました。また、近代の日本の歴史は教科書によってゆがめられてしまったことを学びました。やはり、教科書に書いてあることをうのみにせず、違う角度からも歴史を見ることも大切だと感じました。

合宿中風が近づき故郷の家族の無事をはるか祈りぬ

### 第十六班 男子学生

#### 師と仰げる人物を合宿に求めて

(日本大学 理工 四年 國武陽一郎)

私がこの合宿に求めていたのは、師と仰げるような尊敬できる人物であったのかもしれませんが、そのような私にとってご講義してくださいださった菅原先生は、とても魅力的な人物に見えました。ご講義の中で熱心に詠まれた生徒の短歌は、生徒自身の気持ちというより、生徒にとつての先生の存在の反映として私には映り、直接心に訴えかけてきました。四日目の夜に先生に悩みを打ち明けると、先生はいっしょうけんめいに考えてまさに自分の弱みとすると、先生はあててくださいます。自分を保護するために次々と言葉をだす私に先生は、「そうじゃないでしょ。違う?」と言われ、すぐに私の考え

を見破り、「君にはできるよ。」と励ましてくださいました。

菅原先生に相談にのっていただきたい

いくつもの殻で守った自分の弱みをつかれて思ふみせかけの強さ

### 祖國に冷酷な目を向け過ぎてゐた

(熊本大学 教 三年 上甲能也)

長内先生のお話の中で「君達は先人がとんでもない戦争を起こしたと思つてゐるだらう。だけど君達のお爺さん、お婆さんなんだぞ。どうして戦争が起きたのだらうとお爺さん、お婆さんを暖かい目で見えてあげることが出来ないのか」と、私の忘れてゐたものを鋭く指摘された。私は、あまりにも祖國に冷酷な目を向け過ぎてゐた！私達は、事實を「科學」で冷静に客觀的に分析することに頼り續けて來た。「お爺さん、お婆さん、大變だったでせうね。」といふやうな思ひを一度として抱いたことがあつたらうか。私達は戦後の教育の中で「反戦平和主義」を一貫して植へ付けられ、戦争で亡くなられた方々を悼むといふことがいけないことと教へられて來た。しかし、死者の靈を和らげ、慰めることによって死者から支へられている生者、先人からのいのちのバトンを継承して生きてゐる自分を自覺することになると思ふ。

### 感性の重要性を知つた

(富山大学 工 三年 上脇寿仁)

参加してみての感想としては、自分の世界の小ささに自分



合宿運営委員長・小柳志乃夫氏による「合宿を顧みて」。小柳運営委員長は「この合宿教室で得た課題、また良く理解のできなかった問題を持ち帰って、友と一緒に学んでいって下さい」と訴へられた。

が時々惨めになったりした。特に人間性に関して言えば、何と素直な人間のいる事か、自分のひねくれた性格に嫌気も感じたし、時には自分のような人間がいてもいいだろうと聞き直ったりもした。講義の後の班別研修での自分の意見をはっきり明確に主張できないのがゆさ。他人の素直でそのままの感情を出す姿勢、そして何者にも恐れずじっと見つめるそのまなざし。自分は、ただ／＼羨望のまなざしであった。

また、改めて思った事に、人間の感性の重要さを思い知らされた。確かに知識は重要だが、その人間の魅力というのは、素直な感性だと思った。これからも和歌を通じて班友達とつき合えるようになったが、素晴らしい事だと思う。

まなざしに感じさせられるものがある真摯な姿に心打たるる

### 来年は大学の友人たちと一緒に参加したい

（宮崎産業経営大学 経営 二年 矢田研人）

私は、この夏合宿へは二度目の参加でした。今年の合宿では、講義を始めから終りまでしっかりと聞かせていただき、班別研修でも自分の意見をしっかりとまとめて発言できるなど自分にとってかなりの進歩があったやうに思はれます。特に、村松剛先生や佐伯彰一先生の御講義では今まで全く知らなかった事を教へていただいたり、今まで自分が言ひたくとも言へなかった事をズバリと言っていたりして、いたく感銘を受けました。また、ある先生は涙ながらに語られたり、すごい迫力で私たちに訴へかける先生もいらっしやったりし

て、この先生方は、本音で私たちに言ひたいことを思ひつきり言っているのだといふことを改めて感じました。この夏合宿を大学の友人たちに紹介し、来年は一緒に参加したいと思つてをります。

五日間長しと思へどすぐ過ぎぬ美りの多き夏の合宿

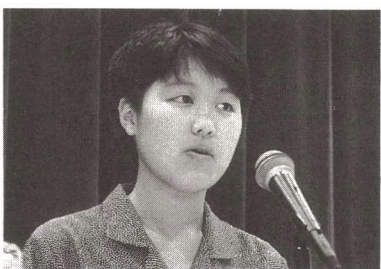
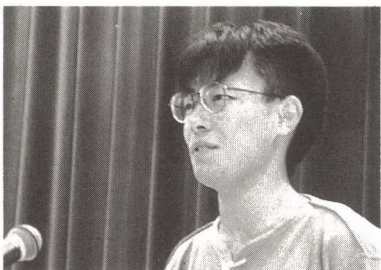
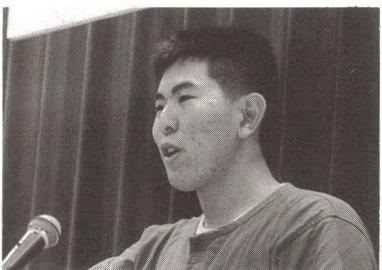
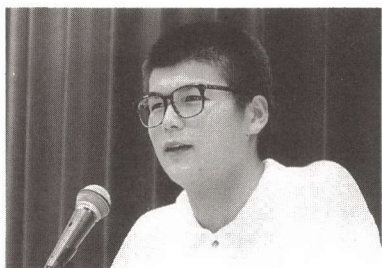
### 自分をもっと進歩させたい

（東京大学 理Ⅰ 一年 松岡 勲）

僕は、この合宿には何の問題意識も持たずに参加しました。しかし、一日目に改めて自分が人の話を聞けないということを感じつかされ、この合宿で少しでも人の言うことをもらさずに集中して聞けるようになりたいと思いました。しかし、合宿が終つて果たして僕が少しでも人の話を集中して聞けるようになったか自信がありません。講義中にもすぐほかのことを考えたり、居眠りしたりしたし、何を言いたいのか、何を訴えたいのか理解することができなくてつらかったです。しかし、ある先輩から「この合宿にきて良かったと思うか」と尋ねられたとき、僕は正直にこの合宿にきて良かったと思ひました。自分をもっと進歩させたいと強く思つただけでも嬉しかったです。

合宿を終へて自分のアホさにくやしくて早く帰つて勉強したい





「全体感想自由発表」。次々に登壇した友らは、四泊五日の寄宿教室で得た感動を湧き上がる思ひそのままに語ってくれた。

## 先生方の御講義は自分の刺激になった

(亜細亜大学 経営 一年 角田憲彦)

この合宿を通して自分が学んだことは、和歌のすばらしさ、そして自分の非力さともいったようなことでした。小柳先生の御講義を拝聴して、和歌が持つエネルギーを理解することができて大変勉強になりました。また、村松先生の御講義の中にあつたペリー来航の真相、まちがった日本の歴史教育、そして今の混迷の世の中で、あの明治維新——日本人が自分で考えて自分達の歴史に合う国づくりをしたというその原点に戻って出発すればよいという考え方には大変感銘を受けました。すばらしい先生方の御講義をたくさん拝聴して、本当に自分に刺激になりました。はつきりとはわからないまでも、何かしら自分の中に何か起きたような、何かがあつたかめたようなそんな不思議な気持ちです。ありがとうございます。

生ありてふたび逢へるわが班友にしばしの別れを告げる寂しさ

## 新しい力を改めて与へてもらつた

(公務員 神谷正一 35歳)

全日程を通じて天候があまりすつきりしなかつたにもかかわらず、さはやかな思ひを呼び起こしてくれた合宿となりました。ご講義には、新たな事実を教へて頂いたものや、自分の行ふべきことを示唆して頂いたもの、あるいは、心に直接訴へかけられるものがあり、実に有意義でした。言ふまでも

なく、当合宿では心を働かせ、互ひに心を通はせ合ふことに重点が置かれてゐるわけですが、班別研修において皆の心が開かれて素直な言葉が語られ、それに触れることができたことで、新しい力を改めて与へてもらふことができたやうに思ひます。皆さん、ありがとうございます。

若き班友の語る言葉の貴さにつとむべき道を教へらるるも

## 第二十一班—女子学生—

謙虚に、素直に見つめていきたい

(長崎大学 教 研究生 早田保美)

今回は学生生活最後の参加でした。毎回痛切に感じることは、心を生きてはたらかせることの難しさ、又大切さです。以前に学んだことをもう一度きくと、あるいは話すとき、自分はわかっているのだ、知っているのだとどうしても心をはたらかす努力を怠つてしまいがちです。そうした危うさに対する恐れ的心を抱きつつ謙虚に又素直に物事を見つめる眼を養つていかねばと思つています。長内先生が「わからないと思ふことはかきこいことなのです」とおっしゃつて下さつたお言葉をしかと胸に刻んで一つ一つ地道に自分の足跡を残していけるような学問の道をこれから歩んでまいりたいと思ひます。五回の合宿の中で学んだことは、私の人生にとつ

ての指針となりました。

合宿で学びしことをひとすじに胸にあたため生きてゆきなむ  
さまざまに出会ひし友との交りにおのが心も高まりにけり  
合宿に心くだかるあまたなる人のいたつきをしみじみ思ふ  
願ひこめ教へ下さりし師の君にこたへまつらむ吾となりたし  
ふるさとに帰りて後にさまざまの師や友どちに文をおくらむ

### 和歌、昔の人につながる

(大阪樟蔭女子大学 学芸 四年 永島千詠)

小田村先生が開会式で「大学の偏差値や年令差はここでは全く関係ない。一人の人間として、感じ、深めていくところである」という風なおことばをきいて、ものすごく嬉しかった。けれど、一日め、二日めと、いまひとつ感動の手ごたえが感じられなくて、不安で心配で、気分的にも落ちこんでいた。短歌創作で実際つくってみると、しつくりとくる言葉が見つからなくて大変でした。心そのままを言葉に表わすことがどれほど難しいことか。短歌相互批評で、相手の思いを分かろうとする真剣な姿勢に、また自分の気持ちをつかってもらえたという喜びを大きく感じました。

和歌を詠むことによつて、昔の方々とつながっているのかなーと感じました。これが日本の心なのでしょうが？

先人の残されし和歌さくたびにあつき想ひに涙あふるる



閉会式で学生を代表して、九州国際大学法経学部三年、佐藤公治君が「短歌の相互批評のとき、友と心を通はせることができ、とても嬉しかった。この体験を大学生活でも持つことができるやう努力していきたい」と決意を語ってくれた。

もつと勉強をしなくては

(大阪電気通信大学 工 一年 佐藤仁美)

合宿のパンフレットをみて、「短歌創作」というものがあるらしいと初めて知り、とても不安でした。作る時には、歌にする言葉を知らず大変苦労しました。

短歌相互批評では、みなさんの出される歌にただただうなずき感心するばかりで何の意見も言えず、申しわけないと思っております。しかし皆さんのおかげでよい歌となり、うれしくおもいます。もつと勉強しなくてはと、痛感しました。

班別討論では、内容をつかめないために意見もできず、聞いているばかりでしたが、皆さんがいろいろな感じ方をなさっていて、すごく勉強になりました。

これから帰って、ここで習ったことから何かをつかめるのかもしれない

七沢の土地に集ひし数日に理解し合へる班員とも見つけたり

困ったこと、初めてのことばかり

(拓殖大学 外国語 一年 砂倉君香)

班別討論のときは、何と答えていいのか、とても不安でした。また、天皇制とか短歌とか、話し合ったことがなかったので、本当に困ってしまいました。でも、班長さんが「思っていることを素直に言えがいい」とおっしゃってくれたのでリラックスできました。

合宿で学んだことは？と聞かれると答えが出ません。なぜなら、講義は理解できませんでした。また「素直に気持ちを伝えることができない」という悩みを持つていたわけでもありません。私はこういう合宿は初めてだったから、驚いてばかりでした。慰霊祭・短歌作りなど、一生心の中にやきついそうです。

とにかく、ほっとしています

最終日さやかな風に吹かれつつ今日七沢の丘を去りゆく

村松先生は尊くあられた

(尚綱大学 文 三年 中谷映子)

最も感銘を受けたのは、第二日目である。病気を押して参ぜられた村松剛先生のお姿は尊く、まばたきをする間が惜しいとさえも感じた。実際、まばたきの回数は普段とは比べものにならない程に少なかったろう。御講義が終盤に近付くにつれ、いつしか村松剛先生と三島由紀夫先生とが重なって見えるように思われて来て、先生か御降壇をされる時には、御二人の先生が去って行ってしまわれるという悲しみに、目頭が熱くなった。あの時、三島先生は、本当に、あの壇上にいらっしやっていたのかもしてない。

去られゆく師のお姿の尊さに何も語れずただ涙せり

## 「自然に受けとめる」ことの大切さを知った

（青山学院大学 理工 一年 山内真起子）

今は疲労感でいっぱいです。でも充実した四泊五日でした。苦労したもの一つはやはり和歌でした。自分の心のままに詠むというのは、まず自分の心を見つめ直さなくてはならないということ、とても困りましたが、その次の日の長内先生がお孫さんの手紙を紹介なさり「ただ父母に、友人に、恋人に手紙をかくようにすればいいのだ」とお話しして下さったとき、今まで困っていた理由がわかったような気がしました。誰かに伝えたいというほどの感動を味わった時、自然に詠むことができてくるのでしょうか。

慰霊祭も印象深いものでした。簡素な祭壇や簡素な式に伝統の長さを感じました。魂は身近にあるもので、自然にうけとめればいいんだなと感じました。

加納先生は、私の歌を、わざわざ一度部屋に戻ってまた直して頂き、見違えるような歌にしてくださいと本当に嬉しく思っています。

まだまだ書きたいことはたくさんあります。

最終日、漸く晴れて

天を見上げあらためて知る空の青山の緑のうつくしきかな

カメラ・レポート 28



主催者を代表して(社)国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生が「この合宿教室で皆さんの心に深く残った講師の先生のお言葉、また班の友らの言葉をどうぞ大事にして下さい」と語られた。

自分の気持ちを素直に語り合えた

（神戸女子大学 文 一年 波多野洋子）

この合宿に来てる人たちは、自分の気持ちを素直に出して語り合うことができるというすばらしい仲間でした。大学で本音を口に出して語りあっている人は何人いるのでしょうか。本心をださない人が多く、私もその一人でした。こうして、何も迷うことなく語り合えるのはどうしてなのでしょう。先のことも昔のこともなく今だけを考えて、過去にも未来にも左右されずに自分の意見を述べられるからだと思います。私は八月八日に十九才になったのですが、班の人達が私の誕生日を祝ってくれたのがとても嬉しかったです。初めて出合った人達に誕生日を祝ってもらえるなんてめったにないことだと思います。十九の誕生日をこの合宿で迎えることが出来たのは、必ずよき宝として残ると確信がもてました。

七沢に友と語りしこの集ひ第二の故郷となりけるかな

生まれ育った五島を少しでも良くしたい

（長崎大学 一年 白石由美子）

私は長崎県五島列島の小さな島で生まれ育ちました。大学受験は教師になる夢を叶えるため、迷わず教育学部に決めま

した。どんな教師になりたいかを考え、大好きな五島のために何かをしたいと思うようになりました。そして、五島のためにという思いは国のためにという思いにつながるものと考えました。国のために、私の生まれ育った五島を少しでも良くしたいと思うのです。この国文研の合宿に参加し、御講義を聞き、友と語り、目標に向けて頑張ろうと思いました。

大東亜戦争を起した人は悪い人か、という長内先生のお言葉が胸に響きました。歴史を一方からだけ見てはいけない。全てを見ないで結果だけを見て良い悪いを決めてはいけな**い**と強く感じました。また来年学びに来ます。

雨あがり風に木々の葉さはめきて白き葉裏をのぞかせてをり

久しぶりの太陽見むと木々の葉の裏ひるがへし喜ぶといふ人あり

一本の木の喜びを我のご感じる心の豊かさを思ふ

我もまた他の喜びを我のご感じる豊かな心持ちたし

体のせが震え、登壇した

（早稲田大学 社会科学 三年 中島淳子）

合宿に来る前、自分を支えてきてくれた人達に報いるためにも何か一つでも得られるように努力したい。またどんな考えでも、どんなことも受け入れられる寛容さを学びたいと思っていました。どうしても冷たい目で突きはなしてしまったり、現実と理想の間で迷っていました。今この四泊五日を振り返って、最初の決意をどこまで自分の心にとめてやってきたかと考えると、本当に情無いかぎりです。

全体感想自由発表で友人が登壇しました。友人は正直に自分の思っていることを話しました。聞いているうちに体の芯が震えるような感じでどうしていいか分からなくなりました。班友に自分の心から思っていることを言えなかったと告白するのは、お互いにとって酷なことだと思いましたが、このまま別れてしまう方がかえって申し訳ないと思つて発表しました。

発表後部屋に戻った時の班友の言葉が非常にうれしく思いました。本当に有難いです。課題は沢山残されていますが、物事が動き出せるような気がしています。

最終日やうやくにして暗れあがる光景上ぐれば涙こぼるる

### 学んでいく上での指針を見つけた

(明治大学 商 一年 長谷川知子)

初めての参加でいろいろ不安もありましたが、興味深い御講義の数々や親切な班員の皆さんに助けられ、実によい勉強になったと思っております。

日本の国のこと、現在の若者や政治等多岐にわたる話を拝聴でき、高名な先生方の情熱のこもった御講演を真近かで聞くことができるという幸福を掴め、これから生き学んでいく上での指針を見つけた思いがします。

大学生活、日常の中では得難い右傾向のあるお話も、どうしても話題に乗せにくい今日このごろでは非常に感銘を受けました。大学の友人とは一味も二味も違う方々とめぐり会え



別れの時は来た。「お元気で!」「また会はう!」再会を約し、堅く握手を交はす。

わずか五日間でありましたが、人生を通じて付き合っている友を見つけた思いがします。

七沢の野山を包む雨空は出立祝ひ陽光ひかりに変わりぬ

この合宿はいつまでも心に残っているでしょう

（拓殖大学 外国語 一年 小山かほり）

私はあまりかた苦しいことが好きではなく、みんながこのような合宿に来るのが不思議でたまりませんでした。御講義には第一日からいねむりをしてしまい、班別研修でも自分の幼さと教養のなさにただただ恥しい思いでいっぱい最後まで送れたのは友人と班員と他の班の人達のおかげです。

合宿の第一印象は右翼っぽいということでしたが、御講義を聞くと納得する面もありました。私は自分が正しいと思うところは変えなと思います。自分が間違っていると思う部分は変えて、ここで学んだよいところは自分の中に取り入れていきたいと思います。せめて、一ミリぐらいでも成長しているといいなと思いました。この合宿は、私の心の中にいつまでも残っていることでしょう。

さよならと七沢の地に手を振れば風が乾かす頬の涙を

このまま帰りたくない気持ちです

（京都外国語大学 外国語 二年 渡部祥子）

本当にあつという間に合宿が終わってしまいました。国文研の合宿は初めてで期待半分、不安半分でした。はじめは班

討も静かで、正直に言う少し気が重くなることもありましたが。ですが、だんだん皆といるのが楽しくなってきた、今日はこのまま帰りたくない気持ちになっています。

先生方は本当に熱っぽく講演して下さって、今まで思ってもしなかったことについて考えさせられ、これまでの自分の浅さに気づかされました。それだけに班討の時間が少なく感じられました。

激しい感動はなかったと思いますが、静かにしみ入るものを感じました。友人の深い感動に自分の内にも共感できるものがあり、本当に嬉しい気持ちで沸いてきました。来年も参加したいと思います。

ちちははがうましくにこのわれをうみそだてしことありがたしとおも  
ふ

## 第二十三班—女子学生—

心で感じた日本のすばらしさ

（九州造形短期大学 写真 一年 佐野 果）

現在の素直な気持ちを申しますと後一日でも二日でもいいから、この七沢の地で多くの先生の御講演を聞き色々なことについてこの地で得ることのできた友人たちと語り合いたいと思っています。それは、今まで日本のすばらしさや、日本



の教育の誤りなどを頭で理解していたのですがこの合宿を通して、それらのことが本当に心で感じる事ができるようになってきました。自分の中にある昔からの日本の心も少しずつながら解るようになってきましたし、有意義な時間を過ごせたことを心より感謝いたします。

合宿に参加し得ざりし我が友に学びしことを語りてあげたし

自分が日本人なんだと本当に自覚することができた

(拓殖大学 外国語 一年 高橋昭子)

合宿初日、私は精神的に拒絶反応を起こしてしまった。いろいろな先生方の講話を聞いて、確かに感動するところもあつたけれど、どうしても心から日本の事にそして自分自身に班員達に向きあうことができなかった。しかし合宿三日目佐伯先生の講義を受けた時、気付かされたことがあつた。講義の始めに外国人には日本人が感じる「初雪」などに対する心が分からないと仰られた時、私は日本人なんだと……。確かに私は日本人だけれども、今までそう自覚したことがなかった。外国の事ばかりに目がいついていたからと思う。誰に教えられた訳でもなく、自分の心の中にもそういう心が宿つていたということに気づかされて、本当にうれしく感じた。私がこの合宿で得たことは自分が日本人なんだと本当に自覚することができたことだと思います。おそらく私はこの合宿に参加していなかつたらそう自覚することが出来る機会には、もう出会えなかつただらうと思います。そして外国語を学ぶ者

として真剣に日本に向きあい自分自身を見つめ直していこうと今思っています。

真剣な班員ともの姿を見て我思ふ心に素直に生きてゆかうと

自分の視野が一まわり大きくなった

(千葉大学 教育 一年 内藤雅子)

私にとつてのこの合宿はあまりにもハードすぎた。学んだことより混乱したことの方が多くように思える。というのは今まで学校や自分で学んできたこととここで聞かされた話が全く正反対といつても過言ではないほどかけはなれているからだ。今の時点でどつちが正しいかなど、私には判断できない。非常に混乱している。でもここへきたおかげで自分の視野が一まわり大きくなったのは事実である。私は教員志望であるのでここへきて知つたことが大きく将来役立つと思う。自分の今までのふにやふにやした指針がきつちり片付いたただけでも大きな収穫だと思つている。

国文研あまたの事がありたれど良き思ひ出ににけるかも

大好きな日本の事を

分かつてもらえようになりたい

(亜細亜大学 国際関係 一年 松田育美)

今回一番良かった事は、これから何を学ぶ必要があるのか私には何が欠けているのか等を発見できた事でした。「学ぶ事は楽しい」という意味が私にも少しでも分かつてきたよう

な気がしました。来年又アメリカへ留学する時には胸をはつて立派な日本人として大好きな日本の事を少しのアメリカ人にでも良いから分かってもらえらるるよう努力して行きたいというのが私の今一番の夢です。今回たくさんの先生から話を聞き一番印象に残ったのはどの先生も日本を一番心配して愛して誇りに思っているのだなあという事でした。私もこのような先生方の助けとなるような人間になりたいと思います

いづこにか良きにしへの勇者達我が日本の目覚めをねがふ

大切な事はより善く生きるのをめざすこと

(京都女子大学 家政 四年 小森美智子)

今回この合宿において一番感じさせられた事は、何よりも大切な事は自分がいかにより善く生きるのかをめぐりてその実現に向けて努力を積み重ねていく事であり、そしてその事こそが全ての問題の解決の糸口となっていくのだという事でした。そうした中自分を振り返った時私に一番欠けていた事は、全ての事に対してありのままに接するという姿勢ではないかという事を感じさせられました。

そうした私にとって長内先生の素直な感情を即そのままに和歌に詠みあらわしていかれている御姿には何か大きなショックにも似た強い感動を感じさせられました。これからも修練を積み重ね更に奥深いものを探し当てていきたいと思

います。

少しでもより善き生を生きるため今日より新たに学び重ねん

学ぶ楽しさがわかつてきた

(九州女子短期大学 初等教育 二年 宮崎田香)

他の様々な合宿で班別討論をするとうしても頭で考へる自分があったので、もっと心で感じる自分になりたいと思つてゐたが、この合宿では表現するのに難かしいと思つても感動したことを素直に人に伝えることができてとても嬉しく思つた。よく國文研の先生方が「学問は楽しくするものですよ」と言はれてゐたが最初あまりつかめなかつた。でも自分の人生を問ふていくことが学問だといはれた時に本当の学問がわかり、学ぶ楽しさといふのもわかつてきた。小柳先生が話された「國がら」といふものをもっともつと感ずる学びをしていきたいと本当に思つた。いろいろな先生方が和歌は日本人の魂のエッセンスだといはれたが、感じなければいけないと力むのではなく思ふこと思ふがままに三十一文字にのせることよつて心を鍛えることをしようと思つた。この素晴らしい環境の中で素晴らしい合宿をうけることができたことに感謝致します。

小柳先生の御講義を受けて

美しき大和言葉に素直なる吾の心をのせていきまし

## 第二十四班 女子学生一

初めて会った人とここまで仲良くなれるとは

(拓殖大学 外国語 一年 荒井のぞみ)

まさしく毎日の班別討論は「激論」でした。お互いの考えを思うままに述べる。賛成意見も出る。「納得いかない」という声も出る。時には涙を流して話し合う。素晴らしいことです。かつて日常生活でこのようなことを味わったことがあるだろうか。その時その時を真剣に取り組んでいるみんなの瞳はいつもと違っていました。こわいくらいでした。一人一人の言葉に「はっ」とさせられることもありました。

それにしても初めて会った人達なのにここまで仲良くなれたのはとても不思議なことです。これから先、私はもっと多くの人と知り合うでしょう。今回の合宿は人との接し方を教えてくれたように思います。

さりげない友の言葉に胸打たれ知らず知らずにあふるる涙

心が一つにかよい合った

(高知女子大学 文学 三年 中川つぐみ)

素晴らしい合宿に参加できた事に感謝の気持ちでいっぱいです。特に班討論の中で多くの学びがありました。心を働かせると班員一人一人の言葉の中に素晴らしい感性を感じるの

です。初めての人も二回目の班長さんも、みんなこの合宿で感じる心がどんどんみがかれていくのを感じました。皆がいっしょうけんめい話している人の目を見て、聞いているうちに、学年など関係なく心と心のふれあいを通じて一つになったという感じでした。

本音で語り合った

(上田女子短大 国文 二年 花見智子)

私はこの合宿の講義でいろいろなことを学びました。天皇陛下の御心の深さ、心からの愛国心、そして心がけなければ感じる心は育たないのだということ等々。

確かに、講義を受けて学ぶのですが、実際深く気付かされるのは、その後の班別研修の時でした。相手の意見を聞くことによつて、より深く感じられるのです。私の班では誰れも建て前を言いません。本音だけです。誰も相手を否定しませんが、ただ皆相手の話をよく聞いて、そして自分の感じたことを言うのです。勿論違った意見も出て来ます。けれどもそこで対立するのではなく、自分の意見を分かち合ってもらおうとするのです。相手の気持ちを汲み取ろうとするのです。ここで私が感動したのは、討論などをした後、よく疲れがちですが、班別研修の後には全く疲れを感じず、むしろすがすがしい気分になった事です。これは素晴らしいことです。誰れも無理をしないのです。

涙ため言葉をさがし口ごもる友の姿にその心みる

感じたことをありのままに述べられた

(桜美林大学 国際 一年 星野有佳子)

私は聖人君子みたいにな人よりも悩んだり怒ったりする人の方が好きだ。悩んでいいと思う。悩んでいることを恥づかしと思ったり、自分はこんな人じゃないと隠したりする人は嫌だ。私がひねくれているかもしれない。でもみんなはいい子ぶっているのではないかと思う。昔はこういう風に考えてしまう自分をいさめてみたりもしたが、そうではないのだ。最初に感じたことが自分なのだ。それが自然だからそれを隠すことはないのだ。

私は来年は、この合宿に参加しないかもしれない。でもこういう場があるというのはいいことだ。悩む人たちに道を聞いてあげられるかもしれない。いつかまた参加したいと思うだろう。

雨も上がり久しぶりに見る青い空蟬の声聞さうれしく思ふ

最終日感ぜしことを壇上でべた気持ちのなんとすがすがし

いつかまた出会うことを願ひつつ決して忘れじと友に手を振る

部屋に戻り先に帰りし友のこと今頃何処かと思ひをはせる

心地良く友との会話はすませる夏の風吹く今日の天気は

得がたき友を得た

(愛知文教女子短大 デザイン 一年 森川恵理)

今回私が得たものの中で一番嬉しかったのは『友だち』で

す。合宿の開会式のあと、私は自分の班の部屋に行く途中、非常に不安だったのですが、最初の班別自己紹介の際にその不安は一気に吹きとんでしまいました。とても良い人ばかりで、話し合いも大変盛り上がり、真面目な話も、軽い話でも皆が親身になって聞いてくれました。たった五日間しかここにいないにもかかわらず、ずっと昔からの親友や兄弟みたいな気がすることもよくありました。この合宿が終ってもいいかみんなで会いたいなと思いました。

緑濃き厚木に集ひし我が友としばしの別れ名残りをしくも

意気投合できた

(熊本女子大学 文 一年 千原あけみ)

同じ班の人たちはとてもいい方たちだった。自己紹介したその日の内に、初対面とは思えないくらい意気投合できた。おかげで隔意なく意見を交わし合えた。私はこのような話し合いを初めて体験したような気がする。今ではもう班の人たちとつい四日前に会ったばかりなんだという事も信じられない。これでは「実は私は人見知りするんですよ」などといっても信じてもらえまい

いづれまた相見ることあらうよと差し出されたるアドレス帳よ

折にふれて和歌を作りたい

(立正大学 仏教 二年 村山智子)

講義の中では小柳先生のお話がとてもすごく印象に残ってい

ます。「国がら」という言葉またその意味を聞いた時、何故  
だか涙が止まりませんでした。自分の国をどれだけ自然に素  
直に見ることができるとかという思いでいっぱいでした。

また「美を求める心」というのは養い育てようと思わないと  
衰弱してしまうということを忘れてはいけないのだと思いま  
した。

和歌に関して考えてみると、和歌を作ったのは昨年の合宿  
以来のことです。長内先生が「折にふれてでいいから自分の  
気持を詠んでみなさい。」と言われました。これからは折に  
ふれて和歌を詠むよう心がけたいと思います。

都合にて先に帰りし友のこと発表中にもふと考へる

## 第二十五班—女子学生—

歌を詠む心、国を思う心は愛する家族・友を思う心

(熊本大学 教育 二年 松岡恵美)

私はこれまでサークルで学んできた日本の伝統・文化を  
もつと素直に心から実感したいという願ひをもって合宿に参  
加しました。

合宿で最も印象に残ったのは長内先生の短歌全体批評でし  
た。先生は、「和歌を詠む心、国を思う心は愛する家族・友・  
恋人を思う心と同じだよ。」と、人情味ある東北なまりで語っ  
て下さいました。和歌を詠む心や国を思う心は何も難しいこ

とではなくて、我々の中にあるのだとしみじみ感じられ、涙  
があふれてきました。最終日の感想発表でもどなたか「あり  
のままの自分でよいのだ。今の自分を大切にしていゆきたい。」  
とおっしゃいました。私も素直に今の自分をみつめつつ、大  
学に帰っても学んでゆきたいと思ひます。

新谷さんへ

先人の心うけつぎ後の人に伝へんとする先輩は尊し

「慰霊」—先人の方々の思ひを受け継ぎたい—

(京都外国語大学 聴講生 四年 新谷幸恵)

今回私にとって二回目の国文研で学ばせて頂いたことは  
「慰霊」といふことについてです。先人の方々の「霊」をお  
慰めするといふことは、私にとっては、先人の方々の思ひを  
自分自身が受け継ぎ、他の人にも伝へていくといふことです。  
先人の方々のどんな思ひかというと、今の私にとっては、  
「祖國日本を守りたい、永久に日本國の御生命が連なつてほ  
しい」そして「後に続くを信ず」と信じて下さった方々の御  
氣持ちにおこたへしたいといふことです。

今までは「伝へないといけない」といふ義務感や申し訳し  
ないといふ思ひが先行していました。しかし、香川先生が、  
「あなたはねへ、伝へないといけないって焦らなくてもいい  
んですよ。あなたがちゃんと受け継ぐことが出来れば、そ  
れは自然と伝はるし、心から伝へたいと思へますよ。まずは  
受け継ぐことをしっかりと、時間がかかってもいいからやっ

てみなさい。」と言って下さいました。言はれてすぐには正直分からなかったのですが、今は、その御言葉が、國文研の中で一番心に残っています。合宿から帰つたら、「統一のちささげて」を毎日少しずつ、拝読させて頂きます。

小田村先生ゆ村松・佐伯両講師が入院中御講義下さるをさきで

かくまでもして我々に御願ひを伝へんとさるる御心しのばゆ

### もつと学びを深めたい

(淑徳大学 社会 一年 斎藤靖子)

今まで私は大学などで楽しい話をする友達が多勢いても、日本や戦争についてなどまじめな話をする友達がほとんどいなかった。いたとしても日本を悪く言う人しかいなかった。だから日本の将来がすごく心配だった。

私の祖父は戦死した。日本の国を守るために、日本人を守るために。又、日本を愛するが由に、日本人を愛するが由に、自分の命を国に捧げた。祖父は自分の子供（私の父）の顔さえ見ずに亡くなってしまった。祖父にも家族そろつての幸せだと思える様な生活をさせてあげたかった。でも今はそれができない。だから私は祖父の本当の気持ちを理解することが、私にできる最高のものだと思じている。祖父だけでなく他の方々に対してもそうである。

祖父は私に日本人のすばらしさ、日本について考えることの大切さを教えてくれた。私は祖父からの貴重な贈り物を絶対無駄にはしたくない。だからこのような合宿などでもつと

もつと学んでいこうと思う。

合宿ではいろいろな人の意見を聞けたり、すばらしい人もたくさん出逢うことができたので本当によかったと思う。毎日が感動の山だった。本当にありがとうございました。

日本の真の姿を考へる同志に会へてうれしかりけり

靖国の御魂となれし祖父思ひ胸しめつけられ涙あふれり

### 大切なのは感じることを、経験すること

(九州女子大学 文 一年 兼重厚子)

この合宿に参加したきっかけは、ありのままの自分を表現したい、と思ったからです。また、こんなことができるのも今しかないと思ったからです。私は、今まで、うれしいと思ったり、楽しいと思ったりしても、心の中で思っているだけで、素直に顔に表したり、口に出して言えなくても、かしい気持ちでいました。今振り返ってみると、今回の合宿でも、その目的が果たせなかったように思います。

しかし、一番心に残っていることは、講演の中で何度も聞いた「大切なのは感じるることなんだ。大切なのは経験することなんだ。」という言葉です。自分が本当にうれしいとか、悲しいかと思つたら、素直にそのままを出さないと、感動も半減してしまうし、本当の自分を見失ってしまうと思います。

また、今回の合宿で短歌を詠んだことが印象に残りました。自分の素直な心を言葉を選んで三十一文字の中に詠み込むということが、どんなに難しいかということが分かりました。

その後、班員の歌を批評するときに、本当にその人の気持ちになって考えようとしたことは、よい経験になりました。

七沢のウォークラリーにて

すがやかな自然の中をかけめぐりわれの心もおのずとなこみつ

疲れました

(拓殖大学 外国語 一年 小平重紀子)  
今、体調がよくないです。

朝の合宿の感想を聞いて、皆それぞれ強い感激を受けたということを言っていて、すごいなあと思いました。

私の感じたことを一つあげるとしたら、ただ疲れたということです。どうもありがとうございます。

体こわし静かな部屋が心地よくいついっまでも休みたく思ふ

## 第二十六班 女子学生

疑問に班のみんなが答えてくれた

(長崎大学 教 一年 有川由紀)

五日間いろんな先生の講義を受けました。私には少し難しくわからない面もたくさんありましたが、班長をはじめ班員の皆さん、班付の先生が疑問に答えてくれました。班討もはじめはかしこまっていたんですが、二日三日とたつうちに楽しくてそして真面目に話をできる自分がいました。それ

が本当によかったとうれしく思いました。

天皇陛下の話をずっと聞かされましたが、和歌を詠んでみて、普通の心をもった人間だと感じ、天皇に対する抵抗が少しはなくなりました。

この学びは本当に私にいろいろなことを考えさせます。自分自身様々な面で成長してゆきたいです。

五日目にやっと晴れたる七沢での合宿を振りかへるなり  
ウォークラリーにて

七沢の自然の中を歩きつつ遠き我が家と重なる景色

慰霊祭の帰り道にて

雨の中道しるべとなりし燃ゆる火に人のまごころ感じてうれし

親や先人を思うように国を思えばいい

(大分大学 教 二年 上野瑞穂)

私は白濱裕先生の御紹介で、どんな内容の合宿か詳しく知らされずに参加したのでとまどうことがたくさんありましたが、自分について考え他人の様々な意見を聞くよい機会がありました。

大学で中学社会を専攻しているので教える側になったとき自分の国についてどう教えるべきかと、社会科学教育の授業を通して考えていました。国に対する思想を右か左かに分けるなら私は多少右寄りかと思っていました。合宿中に疑問がわきました。そしてわからなくなつたところで小柳先生や長内先生の御講話を聞き、右左と考えずに親や先人を思うよう

に国を思えばいいんだとわかりました。合宿に参加して本当によかったと、白濱先生に感謝しております。

### 慰霊祭

頭こうべたれうす明かりに見ゆ祭壇に祈りささげて御霊鎮めむみたま

最終日暴風雨来たるも昼頃去る

風すぎて安堵の声をちこちに御親の祈り通じけるかな

感想文筆は進まずうわの空心はずでに故郷へとぶ

予想していた合宿と違っていた

(拓殖大学 外国語 一年 深谷亜矢子)

この合宿に来て、二日ぐらいは正直言ってつらかったです。自分が予想して来た合宿と大分違っていたからです。生活面においても、講義内容においても驚きました。普段ほとんど考えていないことを班の人と話合することは難しい気がしましたが、どうにか話している自分に感心もしました。この合宿に来て感じたことは、私が普段考えていないようなことを深く考えている人がいて、その人たちの気持ちを知ることが出来たということです。この合宿で、もっと他のことに対しても深く考えてみようと思いました。

この部屋も帰るときには去りがたらしいろい思ひしことの多かり

最終日歌つくらむと悩めどもなかなか出てこぬむつかしきかな

何かを感じた

(明治大学 政経 三年 片山明子)

慰霊祭の時、班付の加藤先生やいろんな先生方はどんな思いで毎年慰霊祭を続けてこられたのだらうかと思ううちに、引き継いでゆくことの大切さ、次に自分たちがこの思いを引き継ぐ事の重みを感じてしまった。「海ゆかば」を歌い、かえりみはせじと素直に、清らかに歌いきったブレイホールの中で、何か言いようのないものを覚えた。確かにこの時私は何かを感じたのである。

直感の力、感性は本当に大切なものである。私は日本に敷島の道という日本人の感性を養うものがあつたことに改めて気付いた。素直なる心、清き明かき心を求めて、今度出合った友を大切にしつつ、和歌を詠んでゆきたい。本当にありがとうございます。

くもりなき笑顔とやさしき心やり我に教へし班の友らは  
ひもと  
日本に古くつたはるしきしまの道に連なる我になりたし

私の意識が変わったように思う

(株千趣会 桐山澄子 31歳)

合宿参加は五回目で、班長になる度に人に何かを伝えたり教えたりするような人間ではないのに、ただ学びたいという気持ちで来ているのに……という思いがありました。話題にしたって学生とどこまで話が合うんだらうという気持ちが少



しあったため、「私と一日一緒に過ごして話がありますか」と学生に聞かれた時は言葉につまりました。けれども私はちよつと違うんじゃないかと思いました。合宿で教わったことは世代や立場が違うから話が合わないとか心を閉すことではなかったと。それからいろいろ言ってくれた事にちゃんと答えることができず、申し訳ない気持ちと言葉をかけることができなかったことへの悔しさというより哀しみにいた思いで、その夜は涙が出てしばらく眠ることができませんでした。私は自分を親切でいい人だと思っていたけれど、それは自分の殻の中の満足で、周囲の人とのつながりやいろんな体験で学んでゆくという同胞意識といったものに欠けていたのではないかと思いました。そのように気付いてから私の意識が変ったように思いました。

長内先生のお話を聞き班友と家へ葉書を送らうといふことになり

連絡をするやう言ひし母のこと文書きながら思ひ出したり

合宿に寄せられた小林国男先生の御歌に

合宿の終をはりになりて先生の御歌拜すとは思はざりしも

感想自由発表

壇上ゆ涙ながらに話さるる友の言葉に涙こみあぐ

何もわかつていなかった

(尚綱大学職員 山口祐佳里 23歳)

今回、初めて合宿に参加して自分がいかにいろいろな点について何もわかつていなかった、ということがよくわかりま

した。参加申込の際、周囲からいろんな事を耳にして自分としては、多くの考え方を学んで様々な視点から物事を見つめられるようになれば……と思っていました。実際合宿をはじめてそんな甘い考えは通用しない、と痛感しました。それは様々な視点で物事をとらえる以前の問題である、物事の本質的なものを、何一つ知りもしなければ理解もしていなかったからです。先生方の御講義、班別研修でその事に気付くことができて非常に嬉しく感じました。本当に有難うございました。

ウォークラリーにて

道行けば無邪気に手を振る男の子小さき姿が胸に焼きつく

合宿最終日

短かきと思ひし合宿振りかへり確かにあつた四泊五日

## 第二十七班 女子学生

国を想う気持ちの大切さ

(京都外国語大学 外国語 二年 児島宏美)

日本の「国がら」というものを考える時、それは理屈ではないんだということが最も大切で、私の心に響いた内容でした。感じていないことは理屈を並べても理解できるものじゃないし、理解したことにはならないということ。一つの事を

多面的な見方を試みなければ、より正しい判断は出来ないし、その時代背景での出来事を考えなければ、今の尺度だけでは善悪は簡単に言えるものではないと思います。

国のことを想うとすぐに右翼などと言われがちですが、排他的にさえならなければ、自分の生まれ育った国のことをどれほど好きで好きでたまらなくっても良いことだと思いません。

新谷先輩の感想自由発表をきいて

魂の宿る言の葉発せらる先輩の姿に涙あふれり

### 多くの講義の中で考えた

(拓殖大学 外国語 一年 井上麻穂)

私はこの合宿に先生に勧められて参加しました。最初七沢自然教室に到着したときは緑がいっぱいで自然にかまれたとてもいい環境だと思いました。合宿中はあいにくの雨天続きでとても残念でした。五日間いろいろな先生方の講義をきいた中で最も印象に残ったのは人の立派さを認めることの難しさについての講義でした。講義中に納得するところがとても多くあり、本当にその通りだと思いました。四泊五日という期間でもたくさんの先生方の講義をきいて、自分の中でもいろいろと考えることができて、とても充実した時間を過ごせたと思います。

七沢の広い自然にかこまれて考へる事がたくさんできた

### 感じるこの大切さを知った

(茨城大学 人文 一年 田添由紀)

私がこの合宿に参加して一番印象的だった言葉は、「感じることを学ぶ」という言葉です。自分の感性を大切に、それを磨いていく姿勢が重要なことだと改めて感じました。「感じる」とすべてはそこから始まっているような気がして、自分を省みるいい機会になりました。

また、とてもすばらしい友人を得ることが出来たのも本当に良かったと思います。四泊五日という長いようで短い時間の中で、日本のことについて、和歌について、友人や勉強、恋愛まで色々なことを互いに話しあい、意見を言いあって、とても勉強になったし、有意義にすごせました。本当にこの合宿に参加できてよかったと思います。また、機会があればどんどんこのような企画に参加したいと思います。

七沢の自然の中にとけこんだわれらが友情永遠となれ

### 言葉の大切さを知った

(熊本大学 法 一年 成清幸子)

私は友人の紹介で、この国文研の夏期合宿セミナーに参加しました。何の気もなく参加した私から見ると、他の皆の何かを学びとろうという姿勢がすごく立派で、こんなにはばらしい人達の中で、果たして自分はやっていけるのだろうかとか不安でいっぱいでした。ところが、はや合宿を終えてみると、

何かもの足りない思いがしました。もつと先生方の御講義を聞きたい。もつといろんなことを語り合いたい。こんな思いでいっぱいだったのです。身体的には疲れても、精神的にはかえって生き返ったような気がします。

合宿中、いろいろなことを経験しました。御講義拝聴、班別討論、ウォークラリー、短歌創作、そして慰霊祭等。初めての短歌創作に戸惑いながらも、一首詠めた時は、本当に嬉しかった。また短歌相互批評では、一つの言葉に込められる作者の思いがどれほど深いに気付かされ、言葉の大切さを知りました。

日常では得られない大切なことをたくさん教えていただきました。本当にありがとうございます。

方々のいろいろなお話し拝聴し視界の広さ改めて知る

## 日本の正しい歴史と友達と自信と感動を得た

(玉川大学 文 一年 宮本瑞穂)

私は、この合宿に自分の強い希望で参加した訳ではなかったが、参加して本当によかったと思いました。普段の生活では自分の考えていること(特に天皇制や政治や日本の歴史について)が、友達にもなかなか言えない状況だったけれどもこの合宿では初めて会ったばかりの人達なのに気がねも遠慮もなく自分の考えていることが素直に言えたことと、同じ班の人達が真剣に聞いてくれたことがとてもうれしかったです。

初めて詠んだ短歌を長内先生に批評していただけたこと

と、班別の批評の時、班のみんなが心から私の気持を考えて、いろいろな意見を言ってくれた時は涙が出るほど感動しました。この合宿では、日本の正しい歴史と友達と自信と感動を得ることができました。合宿で学んだことを普段の生活に生かせるように努力していこうと思います。

慰霊祭に参加せし祈りに

神秘なる降神の儀のしずけさに心洗われ身もひきしまる

## 長内先生の御講義に心の叫びを感じた

(全日本学生文化会議 清水久仁子 27歳)

この合宿の講義は、私の日ごろの文化会議での仕事上、なくてはならない大切な内容ばかりなので精一杯がんばったつもりです。文化会議報(文化会議で出している学生のための新聞)を書く上でもこの合宿の学びが原点です。なるべくノートを取りながら拝聴させていただきましたが、かなりの聞き落としがあるのが残念です。又、長内俊平先生のお話では先生方や日本中の心ある方々の叫びのようなものを、直接聴かしていただいたやうに思ひ、何度も涙が出てしまひました。頭で知るのではなく感じるこの大切さを考へてゐたことなのでこの合宿に一貫して流れてゐる感じることを学ばせていただいたことは本当に有難かったです。又、この度は班長としてやっと落ち着いて臨むことができ、少しづつ心にゆとりがでてきたやうに思ひます。班の皆から多くのものを学び、生涯忘れることのできない合宿となりました。

班友と過せしときは短かくも忘れまじきとき過したるかな

## 自分の幼さを知った

(拓殖大学 外 千田 由里子)

先日、合宿でいろいろな人の講義を聞いたたり、班友とそれぞれの考えを語り合ったりして、自分の幼さを知りました。ただ何げなく毎日を過ごしていたけれど、合宿中には様々な事を考えさせられました。国民文化研究会の方、又、合宿でお世話になった皆様、どうもありがとうございました。合宿で得た事を今後生かしたいと思います。

夢を持ち日々送る友らに囲まれて吾の幼さを省みるな

## 第二十八班 女子学生

### 多くの発見をさせてくれた班員に感謝

(拓殖大学 外国語 一年 佐藤まさ子)

今回、初めてこのような合宿に参加しました。初めのうちはとてもかたくなるしいものを感じ、緊張もほぐれず、討論でもなかなか意見が出せませんでした。しかし、自分の意見がたとえ短くても、班員が真剣に話を聞いて、そこからうまく話をひき出してくれ、どんどん討論がもり上がっていくのを感じました。普段、学校ではこのような話は聞けません

し、友人ともこのような話をする機会もありませんでした。班別討論を通じて今までにない体験ができ、また自分でもこんなに意見を出したりできるんだ、と改めて実感しました。いろいろな発見をさせてくれた班員みんなに、とても感謝しています。

新たな発見多き五日間我が身自身を見つめ直して

### 自分の想いを言葉にできて

(早稲田大学 教育 一年 伊藤佳恵)

この七沢で過ごした五日間は、私にとって本当に貴重な体験となりました。

大学生になったら必ず一度は国文研に参加するように、という父の言葉に半分イヤイヤながら参加した合宿でしたが、心から尊敬できる師と心から話し会える友と出逢うことができました。それまで、自分なりに日本という国について真剣に考えてはいましたが、御講義を聞かせて頂いたり、班友と話し合いを重ねたりするうちに、私は今まで頭で考えているだけだったのだと気付かされました。自分の想いを心から発する言葉として皆に話したい、伝えたいと思えることのできた喜びは、私にとって一番の収穫でした。

本当に楽しい五日間でした。

思ふこと友に伝ふる大切さこの合宿で感じたりけり

両親の勧めで渋々参加して

師や友と逢ふて分かるは両親が我に伝へんとすその想ひなり

## 短歌を創る楽しさを見つけて

(拓殖大学 外国語 一年 平山倫子)

短歌をつくるということも知らずに初めて合宿に参加し、とても不安で、また緊張もしていました。しかし、班員が皆でいろいろと考えを出してくれ、和歌に自分の考えを自分の言葉で表わせなかったイライラを解消してくれました。班員全員が私の立場で私の気持ちを理解しようとしてくれた気持ち、とてもうれしかったです。班員六人の気持ちが今、一体となろうとしていると思うと、不思議な感じでした。

班友たちが私のことを理解してくれようとすることに喜びを感じ、そこに短歌をつくる楽しさを見出しました。

また、先生方の御講義は今までの私の生活を反省する資料となり、これからどうやって生きていったらよいか、とても参考になりました。精神的に大人になるよい機会でした。

講義聴きいろいろ考へ成長せし我見て母はどう思ふらむ

## これからの目標

(福岡教育大学 幼教 研究生 谷口美絵)

この合宿では、今までと違ったいろんな人との出会い、学びとの出会いがあり、広い視野で人と接して物を考え、見てゆく場だったように思います。

一日目、ヒルネダイスキ人間というお話の中での「気づきは」について、自分の感じたままを言おうとしたのですが、

人に伝えることの難しさを感じました。しかし、自分の思い、感じたことを素直に言えた時、人と人との心が通じあう喜びを感じる事が出来ました。ここに来て、楽しいことが本当に大事であり、日本人としての生き方、本当の精神こころを学ぶことが人として大切であると思いました。人生は、一学生びだと思えます。

これからの目標は、まず人の話をよく聞くこと、その人の話に心働かせ、心よせていくこと。そして、広く人の意見を聞く包容力を持ちつつ、まことのこころ、まごころをもって見極めていける人になっていきたい、ということなのです。

目に見えぬ人の力で創られし合宿教室尊きものなり

小柳志乃夫先生の合宿を顧みてを聞きて

さまざまな人の思ひのこめられし尊き力を今感じたり

話さるるひとつひとつの言の葉に内に秘めゆく思ひを感ず

夜の集ひの出し物の感想を言ってくれた友に

昨夜の思ひ思ひの感想を述べらる友らのありがたきかな

純粋な姿を見たとき友どちの語られしこころうれしかりけり

すべては自分から

(太陽生命 矢野 香 21歳)

この合宿に来て本当によかった、と心からそう思っています。

学生時代の学びを胸に社会に巣立った私は、一年目にして社会の厳しさを目の当たりに体験しました。しかし、学生時

代培った信仰と、根性と努心と真心とで、私のことを思つてのことだと感謝の心で乗り越えてきました。それでも、どこまで相手を信じていいのか分からなくなる時があり、自分では真心で接しようと努力するが、なかなか表現できません。少しイライラした気持ちがある自分の心がイヤで、清めたいと思ひ、求めるようにこの合宿に参加しました。

この場では、素直な自分を表現できる、ありのままの自分を肩肘張らずに……。いつの間にか、一生懸命心を働かそうとしている自分を発見しました。

結局は、自分で自分を縛っていたということが分かつてきました。すべては、自分からです。自分の心を働かせ、相手の本当の心を思いやり、偲んでゆくことを、続けていくことが大切だと思ひました。

素直なる心はいつも大切に日々のくらしをすこしていきたくし  
行く先にいかなることがあらうとも清く素直に生きてゆきたし

### 新たななる自己認識

(尚綱学園 職員 白杵直子 23歳)

今年の夏、何よりも楽しみにしていたこの合宿も、もう三度目の参加となりました。昨年同様、学生班の班長をさせていただきましたが、今回は学生から社会人となつてのこともあり、学生班の班長を務められるかどうか戸惑いと不安とのスタートでした。

班員たちの真の言葉に触れたくて、一人であくせくしてい

ましたが、班別討論を重ねるうちに、私が何かをしてあげずとも、班員各人が講義を通じ、話し合いを通じて何かを感じ、自ら心開いていくことに気づきました。日々重ねるにつれ、一人一人の瞳の輝きが増し、一生懸命語る姿をみると、「心の底からの感動を抱いてほしい」という願いにも似た思いでいっぱいでした。

今回の合宿を通し、私自身がだいに後輩へと少しづつ何かを受け継がれゆく立場にあることを、強く実感しました。その意味においても、貴重な経験をさせていただいた、新たな自己認識の場であつたと思ひます。

#### 班別討論にて

輝ける班友の目のその奥にあふるる真心感じてうれし  
語りゆく友の言の葉しみ入りて我的心も和みゆくなり  
雲間より青空のぞく最終日心晴れゆき笑顔こぼるる

### 第二十九班—女子学生—

日本に生まれたことが嬉しい

(早稲田大学 経済 三年 伊藤華恵)

合宿がもうすぐ終わろうとしている今、とても静かな落ち着いた気持ちでいます。一昨年に初めて合宿に参加して「まごころ」の大切さを学びましたが、日常生活の中でそれを忘

れがちになつていたことに気付き、再び、その大切さに思いをいたしています。

今回の合宿では、病気をしておして御出講下さつた村松先生、佐伯先生のお話がとても心に残りました。村松先生がお話された「五箇条の御誓文」や「新日本建築に関する詔書」、又佐伯先生がお話された「鎮魂」や「日本人の共同の無意識」について考える時、日本に生まれたことが、とても嬉しく思えました。

班別研修では、どうしても頭だけで考えてしまい、心を働かせることの難しさを痛感しました。又、小柳左門先生が言われた「歴史上の人物の一生を、解釈は抜きにして、その気持ちを偲びつゝ、丹念に追つていくことが、自分の人生への示唆になる」という言葉がとても心に残っています。先人の思いを受けつぎ、後の人々へと伝えて行くという連なりの中に自分は存在しているのだと思ひ、自分をもっと高めて行かなければならないと強く思いました。

先人が尊き生命捧げられ守りし国に我は生まれり

素晴らしき国に生れし喜びを我心よりかみしむるなり

## 「天皇」にふれることができた

（亜細亜大学 国際関係 一年 加藤 綾）

合宿では、全国各地から、こんな機会がなければ会えない人々が集まり、すばらしい話を拝聴することができてよかつたと思います。又、今まで疑問に思つてきた「天皇」のこと

にふれることができ、班の人々のおかげで「天皇」という存在を理解することができました。私としては、人間として、一步前進したなという感じがしました。何といつてもいろいろな人と知り合えたことは、私の人生をより豊かにしてくれることと思ひます。

日本は 侵略国で あつたといふ 教科書読みて さう信じ  
今まで過ごしてきたりしを 早大生の 話聞き 戦さに対する  
数々の 人の心を 深く感じる

七池の地から見渡す山々は緑鮮やか朝日を受けて

梅雨雲の徐々に晴れゆき空見えぬなんと美し胸すく青さよ

深く考えるようになった自分に驚く

（熊本大学 法 一年 江原紀子）

私は最初とても不安でした。しかし普段は拝聴できない諸先生方の御講義や、自分より読書量の多い班友たちの意見によつて、今まで考えることのなかつた域にまで達し、感動したというより驚きました。特に心に残っているのは、皇室に対する考え方を班で話合つたことです。私は次元の低いところで考えていたのだなあと恥ずかしくなりました。そして、班友の意見を聴く度に、今まで私が遊んでいた時に、いろいろなことを勉強していたんだなあと思ひました。本当にこの合宿に参加できてよかつたと思ひます。

班友に再び会ふはいつの日かと心寂しき出立の朝

高らかに君が代を斉唱し嬉しかった

(関東学院女子短大 家政 一年 古川弘子)

父に勧められ、初めて参加させて頂きました。最初は「姉やいとこなども参加したのだから、私も出なくては」と古川家の伝統的な義務のような気分で参りました。ここでは、昔から父や母、姉やいとこ達が国文研について語る時に、必ずお名前を聞く小田村先生、小柳先生その他多くの先生にお目にかかり、自分が国文研の合宿に参加できる年になったことを実感し、いつまでも子供ではいられないのだと思いました。先生方の講義は内容が深く、分かりにくい部分もありましたが、班で分かるまで話し合いました。このように心から自分の意見を述べ話し合ったのは初めてで、姉やいとこ達が感動して帰ってきた意味が分かった気がしました。短歌創作もみんなで作削してより良い短歌が起き上がりました。

高校時代に、昭和天皇御病気の際、記帳に行ったことを友達に話したところ、右翼なのかと尋ねられ、大変、ショックでした。そして、そのことがずっと気にかかっていたのですが、高らかに君が代を斉唱し、先生方の話を聞いているうちに、私の昭和天皇への気持ちは、ありのままの自然な思いで、けつして右翼だとかそんなものではないと思えました。もっとももっと勉強し、歌を覚え、自分の気持ちを素直に表わせるようになった時、その友達にもう一度自分の気持ちを、伝えたいと思います。

班員や先生方の言の葉に優しさを知り心を打たるる

大和心を我にもみたり

(京都外国語大学 外国語 二年 出水典子)

友人に誘われるままに参加した合宿だったけど、この四泊五日は、とても充実した日々でした。諸先生方の講義は、私の理解を越えるところが多々ありましたが、私なりにこの合宿で学んだことは、いくつかりました。

それは、ものの美しい姿を正しく、豊かに感じとる心、つまり「美を求める心」が私には欠けていたので、それを養い育てることが必要なのだということです。また、ものごとを客観的にとらえるのではなく、その対象と一体化して感じるものが、和歌を詠む基本姿勢であるということも学びました。八月十日の夜の慰霊祭では、今までその存在を意識したことのない参加者が、儀式の最中みごとに「ひとつ」になったことに、深く感動しました。その時、私は、日本人にはそれは気付かないうちに、古くから受け継がれてきた日本人の心というものが、生きているんだなあと思いました。

ますらをのみ魂を鎮めいにしへの大和心を我にもみたり  
我知らず内に抱きし大和の心その精神を誇りに思ふ

班での短歌相互批評がよかった

(拓殖大学 外国語 一年 高橋あゆみ)

この合宿には、学校の先生に勧められて参加しました。四



泊五日も耐えられるかどうか初めは不安でした。でも、とうとう最終日になりました。講義を聞いても理解できないこともたくさんあって、知識のなさに情けなくなりまし。

合宿の日程表に短歌創作とあるのを見て、どうして？と思っただけ、いざ作ってみたらそんなに嫌なことではありませんでした。班別短歌相互批評が一番興味をもちました。

でもこの合宿、本当に疲れました。合宿にきて良かったことは、友達ができたということです。

沖繩に夏にとびだす我々の気分はすっかり海外旅行

### 語彙の少なさが恥ずかしかった。

(拓殖大学 外国語 一年 土岐芽生)

初めて参加しました。日程が郵送されてきたとき、講義ばかりでキツイなあと思いました。実際にそうでしたが、班員のみんながとてもやさしい人で心がなごみました。

班別研修では、それぞれ自分の主張がはっきりしており、同じ一年生なのだと思うことが何回もありました。語彙の少なさがとても恥ずかしく感じました。だけどみんなが足りないところなど助けてくれたのでとても嬉しかったです。さまざまな県の友達に会え、また、このような真剣な話し合いを持つことができたことをうれしく思います。

討論で意見を出してゐるうちに語彙の少ない自分に気付く

## 第三十一班——社会人——

### 回を重ねること深まる体験

(無職 小馬谷秀吉 67歳)

三度目の合宿ですが、その都度できるだけ自分身を裸にして研修に集中することに努めることを目標にしてみました。

その中から、今回も自分の心に新しい感動を与えられることができたように思いました。このことが私にとっては得難いものであった。そして今回は班長をはじめ私より年輩の方が中心の班でしたので、できるだけ若い人との交流をと考えていた私には一寸戸惑う思いがしたのですが、過してみますとそのかもし出す雰囲気の良いに、私の最初の印象とは違うものであることを教えられた思いでした。回を重ねる毎に深められる体験となるこの合宿の良さを、北海道からたった一人の参加ですが、これからも私は大切にしていきたいと思っています。班別研究のはじめの黙禱の代りに班長の提案で明治天皇御製を拝誦することにしたことは大変よかったです。できれば一般社会人を対象としての合宿が実現されればと思っております。

三度目の参加なれども新たな感動覚ゆ七沢合宿

若さらにはげまされつつ快よき汗にまみれしウォークラリー

我らが生けるあかし

(株)中央塩ビ製作所 星野 貢 75歳

事故もなく閉会式を迎へることが出来た。ほっとして明るい気分です。理事長初め友らの目に見えないところでの涙ぐましい御苦労、さうした合威力によって営まれるこのみちである。そして我らの生のあかしでもある、と考へる。小柳委員長の四泊五日合宿を振り返って、まとめる間もないと発言された。それだけ緊張のした集いであった。目のにしむ思ひがあった。村松、佐伯先生の御講義それに小柳先生へと一貫した内容の流れ素晴らしく感銘した。学生達の中にはこれを充分に感得出来る教養と下地が出来てゐない。そんな気がする。

厚木市長、七沢自然教の職員の方々に

教室の職員の方親切な心くばりの人柄うれし

つねかはらぬ厚木市長のまごころを吾れは忘れじその一筋心

若き日の合宿の感動現々にひめてたゆまぬみ心雄々し

生活の反省を今後の力に

(キューピー)株 山本茂夫 54歳

今回、社会人班のそれも人生経験豊かな比較的年令層の高い班へ入れていただき今までの合宿では味ったことのない経験をさせていただきました。社会人班そのものが初体験から人生に対する見方・考え方が次ぎ／＼出て来て班別の時間が

不足のまま次へ進めざるを得ないことが多くなった。今回は、全日程の参加を目指し、七月中旬になり、ようやく運営委員長の小柳さんへ返事を出す始末となり、ご迷惑をおかけいたしました。参加する度びに、現実に直面している問題に体ごとぶつかって努力しておられる方々の力強いお話をお聴きし、自分の生活を反省させられております。その反省を力として、今後に生かして行く努力を重ねたいと思っております。何もお手伝い出来ず参加するのみで申し訳けなく思っております。

自由発表を聞き

思ふこととつとつとした言の葉に託して伝へる姿のものし

班別研修にて

各地より集ひ来たりし人々と語り合ひつ夜はふけゆく

ウオーケラリーにて

緑こき七沢の里を友と共に小路細道歩ゆむたのしさ

初参加の感想

(無職) 小原健吉 75歳

岩手県より初参加。外見からは窺へ知れなかつた、学生達との、日本人を自覚した社会観を知ると共に、女子学生の純心さに感心させられた。

語り合ひ別れゆく友に手を振りつ涙にかすむみどりの山脈

村松先生、佐伯先生に感謝

(株公正不動産 安東祐範 76歳)

足立原厚木市長の御協力 御厚志に深く感謝致します。又記念品まで忝ふし重ねて御礼申し上げます。村松・佐伯両先生とも御病床中にも不拘御来講の由、両先生ともいまの日本にとって、学識経験者として立派な方であられる。御体調を大事に長生なさるやうお願ひ致します。

厚木市の長の配慮の数々を参加者ひとしく胸におさめぬ

無 題

(厚木市教育委員会 中村俊一 51歳)

今回合宿教室に参加させて頂き大変感謝致しております。特に今年は自然教室の集会棟完成のこけら落としに使はせていただき感慨深いものがあります。私達三人合宿に参加し、後の所員の皆様に多大な御苦勞をおかけした事に心苦しく思ひます。お陰様で研修に精一杯取り組むことが出来ました。こゝで学んだ事を人生の糧として今後精進してゆく所存です。感謝の念で一杯です。

班討の始めに明治天皇御製を拝す

大君の大み歌のみしらべに心洗はれすがし一時

第三十二班—社会人—

この研修を活力として職場に生かしたい

(宗教法人乃木神社 松吉宣和 54歳)

七沢自然教室での合宿は、第三十六回に参加し、二度目の地です。前回と比べ、更に施設が整備され、のびのびと研修出来ましたことを足立原市長様、職員の皆様に感謝申し上げます。村松剛先生の講義「維新群像と現代日本」では、日本の出発点、愛国心、「新日本建設に関する詔書」の内容などの部分を聞いても素直に理解することが出来ました。また佐伯彰一先生の「日本文化の深層」では源氏物語、平家物語を通しての信仰宗教の原点や流れ、そして鎮魂（古神道）の意義について実際に神社に奉仕する人間としての「いぶき」を吹き込まれた感が致しました。今回初めてのウォーク・ラリーでは班員すべて明るく、何をして相手も思いやるという一致協力した七名の班でした。この研修を自分の活力として職場で生かしたいと思えます。

師の君は病おしつ七沢の若人たちにいぶきふきこむ

的確に意見を述べる七名の班別懇談明か明かとして

不思議な感動にかられた

(厚木市教育委員会七沢自然教室 石井 博 45歳)

運営委員の方々、食堂の人々、自然教室の方々など大勢の人に支えられて、私たちは合宿を終えることが出来ました。不安と期待、何が始まるのだろうかという気持ちを抱いて参加しました。和歌、天皇、日本、慰霊祭と聞くこと、なすことがすべて初体験でした。大変なことが起こるのではないかと思いましたが講演や講話が進むうちに不思議な感動にかられ清らかな気分になり「心を揺り動かす何か」を感じていました。心が洗われる思いがし、真剣に日本の心を知ろうとしている自分に気づいていました。私のこの「自分に湧き起こった心の変化」は決して消えることはないと思う。今後は日本人として、この気持ちを更に深める努力をしたいと思えます。

慰霊祭にて

注連縄の中に祭りし神々に祖先思ひつつ祈り捧げし

思はずも手を握りをり知り合ひし友と別れる寂しさゆゑに

昭和史の洗い直しから始めるべきだ

(日立造船㈱ 藤木 洋 24歳)

初めて参加したが、実に楽しかった。良き友と会い、良き師の言葉に出会えた。ただ、和歌の時間が長すぎるし、村松先生以外の講義に物足りないものがあった。

世論は左傾化している。これは朝日、毎日の新聞社、日教

組の教師による教育、多くの大学に多数存在する左派教授、特に東大の国際法学教授だった横田喜三郎が東京裁判を国際法による裁判だと言い、それを信じた学生達が官僚や政治家となつて日本を動かしているからに他ならない。また、多くの日本人は明治憲法の欠陥(詳しくは渡部昇一「日本史から見た日本人 昭和編」祥伝社)についても、ハル・ノートという非常に失礼な最後通牒についても、大東亜戦争が太平洋戦争と変えられたことについても、現憲法が占領下に制定されたにも拘らず日本自身で作つたようになっていることについても殆ど知らない。渡部昇一の講義が是非とも必要だ。

日の本の清き流れを守るため狂の気もちて国に尽さむ

方向性の確信ができた。

(宗教法入宮崎神宮 日高憲司 30歳)

穂積法学博士は「この日本をして、もし日本人がこのまま皇室の祭祀、御祖の祭祀を怠るならば、日本は必ずや衰退していく」と言われた。経済優先の日本は、自国の本質に眼を向けていないとの外国からの指摘もある。村松先生のお話の中で「過去を振り返るのはいいけれど、過去に縛られている人間には未来は見えない。しかし同時に私達にとって唯一の財産が過去である事も事実です。」「敗戦後の自己嫌悪症」「歴史を裁いた無茶な東京裁判」「敗戦は歴史の眼から見れば、たくさんの事件の中の一つに過ぎず、敗戦後三十六年の虚脱症もつかの間の一挿話です。現在の国際情勢は日本人に

歴史に学ぶことを改めて求めているのです。」とのお言葉により自分の方向性の確信ができた。

語るべき友を求めておちこちゆ眼を輝かせ若人來たる  
師の君は病厭はず国憂へかほそき声で語らるるかな

私も何かしなければとの気持ちに駆られる

(CRC総合研究所 斎藤肇夫 30歳)

一、国文研の合宿に参加できたことの喜びをあらためて実感しております。学生が多感な時期に参加している事を羨ましく思うとともに三十歳でも決して遅くはない。真の意味での学問の探求に励んでゆこう。そして来年もまた参加しようという気概に満ちあふれています。

二、熱っぽい講義で、私も何かしなければという気持ちに駆られます。村松、佐伯両先生には病を押しての講義で、日本のあるべき姿、日本人として育つた事のすばらしさを私達に教えて下さいました。

三、五七五七七という字数だけにとらわれて、気持ちを自然に表せませんでした。和歌にチャレンジしたいと思います。

片腕の剣士の強き心根をともしく思ひて胸は高鳴る  
夏の陽がさす七沢にまた来むと友と誓ひて今し別るる

村松先生の側に侍したかった

(愛知県立半田高校 徳永幸夫 46歳)

三十八回目という過去の実績があるとはいえ、これだけの

人数で四泊五日の日程を遅滞なく消化していくために要した準備期間、要員、必要物件の準備等を察すると、本年当初から休日返上で事に当たられた事と思う。司会進行で表にたつた人は勿論、裏方として資料作製や事務処理に当たった方々、本당にご苦勞様でした。今回参加した動機は、講師に村松剛、佐伯彰一というお二人の論客の名を拝したからである。特に、村松先生の格調高雅、簡潔明瞭、論旨明快、冷静緻密な話しぶり、書きぶりに傾倒していたので、少なくとも二日間は大張り付けでじっくり話を伺う事が出来ると喜んで申し込んだのだが、実際は期待と異なり半日のみであった。しかし、他の講師の方々も自分の言葉で真実に基づいて話され、説得力があった。村松先生に関しては、丸二日「側に侍す」という期待は幻と化した。病中、就中、姿を拝見した時から、かなり疲れていらつしやる事が明瞭にもかかわらず、意力を揮ってお話になった言葉の重み、かけがえのなさは二時間であつたとはいえ二日分を越えるものがあり充実の一語に尽きる。

雨の上がりて詠める

雨続きただ静かなりし杉むらに風吹きわたり緑輝く

輪読で感銘を深くした事

(横浜平沼高校所属教育センター勤務 福田忠之 55歳)

社会人班で良識的な方ばかり、班長としてはこの上なく楽なことでした。講義は若手のものも含めて全て良かったと思

ひます。対象を外から冷たく科学的に眺めるのではなくて、その中に入って自分のこととして考へる態度を求めるといふことで統一されてゐたと思ひます。班員と共に占部氏のレジメを輪読してゐた時、次の一節に会ひ、非常に感銘を深くしたので少し引用致します。吉田松陰（東北遊日記「二十八日」抄・嘉永五年正月二十八日）「断然弥八と訣れ、午前ひるまへ駅を發す。初め弥八とここに訣るるを約すること已に久し。期に及んで情事裁ち難く酔を買つて悶を遣る。延留數日を致す所以なり。……中略……余と宮部とは將に会津に抵らんとし、道を此れに取る、しかして弥八は則ち直行す。宮部痛哭し、五藏五藏と呼ぶこと數声、余も亦嗚咽して言ふ能はず。五藏顧みずして去る、注視すること久しく、見ることを得ざるに及んで去る。」「これは何と、我らと我らの家族、我らと我らの友人たちとの關係に似てゐることか。国語教育、特に古典を読ませることの大切さを今更の如く思ふのであります。

合宿も終りとなりてやうやくに青空晴れ間ゆ光差しくる  
久々に陽の差す空に真向かひて光待つがに木の葉もゆれぬ

### 第三十三班 社会人

“心”のあり様に正面から取り組むきっかけを得た

（厚木市教育委員会 岡田 彰 29歳）

今回で二回目となる七沢合宿に初参加するに際し「日本へ

の回帰」により前回の講義の様子を読みかなりレベルの高い講義であると予想していました。レベルの高い講義で多少消化不良ではありましたが、講義の中で自分の心に残ったのは、「心」のあり様をこれから自分なりに考えていかねばならないということでした。「心」の問題を正面から考えたことがあまりなかったのもとても良いきっかけを与えていただいたと感謝します。同時に大変大きな問題を自分にいただいてしまったと思います。これからは、自分が「心」をいっそう開き、人と交わりを求め、「心」から語り合える人々との出会いを大切に日々研鑽を続けてゆこうと思う。ご病気にもかかわらず、ご講義戴いた村松先生、佐伯先生に深謝いたします。

感動を素直に語る心をばもてる吾身でありたしと思ふ

#### 主体性のなさを感じた

（兵庫県尼崎市役所 中川保則 44歳）

成果のあるなしはともかくとして、今回の合宿教室における学生諸君の一条みだれぬ見事な行動、直摯な学習態度には心を打たれました。ただ気になる点は主体性のなさである。誘われたから参加したならともかく、理由がはっきりしないままにここにいたのではやりきれなくなります。自分の人生は自分が主役であるべきです。主体性がなくては、講師の講話で人生の指針が定まるはずがないと思いました。

## 「生命がけ」の人生について考えてみたい

(厚木農業委員会 奈良庸文 42歳)

この合宿に参加するに際し、足立原市長に「君達のこれからの生き方を学ぶ合宿であるので生命をかけて参加してほしい」との大変厳しい激励をいただき驚きましたが、合宿二日目、村松剛先生のご病気を御講義には、まさにその「生命をかける」お姿を見させていただいた思いがしました。合宿期間中、終始その「生命がけ」の言葉が頭にあり、かた時も頭から離れなかったにもかかわらず、この合宿において心底「生命をかける」ことはできなかったように思います。この五日間に受けた講義、班別研修、短歌創作等々を、これからの私の生き方を問う大きな課題とし、時間をかけて「生命がけ」を考えてゆきたい。

ひとすぢにただひとすぢにたどる道いかにか見出さん我生くる道を

## 慰霊祭に感動した

(日刊建設通信新聞社 黒田文彦 59歳)

全国各地から学生、青年、社会人などが集まり、日本文化の真のあり方を考えつづけている講師達の話聞くことは大へんに良いことだと思う。新しい知識の獲得も、その本質は日本文化の自覚と国家としての尊厳性に目ざめることにあると思った。合宿にすべて満足したわけではない。社会人である以上ここで学ぶようでは駄目であると思った。実行あるの

み。

一番良かったのは慰霊祭である。しつらえられた祭壇の前で厳肅な雰囲気の中で執り行なわれた神事を参加者一同が見つめている、*“過去の霊と現在の生の交流”* 何とすばらしいことであろう。又何年ぶりに歌ったことであろう、*“海ゆかば”* 懐かしい思いをこめたこの歌は私の心の中に生きつづけていく。

## 和歌の道に感銘した

(靖国神社 大山晋吾 33歳)

はじめてこの合宿に参加させて戴き、特に感銘を覚えたのは、小田村、長内、澤部各先生方の和歌の道に関する御講話でした。まごころを生き活きと働かせよ、そして日本人としての清らかな心を回復せよとの御話、中でも歌の道を通して人と人とがまごころを通ひ合はせることが出来るとの御言葉には、心の底より感動を覚え、輝きに満ちた世界がパァッと目の前に広がってゆくやうな思ひに包まれました。何か本当に神々しい世界に新たに生まれ出たやうな思ひです。

これより山を下りますが、この感動を今度は現実の社会生活の中で生かしてゆかうと思ひます。このまごころの道を、歌の心を職場の人間関係の中で生き活きと生かしてゆきたいと思ひます。

天地に新たに生れし心地しぬまごころの道師にをそはりて

目の前に神々しき世界広がりぬまごころ通ふ歌々にふれ

真の日本人になりたい

(学) 亜細亜学園 中村正和 24歳

この合宿で一番うれしかったのは戦争を経験した方の話を聞いたことです。その中で「日本人ほど素晴らしい民族はない」という言葉が印象に残っている。現代青年の国に対する意識が、アンケートの結果では50年前とは比較にならない程低くなってきているが、私は今の青年にも日本人の血が流れ伝統は生きていと思う。ただ現代の日本があまりにも豊かすぎるが故に大切な事(日本の偉大なる歴史)を忘れてしまっているだけだと思う。カンボジアで亡くなられた中田さんのことを思えばやはり大和魂は現代の青年にも残っているのだと実感し、嬉しく思えました。

また和歌を詠み、相互批評することの楽しさと自分の心を素直に伝えることができる素晴らしさを知りました。既成概念を捨て、素直に聞く素直に見るということを感じある人生を送るためにも実践したいと思う。今の平和で豊かな日本は戦争で亡くなられた方々のたまものであることを胸に抱き生きて行きたい。そして私も「真の日本人」になりたいのです。

靖国のころをひたに語りゆく青年の姿に心うたれり

心で知るもののあることを知った

(森高康行事務所 三谷全良 25歳)

初参加なので、どのような事をするのか、自分が何をやればいいのか解らずに不安でしたが、先生方の御講義を聞き、不安に思ったことが恥ずかしくなりました。

白浜先生が言われましたヒルネダイスキ人間の一つ一つの言葉の意味が自分にも少し当てはまる点があり、自分の未熟な所だと反省しました。また、長内先生の頭で解るのではなく、体や心で感じる事によって知り得るもののあることを聞き、とても感銘を受けました。

この合宿で学んだ、美しい物を素直に美しいと感じる心を育てていき、これからの生活に生かしていきたいと思いました。

初めとは気持ちの変化感ずれば講義終はりてなつかしきかな

何物にもかへがたい出会ひがあつた

(株)新栄製作所 牧野吉成 27歳

合宿を終へ、私自身、強く又深い感動を覚えました。その中のいくつかをご紹介させていただきます。その一つは人と人との出会ひが何物にもかへがたく大事なことであるか、この合宿での人々との出会ひによって金では買ふことのできない宝を得ることができました。二つめは、日本古来の伝統や文化を受けついでこられた先人の方々のお陰で今の我々の生



活が成り立っていることを痛感させられたことです。

又、明治天皇や先帝陛下の御製を拜誦させていただいた時に、そのお歌を通して歴代天皇の国民とともにあるお気持ちに直接出会へた気がしました。

僅か四泊五日ではありましたが、私にとつては非常に意義のある合宿であつたと思ひます。

ご病気にもかかわらずご講義をいただきました村松剛先生ならびに佐伯彰一先生に感謝の意を込め

み病をおして来ませる師のをしへ受けつき伝へんの世までも

「感動ある人生」を目指し心を磨きたい

(厚木市教育委員会 吉崎直幸 36歳)

合宿教室を通して日本の伝統や日本人のまごころの奥深さにふれることができ、貴重な体験をすることができました。

諸先生方の熱心な情熱あふれるご講義には胸打たれるものがあり、特に村松剛先生、佐伯彰一先生には入院中でありながら病院から駆け付けてくださったとのことで、身の引きしまる思いがしました。また班別研修では教わったことを班員みんなで確かなものとし、素直に話しあうことで班員の皆さんと交流を深めることができました。

これからは、この合宿で学んだことをしっかりと心に刻み、「頭で知る」のではなく、「心で感じる」ことの大切さを肝に銘じ、「感動ある人生」を目指して、心を磨いてまいりたいと思ひます。ありがとうございました。

み教へのひとつひとつを忘れまじと我れひたすらにペンをはしらす

日本の伝統を守ろうとしてゐる人々に感銘した

(海上自衛隊厚木基地 山崎重晴 49歳)

自衛官である自分以上に国を憂い、皇室を敬い、日本の古き良き文化、伝統を大切にし、守り育てて後世に伝えようとしている多くの人々の居ることに感銘を覚えた。

来年はたれと出合ふかセミナーで若きらにまじりて楽しかりせば

感動は日を追ふ如に大きくなつた

(航空自衛隊航空教育隊生徒隊 村山寿彦 56歳)

合宿での感動は日を追ふ如に大きくなり四日目の小柳陽太郎先生の御講義では「始めての皇孫」といふ御題の昭和天皇の御製を目にした時から深い感動につつまれ、美智子妃殿下と浩宮様をあたたかく見守つてをられる昭和天皇のお心が偲ばれて、私もほのぼのとした心のやすらぎを感じました。

昭和天皇といふ御名は聞くだけで特別な感慨をもつて私の心にひびき、昭和天皇が私にとつて如何に大きな存在であつたかを今更ながら気づかされました。御講義の最後に紹介して頂きました岡潔先生の「心の対話」の文章も実に美しく心が洗はれるような思ひが致しました。

今後も先人の遺された美しい言葉にふれ、感動ある人生を送れるやう、一層の心の研鑽に励みたいと思ひます。

本当の姿は直感でつかむしかない

(出光興産 広島秀明 37歳)

科学の進歩の代表格にコンピュータがある。そして世の中のことすべてコンピュータで処理することが最も合理的な方法であると考えられている。だから社会での先行投資の判断などにもコンピュータを使って色々な予測データをそろえる。数字データで完全武装した資料には疑問をはさむ余地は何もないかのように思えてしまう。しかし、本当にこれだけで判断して良いのだろうかと恒々不安に思っていた。それが今回の合宿で少し見えてきた気がする。すなわち「いくら調べてみたところできりが無い。自然科学では限界があるのだ。本当の姿は真心をもって直感でつかむしかない。」ということである。

今後は心をきたえ心をはたらかすべく日々精進する。

眞実はまごころもちて直感でつかむほかなしと師はのたまひし

合宿中に創作された「短歌詠草」

——しきしまのみち——

## 短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多く短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなつて了つてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は全くの疑問であり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分階級の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に和歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば和歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、和歌を詠むことを人生の修業の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、和歌を歌ひ交すことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。祖先の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に祖先の姿を蘇へらせる作業であり、自分が紛れもなく祖先とつながりをもつた日本人であることの發見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重さが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題が等閑にされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士との相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏

感に感じる、素朴にして溢れる人間性を取り戻さうとする試みが、細やかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿三日目の午後、日商岩井(株)澤部壽孫氏により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後のウォークラリーを終へて夕刻までに各人が創作した短歌が提出され、それをもとに直ちに各班で相互批評がなされました。忙しい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きが端々に表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠つてをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・ガリ切り作業を通じて翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会常務理事・長内俊平先生によって、和歌全体批評がなされ一語一語に含まれる作者の心を全身をもって偲ばれ、直されてゆく姿には相互批評のあり方を教へ頂きました。

短歌創作と相互批評により互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と深まつて行くことが確認されました。かうした短歌創作を通して展開された、日常生活にはまことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。ここに載せた短歌はかうした営みの中で作られたものであり、合宿教室での生々とした肉声が聞こえてきます。また心と心との架け橋としての歌がまさしく参加者を実現されてゐることを、御読み取り下さればと念ずる次第です。

〔付記〕ここに収録するにあたっては、班別相互批評後の短歌を掲載しました。

# 短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品

（参加学生の第二回目作品）  
（品は感想文の末尾に収録）

## 第一班

拓殖大外一 浦田 幸則  
諸講義に共感してはゐるものの気持ちに語れ  
ず冷めた茶を飲む

横浜国立大工一 斎藤 匡  
短歌創作の時間にて  
先までにはぎやかかなりし我が班も無口になり  
て頭をひねる

愛知教育大教育四 藤井 倫明  
里芋を植うる畑の真つ黒な土のほひに心な  
ごみぬ

金沢経済大経三 田近 智久  
夕暮れの涼しき部屋にまどろみて頭をつらぬ  
く鳥の声聞く

富山大大工二 北川 哲也  
霧雨の中を歩きつ山合に響きわたれる日暮ら  
しの声

中央大文四 草野 直樹  
開会を間近に控へ昼食の一杯のカレーのどを

通らず

手のひらの汗を幾度も拭ひつつ椅子に座りて  
出番待つかな

早稲田大社会三 高橋 秀和  
短歌創作導入講義の中で、小田村寅二郎  
先生のお歌を拝して

とも  
同志が幸吾がことのごと受け止めしその喜び  
をうたひ給へり  
喜びに生き生きとせし御姿を目に浮かぶごと  
と偲はるるかも

同志のことさまでに深く思はれし師の御姿ぞ  
胸に刻まむ

## 第二班

関西学院大文二 竹岡 淳  
久しぶり声出し歌ふ君が代の清き響きに心洗  
はる

金沢工業大工二 高寺 忠雄  
かなかなと雨にうたれてなく蟬をあはれとぞ  
思ふ夏の夕ぐれ

金沢経済大経二 高橋 寛

竹林に響き渡りたるせみの声心にしみてしば  
したたずむ

宮崎産業経営大経二 永石 白馬  
七沢の霧立ち込める山々に心奪はれし  
たずむ

亜細亜大国際一行 本勢 基  
西洋の文化を学ぶ道行くも合宿で学びし事忘  
れまじ

拓殖大外三 千葉 竜太郎  
墓の上につまれし石をながむれば子らのさけ  
びのきこゆるが如し

九州大工聴講生 松岡 篤志  
生徒らを思ひ浮べて一首一首を讀みます師の  
声心にしみ入る

生徒らの素直なる心しきしまのやまことば  
にあらはれにける

国文研 室 辺 矢太郎  
白浜さんの導入講義をききて  
「月光」のピアノソナタを今生の名残りと呼  
きたる特攻隊員のありきと

校庭を翼ふりつつ旋回し今し別れと飛び立つ  
機はや

いつの世もかなしきいのち捧げつる人はあり  
きと声つまらせぬ

生命の尊重のみを言挙げするみにくき今の世  
をなげきます

こぶしにぎりたたみかくるがにうったへます  
ことばつぎつぎわが胸をさす

### 第三班

拓殖大外三 石田 知

静かなる七沢の森に雨降りて木々の緑のかす  
みて見ゆる

金沢工業大工二 大原 伸成

知らぬ地で知らぬ人との出会ひありて思ひ出  
残る合宿教室

拓殖大外二 妻 籠 延寛

山道で出会ひし友ら口々に「おつかれさま」  
と声かけくれし

金沢経済大経二 高橋 博昭

七沢の豊かな自然をながめつつふるさと思ひ  
心なつかし

富山大工二 浜 多 広輝

神奈川の米はまづしと思へども意外においし

くばくばく食べぬ

長野大産業社会四 長 島 正武

銀行の消え行く姿ながめつつ心に誓ふ明日  
は勝つぞと

合宿を終らばすぐに父母のもとへ帰らむと君  
は言ふかも

この三年遠く君のことを思ひ来し父母いかに  
喜びまさむ

学生の頃に返りてみ友らとかく語り得ること  
ありがたし

友ら皆手伝ひあひて朝食の用意をなしをる姿  
嬉しも

### 第四班

国文研 三 林 浩 行

特攻隊員

あくる日は学校の上旋回し特攻基地へ向ひし  
といふ

金沢工業大工三 佐 藤 隆

困難はあれどもいつか省エネの飛行機つくり  
て空に浮かべむ

福井工業大経営工四 鈴 木 康 之

笑顔にて「よう久しぶり」となつかしき班長

の言葉最初の喜び

金沢経済大経四 近 間 常孝

村松先生の御講義  
鬼気せまる講義に我れはひきこまれおのづと  
背すじ正しをるかな

九州大文一 井野口 武志

順礼峠  
うすぐらき林の中の山道を息を切らして登り  
ゆくわれ

拓殖大外二 山 口 尊 之

道わきのどての上にはむらさきの花咲きわた  
り目を奪はれし

亜細亜大法三 松 井 章

おばさんは手を安められ僕たちにあいさつく  
だざりとともうれしき

第五班

国文研 大 島 伸 一

精一杯班友たちに語るべき熱き思ひが沸き出  
でて来ず

早稲田大教育四 鈴 木 由 充

なつかしき友と出会へば一年の我が来し方の  
顧らるる

福井工業大工二 杉山 正洋

講義聞き感ずることを言葉にて表現できずにもどかしく思ふ

拓殖大外三 川崎 良典

七沢で何か得ようと思ひ立ち期待を持ちてこの場に集ふ

横浜国立大経営二 野崎 讓

班友とひたすら道を探しつつ歩けば心あたたまるかな

福岡大人文二 岡田 聡

沢山の葉に囲まれてただ一輪小さきあぢさるほどよく咲けり

新潟大医一 幸田 久男

一面の木々を静かに眺むれば心たちまち澄みわたりゆく

### 第六班

拓殖大外四 玉谷 豪俊

美しき山々見つこの国を守り給ひし人々を思ふ

御祖先みおやらの守り給ひしこの国に今我あるを有

難く思ふ

宮崎産経大経一 居波 忠信

配られし白きシーツの敷き方を班友たちとあ

れこれ語らふ

静岡大人文一 幡 掛 正泰

ウォークラリーを終へ部屋に戻りて

響き来るひぐらしの音ね聞き気がつけばはや合宿も三日過ぎむとす

福井工業大工三 榎 山 英範

木々にほふ山野を行けばおのづから幼きころのなつかしく思はゆ

早稲田大政経三 田 中 裕 一

病をおして登壇されし村松先生を拜してあなかしこ去年のみならず今年をも障害乗り越え出で坐す師はも

師の君のまごころこもる御言葉を一言一句心して聴かむ

師の君の我等に寄する思ひをば心に刻み勵みて行かむ

国文研 古川 広治

班友と地図をひろげてふるさとのなしをすれば親しみましゆく

### 第七班

金沢工業大工三 田 村 壽久

勾配のきつき坂道よりゆく我を励ます友らありけり

宮崎産経大経一 中 松 典久

霧晴れて緑眩しき樹々の間に雨にうるほふ朝顔の花

顔の花

早稲田大政経一 福 島 康二

わが心友に語れど言の葉の思ふにならずもどかしきかな

拓殖大外三 田 中 義孝

ひさびさに丘を登りし散策も終りにつれて足重くなり

福井工業大工四 吉川 浩

みわたせば立ち上る霧の広がりに涼しき夏の心地よきかな

中央大文四 内 田 雄一郎

霧雨の中より聞こゆる蟬の音もいつもの夏を待ちわびてをり

国文研 中 富 仁

白浜先生の御講義を聞きて信じうるものためには命をも捧げて生きる人のありしと

### 第八班

九州国際大法経三 佐 藤 公治

「機会」なる大事な言葉聞きし今これより先も求めて行かむ



日本デザイナー学院一 安部 雅俊  
森の中頭の中に雑念が消えてくれよと進みゆ  
きたり

### 第九班

熊本商科大商二 喜多村 純

東京大理一 公文 貴之  
稲の道進む我が足さえさるはとびとびはねる  
バツタなりけり

打ちとけて共に学びし友どちと歩く山道すが  
しかりけり

福井工業大工二 水野 智弘  
ウォークラリー後の疲れもこち良く今日の  
体験忘れずにいたい

金沢工業大工四 中村 真悟  
登り来し道を降りつつすれ違ふ友らをねぎら  
ふ言葉かけけり

拓殖大外三 堀 越 孝行  
講義中不意に睡魔が襲ふなら消灯時間にきて  
欲しいもの

早稲田大法一 浜 田 咲智  
友どちと地図を手挟み山里に小川のせせらぎ  
聞きつつ歩く

福井大工四 山 本 明  
細道に足すべらせて登りゆくうらめしきかな  
この空模様

福岡大経三 別 府 正寛  
開会式にて  
皆さんの為に施設を増やせりと足立原市長は  
宣ひけるも

早稲田大一文三 小野 恭史  
いづくにか川の流るる音のして耳をすませば  
せみも鳴きたり

拓殖大外三 根 岸 宏之  
遠慮なく我が家と思ひてと満面に笑みをうか  
べて更に述べらるる

福岡県立須恵高校教諭 那須 三元  
白浜先生の講義を聞きて

夜更けまで語りし後の聴講は睡眠足りず眠さ  
もよほす

外国に命捧げし若人を讀へたまへり声つまら  
せて

国文研 北 浜 道  
雨の日に傘失へど他の人を濡らさむよりは自  
ら濡れるとふ

### 第十班

拓殖大外三 小川 哲也

にじむ汗服に浸み入る順礼峠すくにも風呂に  
入りたしと思ふ

富山大工二 腰 原 健  
地図を見て選びし道はこちらかと不安抱きて  
顔を見まはす

九州大文二 別 府 秀俊  
かほそかる幹なす杉の畑の辺になみうるはし  
く植ゑられにけり

幼な杉生ひ育つればここの辺の畑消えなむと  
老母はのためふ

七沢の森の栄えは人々のいたづきあれこそと  
偲ばるるかも

七沢のかそけかりける山なみにたゞひぐらし  
の声しげく鳴る

金沢工業大工二 杉 山 瑞樹  
食べすぎて腹の痛むも出できたるウォークラ  
リーで屁をすかすかな

亜細亜大法三 松 田 裕幸  
はるばると集ひ来たりしみ友らを見ればおの  
づと奮ひ立ちたる  
すなほなる心もちて語りくる友の言の葉聞

くも楽しき

宮崎産業経営大経二 前 島 誠

木々繁り薄暗くして気味悪き峠の道を我は急  
げり

筑波大体育一 小 柳 正道

並ならず涼しき夏の山道に蟬鳴く声の悲しく  
聞こゆ

### 第十一班

東北大経済三 山 森 明

登り道で友らと声を交はしゆけばにじみ出る  
汗もしばし忘れぬ

福岡大法二 小 森 誠

今少し語りてみむと思へども言葉えらべずも  
どかしきかな

拓殖大外三 牧 隆 志

ご講義に耳を傾け聞くほどに睡魔に我が身と  
らはれゆきぬ

金沢工業大工二 杉 林 克 彦

ひさびさに山道歩きて心地よく夕食の味はひ  
ときは勝りぬ

福井大工三 神 田 儀 道

力合はせウォークラリーをやりとげしゴール  
直後の風呂は最高

防衛大情報工四 畑 野 将 史

七沢の緑の中にとけこみてすひこむ空気のお  
まきこゝちす

日本大文理二 田 代 吉 弘

巡礼の親子二人の連れだちて登りし道を我も  
登りゆく

村人の優しき心今もなほ伝へられけり願札峠  
に

国文研 絹 田 洋 一

山道を息を切らしつつ登りゆけばすれ違ふ人ら  
の声かけくれし

顔知らぬ人とも互ひに声交はし登りてゆけば  
心はずみぬ

### 第十二班

米国際大国際関係四 松 田 潔 社

あらためて日本人を意識さす合宿教室に我驚  
きぬ

国学院大文三 江 島 靖 喜

ぬかるみに足を取らるるあぶなさにひやりと  
しつとも思はず笑へり

防衛大国際関係二 小 澤 学

すれちがふ友の瞳の輝きは涼しき夏のさはや  
かさに似る

日本文理大工二 鐘 築 光 昭

小田村寅二郎先生の話を拝聴して  
合宿を開催せし願ひ心から語られ我れの気持  
ち締められり

ち締められり

金沢工業大工二 石 川 和 人

山道の通りすがりに励まされポイント向けて  
足どり軽く

福井工業大工一 鈴 木 博 幸

たどるべきコースに迷ひさらにまた山道暗く  
心しづみぬ

山道を下り来る友の明るさに我の心も晴れわ  
たりゆく

国文研 濱 口 和 久

班友に気くばりしつづぬかるみし坂道登れば  
汗ここちよし

### 第十三班

金沢工業大工三 谷 章

合宿で学びし事は一回の出会いで変はる自分  
の人生

拓殖大外三 水 坂 真 貴

隣りから声が聞こえて来るものの僕らの研修  
沈黙ばかり

長野大産業四 末崎彰規

いく気なくやる気ないまますぎたれど残りわづかだひとつ学ぶか

### 第十四班

福井工業大工一 岡畑真生

雨粒が連なり光る蜘蛛の糸を見れば暑さのやはらぎてゆく

亜細亜大国際二 宮崎裕二

おのおのの生くるその道違へどもここ丹沢に友ら集ひぬ

拓殖大外一 関野淳一

合宿の講義を聞きて思ふのは感じることを学ぶことかな

つたなかるの我の言葉を真剣に聞き給ひたる友のありけり

金沢経済大経一 若新確也

七沢に茂りて生える竹林を見れば故郷ふるさとなつかしく覚ゆ

友語る一つ一つの言の葉の思ひ汲み取れる人になりたし

国文研 内海勝彦

ウォークラリーを計画せる友どちを偲びて

似て  
山道の景色を見れば懐しや幼き日々の故郷に

くさぐさに心くだきてはからひしウォークラリーの日とはなりぬる

徳島大総合四 倉本聖也

道ゆけば川のせせらぎ聞こえて音のすがしさに心洗はる

友どちの願ひかなひて小雨やみ出発のピストル高らかに鳴る

九州産業大工四 津田峰

いくたびも下見せしとふ山道を友のいたづき偲びつ、行く

諸共に語る言葉に胸躍るあ本物に会へた喜び

あまたなる補助の人々立ちをりてつつがなくな着けるは有難きかな

奈良県立商科大商二 岩瀬幸広

病さへ止めたてできぬ御熱意は我の心に深く

沁み入る

金沢経済大経三 小見茂久

清らかに流るる水の行く末はいかにと遠く思ひやるかな

拓殖大外三 大木聡

御友等とあぜ道ゆけば畑中に里芋多く植えられてあり

里芋の葉の上にある水玉をころがし遊びぬ幼き我は

今は亡き畑耕す健やかな祖父思ひいつ里芋を見て

国文研 松井哲也

昔原先生の御発表をお聞きして

当番を避けし生徒を先生は呼びて厳しく叱られしとふ

叱られて悟りし生徒の詠みし歌を読まる喜びは伝はりてきぬ

### 第十五班

富山大理一 加藤武俊

道端に大輪ひまわり首たれて涼しき夏を恨むべきかな

吹き渡る風涼しくて心地良く山道行けど疲れ

拓殖大商三 木下貴博

感ぜず

福井工業工二 杉浦 信正

風呂上がり頭ひねれどままとまらず歌を作るは  
難かしきかな

千葉情報経理専経営情報二 西島 司

七澤の霧の野山を班員と汗をかきつつ楽しく  
歩きぬ

金沢工業大工四 羽賀 茂幸

七沢に共に語りて学びあひわれら若人ははた  
さ生きむ

北里大衛生一 平野 誠

小雨降り濡れた我が身にさしのべるみ友の傘  
に嬉しさ覚ゆ

国文研 菅原 亨一

をちこちとポイント目指し和やかに友らと歩  
く七沢の路

### 第十六班

東京大理一 松岡 勲

七沢の山のラインは霧雨におぼろげなるもう  
つくしきかな

熊本大教育三 上 甲 能也

角田憲彦君の誕生日に寄す

一日の行事を終へて皆揃ひジュースと菓子も  
て彼の祝ひす

演劇をする友なりと聞きけるが汝が人生にも  
感動ドラマつくりませ

宮崎産業経営大経営一 矢田 研人

疲れしもとても楽しき山歩き交友も同  
じ思ひか

亜細亜大経営一 角田 憲彦

出発をいまいかいまかと待つ折にふと目に入つ  
た真つ赤なとんぼ

富山大工三 上 脇 寿仁

慣れぬ筆を思ひつくま走らせば思ひもよら  
ぬ歌ぞいで来る

日本大理工四 國 武 陽一郎

澤部先輩のご講話  
講話中名前を呼ばれ目をさます父の話題で安  
堵のため息

国文研 神谷 正一

ウォークラリーの折に  
見違へるおもわ見せたるわが班友どもら力合はせ  
て問ひをときゆく

道の端のゴミ拾ひつつゆく班友どもに胸衝かれた  
る思ひこそすれ

### 第二十一班

大阪樟蔭女子大学芸四 永島 千詠

空くもりしづむ心もひまはりの映ゆる黄金に  
ふとひらかれぬ

尚綱大文三 中谷 映子

お姿のただ尊くてまばたきの間さへも惜しく  
思はるるかな

大阪電気通信大工一 佐藤 仁美

かすみたる山のおもむき深けれどなほも恋し  
き夏の太陽

青山学院大理工一 山内 眞起子

曲がっても曲がってもまだまだ曲がるはるか  
なるかな峠への道

拓殖大外一 砂倉 君香

坂道を額の汗ふき登りくればせみの鳴く音に  
暑さいや増す

長崎大教研究生 早田 保美

痛き足かははれながら山道を師は歩かれりわ  
れらと共に

### 第二十二班

早稲田大社会科学三 中島 淳子

山道を「行くぞ」と言ひてかけあがる友の姿

のたちまち消えゆく

長崎大教一 白石 由美子  
班員と語らひあへばおのづから故郷の話になりにけるかな

京都外国語大外二 渡部 祥子  
豊かなれと手をかけられて育ちたる木々は山をおほへり鱗の如くに

拓殖大外一 小山 かほり  
風邪ひいてベッドで寝てるただひとり速くに響くせみの鳴き声

明治大商一 長谷川 知子  
朝もやに響く虫の音さはやかに緑の森に溶けて流れる

神戸女子大教一 波多野 洋子  
班友の態度気になりてゐたれども思ひがけなき誕生日の宴

### 第二十三班

京都女子大政四 小森 美智子  
一人でも人の心を震はせる写真を撮りたしと友は語りぬ

真剣に己が理想を語りたる友達の目に涙浮かびぬ

拓殖大外一 高橋 昭子

道に迷ひ疲れたれども友達と語らひ行けば楽しかりけり

千葉大教一 内藤 雅子  
あな嬉し探し求めしこの小道今ようやくに見つけ得たりき

九州造形短期大写真一 佐野 果  
せせらぎの聞こえ初めし喜びに友ら互ひに笑顔交はしき

九州女子短期大初等教育一 宮崎 円香  
カメラ持ちシャッターを押す友どちのますぐなる目の美しきかな

亜細亜大国際関係一 松田 育美  
雨の中濡れて冷たき我が肩に先輩は傘をかざしてくれましぬ

### 第二十四班

拓殖大外一 荒井 のぞみ  
夕暮れにひぐらしの声ひびききてせつなさ胸にしみわたりゆく

高知女子大文三 中川 つぐみ  
友どちの一つ一つ一つの言の葉にただされてゆく  
我の心も

熊本県立女子大文一 千原 あけみ

あがりきらぬ冷たき空気の中にありて八月の向日葵奇異に見えつる

立正大仏教二 村山 智子  
七沢の山合ひいっぱい響けよと声をあはせて友と歌へり

桜美林大国際一 星野 有佳子  
帰り道皆で合はせし歌声が疲れやはらげさはやかに響く

上田女子短大国文二 花見 智子  
山の道こころにふっと浮かびくる大好きだった祖母の姿が

愛知文京女子短大デザイン一 森川 恵理  
楽しげに響きわたりし友の歌我の心もいつしか和む

### 第二十五班

淑徳大社会一 齋藤 靖子  
日本の真の姿を考へる同志に会へてうれしかりけり

拓殖大外一 小平 亜紀子  
緑濃き七沢の地へと集まれば皆多様な思ひが在るものだ

九州女子大文一 兼 重 厚 子

すがやかな自然の中を駆けめぐりわれの心も  
おのづとなごみつ

熊本大教育二 松 岡 恵 美

道の辺の畑になれる作物を見るにも思ふわが  
ふる里を

京都外国語大聴講生 新 谷 幸 恵

かくまでもして我々に御願ひを伝へんとさる  
る御心しのばゆ

## 第二十六班

拓殖大外一 深 谷 亜 矢 子

考へるいつもと違ふ考へるこんなわたしをわ  
たしが見てる

講義・班別研修

尚綱大職員 山 口 祐 佳 里

おのが身もおのが国さへ知らずして生き来し  
我に今ぞ気づけり

今までは何学びしやとかへりみてこれより後  
は努めんとぞ思ふ

大分大教二 上 野 瑞 穂

我が胸のうちにひそめるまごころを受けとめ  
にける友と出会ひぬ

明治大政経三 片 山 明 子

体調をくづし保健室にて休みをる時よめ  
る

時折りに様子見に来し先輩の心遣ひのありが  
たきかな

長崎大教一 有 川 由 紀

道の辺で出会ひし小さき男の子むじゃきに手  
をふる姿かはゆし

国文研 桐 山 澄 子

真夜中に腹痛うつたふ友のため薬もらひに医  
務室むかふ

## 第二十七班

拓殖大外一 井 上 麻 穂

あなうれし日向薬師に参りきてつつがなき身  
よひたに折れり

八百年生きつづけてゐる杉の木に日本の歴史  
しのばれるなり

頼朝が見しと伝はる杉の木をわれもかうして  
ながめをるかな

拓殖大外一 千 田 由 里 子

夢を持ち日々送る友らに囲まれて吾の幼さを  
顧みるなり

熊本大法一 成 清 幸 子

息切らし山道登るとふと横に見つけし百合の  
美しきかな

京都外国語大外二 児 島 宏 美

星空よ清き空気の七沢で一目姿を見まほしき  
かな

茨城大人文二 田 添 由 紀

小雨降り霧のかかりし山々は神の心の宿るこ  
と見ゆ

山々の大きさ思ひ我もまた広く大きな心とな  
りたし

玉川大文一 宮 本 瑞 穂

心より感ずることを言ひ合へる友を見つけた  
このよろこびよ

国文研 清 水 久 仁 子

苦勞してお地ぞう様をさがしあてみなでなが  
めて笑みのこぼるる

## 第二十八班

太陽生命 矢 野 香

さまざまな個性ありても通ひあふ心を深く感  
じたりけり

拓殖大外一 平 山 倫 子

息さらせかけ上りたる峠にてかはす言葉ぞ楽

しかりける

高網大職員 白 杵 直子

友達と進む山路を高らかに語り合ふ声響き  
て楽し

早稲田大教育一 伊 藤 佳 惠

幼な子の励ましうけて元氣よく友らと答へて  
心はずみぬ

福岡教育大研究生 谷 口 美 絵

吾の町の高校教師語りたるその姿見てうれし  
くなりぬ

拓殖大外一 佐 藤 まさ子

すれちがひ互ひにことばを交はしゆきはげみ  
となりて力湧き来る

## 第二十九班

関東学院女子短大家政一 古 川 弘 子

初めての声高らかな君が代に身の引き締まる  
合宿の朝

拓殖大外一 高 橋 あゆみ

いきこんで先頭きつて出発しずつんずん進む方  
向音痴

拓殖大外一 土 岐 芽 生

道に迷ひあれやこれやと考へて霧雨の中途方  
にくれぬ

早稲田大政経三 伊 藤 華 惠

一年の月日の後に師に会ひて変はらぬ御姿  
見るが嬉しき

京都外国語大外二 出 水 典 子

「美を求むる心」を養ひ育くむを今より後の  
我が課題とせむ

小林秀雄先生の本の抜粋を学んで

亜細亜大国際関係一 加 藤 綾

カナカナと蟬の鳴く道登り行くひっそりと暗  
き順礼峠

熊本大法一 江 原 紀 子

肌寒き小雨降る中向日葵は忘れず夏を迎へて  
ゐるらし

## 第三十一班

無 職 小 原 健 吾

亡き子をば心に思ひ訪らへば日向薬師に雨の  
そはふる

国文研 山 本 茂 夫

幼き日うたひし歌をなつかしみ口ずさみ歩む  
童謡の丘

厚木市教育委員会 中 村 俊 一

班員と共に歩きし七沢の史跡めぐりて時の過  
ぎゆく

鐘ヶ岳霧につつまれ薄れゆく深山の景いよ  
よ増しけり

（樹公正不動産）安 東 祐 範

七沢の自然の学び舎くれなづみ淋しく響く日  
暮しの声

無 職 小 馬 谷 秀 吉

丹沢の山懐に若きらと老を忘れて学ぶうれし  
さ

国文研 星 野 貢

古への仙道といふ曲り坂足もとと見つめ息つ  
め登る

降り来る若きらにあと少しなりと励ましくる  
る心うれしも

道の辺の葉ぶきの家の軒下のむくげ花咲くと  
もしみ眺める

## 第三十二班

CRC総合研究所 齊 藤 肇 夫

たすきもち駆けはひあがる一番手あらん限り  
の声はりあげる

宮崎神宮 日 高 憲 司

まだ会はぬ友をもとめておちこちの若人まな  
こかがやかせる

日立造船(株) 藤木 洋

南京で虐殺あったといふけれど嘘をつくなよ  
朝日新聞

厚木市教育委員会 石井 博

守るべきたましひ何かと思ひつつ心の中で模  
索はじまる

乃木神社 松 吉 宣 和

細道で挨拶交し足はばにそよかせ吹きて消え  
る足音

愛知県立半田高校 徳 永 幸 夫

雨上り集ふ朝に若人の力強き声山にこだます

国文研 福 田 忠 之

二日経て心もほぐれ語り合ふ班別討論愉快な  
るかな

さつまいもの作り方など語らひて歩くも楽し  
ウォークラリーは

### 第三十三班

尼崎市役所 中川 保 則

丹沢のけだかき峰を仰ぎつつ山路をゆかば汗  
のにじみぬ

厚木市教育委員会 岡 田 彰

七沢の森に来たりぬ一抹の不安と期待共に抱  
きて

厚木市農業委員会 奈良 庸 文

おちこちに友ら語らふ喜びの声のいやます峠  
の広場に

日刊建設通信新聞社 黒 田 文 彦

つどひ来て友となりたる若きらの笑顔やさし  
く我を迎へぬ

靖国神社 大 山 晋 吾

小田村寅二郎先生の御講話を聴きて  
短歌の道諭す老師の導きのまにまに磨かむ  
己がまごころ

己がまごころ

訥々と語ります師の御言葉の響き来たりぬ  
心に深く

### 第三十四班

厚木市教育委員会 吉 崎 直 幸

峠より下りてゆけばひぐらしの声のすがしく  
疲れ忘るも

森高康行事務所 三 谷 全 良

ひぐらしの鳴く声聞きつつ登れども順礼峠の  
道ははしかり

亜細亜学園 中 村 正 和

すれ違ふ仲間(とも)の励ましありがたくうけつつの  
ばれば力わきくも

(株)新栄製作所 牧 野 吉 成

休み終へ峠を下れば道すがらさやかに聞こえ  
くひぐらしの声

海上自衛隊厚木基地 山 崎 重 晴

我が憂ひ晴るる想ひす七沢の夏季セミナーに  
て学びたる今

### 事務局

日本女子大附属高校 青 山 詩 野

夏風が頬にあたりてふりむけば空に飛びかう  
蟬の鳴き声

日本女子大附属高校 金 刺 博 美

峠へと向かふ坂道つらくとも頂上につけば心  
晴れやか

大妻大嵐山女子高校 小 林 祐 子

暗き道歩き進めば目の前に緑鮮やか鐘ヶ嶽の  
里

### 写真班

九州造形短大写真科 田 上 富 美 子

ファインダー覗けばそこに真剣な瞳を見つけ  
心打たれり



## 国民文化研究会

国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎

村松剛・佐伯彰一両講師、ともに御入院

先の病院からそれぞれ御出講いただく、

といふ幸慶に恵まれて

お二人の講師の方々合宿を間近かにされて共に病みたまふ

それぞれに入院せられ二、三ヶ月は治療の必要と医師は言ふ由

三十七年の過ぎし歲月かつてなき意想外の事態の到来に戸惑ふ

設営に当れる友らもそを知りて共に憂ひつ過ぎし日々かも

そのさなか天の恵みか思はざる有難きお知らせそれぞれ賜ふ

医師よりの許可お下りたれば病院より合宿地に伺はんとのお知らせなりき

かたじけなき両先生の御出講のみこころ尊く謝す言もなし

全国ゆ集ひ来たらん参加者もいかに喜びくるるかと思ひぬ

御講義・質疑御応答をいただきしあとお

二人について

み疲れのしるべきご様子気にかかり「いかが」と問へば「疲れました」と御治療のさなかに遠くいでましてみ心こめて語り給ひし

聴く者の心にしみ入る数々のみことばただに尊く思ひぬ

（兼宝辺商店代表取締役会長 宝 辺 正 久

日向葉師参詣

空もくらすき木立の林道わけ入りて日向葉師にバスは向へり

萱あつく葺きたる屋根の大きき堂迎げば霧の如き雨ふる

年表を手にして老ひし案内人はおのがみおやの首塚を語りぬ

鎌倉の將軍五十余騎をつれ語りしときけばゆゆしかりけり

頼朝公も実朝公もありし世をしのびてやまず寺庭にして

鎌倉のにはいぞ深き八百年の大杉高きお葉師の山

（二回目作品）

八月九日、朝

信時大人太き指もて弾きしとふその曲聞こえく朝の谷間に

わが友の孫弾くならしその細き指たたくらむ

「進めこのみち」

この道をゆきていのちをささげたる友思はずやひとり聞きつつ

九州造形短期大学教授 小 柳 陽太郎

合宿第一日の朝

よべの雨のしづくぞおつる朝まだきひとかけもなきしじまの中を

谷間よりあはく湧く雲のありて朝の大地のただにしづけき

むかつをの尾の上の木々をつつむごとく流れゆく雲をあかずながめつ

若きらはいまだ眠るか合宿の宿舎のあたり人かげもなく

激動の合宿の前のしづけさをかみしめてゆく朝の山路を

（二回目作品）

「慰霊祭」の折に加藤敏治さんを偲びて

「海ゆかば」歌ひゆくままにまなかひに浮びてやまず亡き師亡き友

時空のけじめ忽ちに失せて亡き友のままひうかべば迫る我が胸

亡き友のみたまにとゞけとあふれくるおもひに耐へて歌うたひゆく

高らかに歌へばかなし耐へがたきおもひに涙あふれやまずも

国民文化研究会事務局長 長内俊平

妻への便りのはしに

合歡の花雨に冷く咲く岡にうぐひすなくも  
山峽やまがけにして

故郷にてはみなれぬ合歡ねむと竹叢たけむらを孫に語り  
つつ山道たどる

鐘が嶽谷よりおこる雲白く風に流れつつ峯を  
越えゆく

高橋所長のご案内で集会棟をめぐる

市長さん心づくしの集会棟入口のドアにさ  
へ心こもりて

入りゆけば天井高く窓ひろくめぐりの山々一  
望に見ゆ

壇上に立ちて講義のさま思ひるならぶ友もつ  
れて思ひぬ

初めて使ふ机を次々ならべゆく職員にならひ  
友ら汗かく

来賓用の和室美しベランダゆ緑の小山直ただに  
のぞみて

木々の秀ひまのゆらぐも見えて雨にけぶる林のか  
げゆせせらぎの声

十二億円投ぜしときくいたづきにこたへざら  
めや心つくして

(二回目の作品)

合宿もいま終らむとすひととせのいたづきこ

めてなりし集ひの

次々に壇上だんじょうにのぼり礼述ぶる若きらの言葉た

だ有難し  
いつまでも続くを信じ来年は友を誘ふといふ  
友いくたり

そのことばききつつわれらのつとめをば思ひ  
知らされおもきものあり

友らみなそれぞれ胸にいだくものありてこの  
里去りてゆくべし

吹きつる雨風やみてひさびさに雲間もる陽  
の光眼かげまなこにいたし

幾日を寝起きを共にせし友とまたわかれなば  
いつの日会はむ

尚綱学園監事 徳永正巳

乙女等と山路登れば何時しかに一人遅れてと  
ほく歩む

乙女等にはげまされつつつれだちて語らひ行  
けば心楽しも

定められし道に迷ひていつしかに草深き道行  
き止まりなり

引き返へし又辿り来し道なれど今来し道にも  
どりつるかな

やうやくに小さき橋を見つけ出し迷路を脱け  
て笑顔かはしつ

(二回目の作品)

世の様のうつり変りてかくなりし憂ひ止まず  
も七十歳にして

集ひ来し若き友等のまなざしにこたへざらめ  
や老迎ふとも

(榎千代田コンサルタント代表取締役専務

上村和男

ピストルの音につきつぎと友どちは心もとな  
く歩きゆきたり

示されし地図に従ひ右へ折れ左に廻りつゴー  
ルめざしぬ

なかなかにおもむきこらししつらへしコース  
を歩む心楽しく

(二回目の作品)

村松剛先生をお迎へして

痛みどめのくすり飲みつつご講義をなさると  
聞けばいたましく思ふ

行く末のみくへの姿気がかりと力をこめて語  
り給へり

佐伯彰一先生をお迎へに行く

朝まだきしじまの中にタクシーのホーンを開  
きてただちにとびのる

師の君は手術をのばし今日の為くすしの許し  
を得しとのたまふ

方栄産商(株)取締役石油営業部部长

柴田 悌輔

見あぐれば墨染色に暮れてゆく鐘が嶽をも霧  
つつみゆく

(二回目)の作品)

「短歌相互批評」のをりに

「やった!!」とふ友の笑顔の輝きて思はず我  
も彼の肩うつ

日商岩井(株)ガス石炭本部・副本部長

澤部 壽孫

村松剛先生のご講義を聴きて

御病氣は重くましまさむに病院ゆ馳せつけ給

ひし師のみ姿よ

心なしか弱きみ声に語ります師のみやまひは  
いかにああらむ

みやまひをおしてはるる来給ひし師のみ心  
に應へざらめや

(二回目)の作品)

「地区別懇談会」(八月十日)を終へた中

田一義兄の話を聞きて

今日の日は我が最良のときなりと友は語りぬ  
いと嬉しげに

七沢に連れ来し学生らの真剣に学びをる姿に  
胸うたれしと

来年も又参加せむと語りたる友の言葉に感極

まれりと

学生学生の親しきまなざし身にしみて過ぎし  
いたづき消ゆることしと

四十八もの学生連れ来たるわが友の喜びいか  
にとただ俵びをり

阿蘇の山降りて直ちに勧誘を始めし友のその  
いたづきを

語ることも多くなけれどますらをの友に連なり  
生きむとぞ思ふ

八月十一日

目覚むれば強き雨風荒れ狂ふともに学びて離

りゆく朝

(株)日産クレジット社長室 古川 修

ピストルの音を合図に友どちとウォークラ  
リーのスタートをきる

それぞれのチェックポイントで質問の答へを  
さがす友ら楽しき

他の班の若き友らとすれちがひあいさつ交は  
す声もはづみて

坂道を登りてゆけば友どちのあまたにつどへ  
る広場に着きぬ

(二回目)の作品)

「閉会式」を間近にひかへ「神州不滅」  
の伴奏の練習をする高校生(長内俊平先

生のお孫さん)のピアノの音が遠い昔か

らの声のごとくにここにしみる

静けさのただよふ広間に美しきピアノの音が  
鳴りひびくかな

かろやかなピアノの音の心地よく合宿のこと  
ども思ひ出さるる

若きらと共に過せし五日間あだにはすまじた  
ふときゑにしを

新日本製鐵(株)環境プラント部部长代理

今林 賢郁

若きらとうち興じつつ山道を歩けば楽し  
ウォーク・ラリー

快き疲れなるかな定まれるコースめぐりて帰  
りきたれば

(二回目)の作品)

つぎつぎとよこしまな事起りきてみ国危ふし  
励みゆくのみ

(株)講談社広告局長兼広告企画部部长

磯貝 保博

曇天に霧雨おりて今朝もまた歩どり重し集ひ  
への道は

うち続く曇天のもと新しき集会棟のものさび  
しげに見ゆ

(株)竹中工務店国際事業本部営業部情報課長

稲津 利比古

佐伯彰一先生の御講義にて

入院の御身体おして合宿に来給ふ講師のあり  
がたきかな

諄々と「鎮魂」の意義を説き給ふ講師の思ひ  
は我に迫り来

(二回目の作品)

皇太子殿下のご著書『テムズととも』を

読みて

ロンドンを去られる折のみこころを偲びまつ  
れば涙出で来る

神奈川県立湘南高校(現)教諭 山内 健生

御入院さきからご出講の村松剛先生

み病をおして我らに説きたまふ師のみ言葉を  
心して聞く

御担当の時間を超えても説きたまふ篤き御心  
ただありがたし

(二回目の作品)

おのが娘はいづこにをるやと気にかかり前を  
見わたせり後部の席より

うしろすがた目につきたれど居眠りてをりは  
せぬかとまた気にかかれり

野間口行正さん(お仕事で不参加)から

合宿直前に慰霊祭担当の御依頼を受けて  
自然教室のスタッフ諸氏の御助力に己がつと

めを果し得にけり

この夏のみたままつりもおごそかに執り行は

れしと御報告せむ

東急建設(株)東京支店工務部次長 奥 富修一

教室の職員方のこまやかな心づかひに頭下る

も

みづか  
自らのセミナーのごと手配りの一つ一つに

心こもりぬ

新たにも集会室まで築きたまひ我ら迎へぬお  
ろそかならじ

(二回目の作品)

小柳陽太郎・長内俊平両先生のご講義を

お聞きして

うつし世の命の限り若さらに語りますすらむ師  
のみ声はも

福岡県立新宮高校教諭 小野 吉宣

菅原先生の発表を聴きて

生徒らの短歌をよめば荒海を漁船にのりて越  
えゆくごとし

かくまでもすなほなこころを引きだしし友の  
指導に頭さがるも

元・日特金属工業(株)常務取締役

加納 祐五

薄墨のいろに静けき山並みに霧は流るる息づ  
けるがに

一羽二羽鳥のゆく見ゆ山の端をかざる木立の  
梢かすめて

鳥はゆき霧のながるる山々をあした夕べに見  
るはうれしき

(二回目の作品)

合宿最終日偶感

目さむれば空ゆく雲のあし早み青き空も見ゆ  
晴れゆくらむか

思ふどちこころをつくすいとなみのすゑあか  
るきをせちにいのれり

福岡八幡宮司 關 正臣

をどめら  
班員と登る坂道険しくて心せくま息詰り  
ゆく

「とうげの広場」めざして峻しき坂道を息詰  
まらせてひた登りゆく

乙女らは吾の後先をこもこもと登る気遣ひ有  
難きかな

二時間にあまるラリーを遂げてけり心遣ひに  
支へられつ

(二回目の歌)

「慰霊祭」の準備中に

屋内かかはた庭上かみまつりの場決め兼ねる  
降らずみの雨

みいのちを捧げましけるみおやらのみなげき  
なるかふらずみの雨

もろともに誓ひまつらむまさみちを力合は  
せて進みゆかむと

白濱・占部両講師に

高校の社会科教師の本領をみごと現はす二人の講義

若きらの心にかよふ素材選び訴ふ言葉に力こもれり

中田父子の心偲びて「命より貴きもの」を白濱示す

松陰の書簡をひきて「為すべきの決意は今」と占部訴ふ

内外に乱世迫れり若きらとこぞりて起たむ至らざれども

人の世は短かしされど日本ののちはながしなにかなげかむ

宮崎産業経営大学経済学部教授 川 井 修 治  
丹沢の山ふところに抱かれし七沢の宿緑濃きかも

今朝もまた雨雲閉ざす空見れば御国の行手憂はしきかな

八つの党の馴れ合ひにより生まれたる政府に望み托し得べきや

混迷の御代となるらし内外に醜きさまを恥無くさらして

七沢の宿に集ひし二百余の若人こぞり立つ時ぞ今

松 吉 基 順

亡き兄の遺しし歌をば七沢の宿に集ひて若きらと聴く

南溟に散りし亡き兄年経れど恋ふる心のやみがたきかな

はらからのなさけ忘れじと歌詠みて醜の御楯と征しし兄はも

はらからのなさけ忘れじとふ亡き兄の歌の碑(いしぶみ) ふるごとに立てむ

葉も春は五十年の祭りいとなみて亡き兄の靈なごめまつらむ

(二回目)の歌  
長雨のあがりしみ空に白雲の流れゆくなり七沢の里

まなかひに連なる峰は木々しげく緑眼にしむ七沢の里

木々わたり部屋ぬち吹きいる夏風の心地よきかな七沢の里

元・(株)山陽自動車学校・社長 加 藤 善 之

遠く近くしきり鳴くなりひぐらしの丹沢のふもと七沢の宿

この世をば悼むが如しひぐらしのかなかなかなど鳴きやまぬかも

聞き惚れて胸にしみ入るひぐらしの声のかな

しく谷わたりくる

鳴きやみしひぐらしの声今ひとたびと暮れゆく宿にみ山仰ぎぬ

(二回目)の歌  
新たななるさざる戦ひ次々に押し寄す如しつとめざらめや

元・法政大学人事部長 香 川 亮 二

大みうたの幟かかぎて集ひくる友らを待つとこ七沢の里

新しき集会棟は直前に成りしとぞ聞くみことの姿

朝夕にうぐひすの声聞えきて七沢の里緑しるけし

四泊五日みのりゆたけくつ、がなくあれと願ひつ、開会を待つ

(二回目)の作品  
閉会式を終へて

雨多き合宿なりき昨日まで天つ日の影さすこと

とのなく  
実朝が雨やめたまへと歌詠みし大山のふもとにわれら集ひしに

最終日の朝となるも窓の外雨音はげしく止まず降りしく

朝の集ひに出でんとする頃やうやくに雨のあ

がりて明るさのまま

閉会式終へて出づれば夏の日は七沢の里にみちあふれたり

班の子ら写真うつすとさそひくるに別離の思ひ湧然と湧く

班長はくぐもれる思ひとつくと語りてくれぬ友にうながされ

班に付くことの難きを今さらに思はしめられし日々なりしかな

東京短資(株)顧問 小田村 四郎  
村松剛先生をお迎へして

車より降り立たれたるみ姿のやつれ給ふに我おどろきぬ

病み給ふのどの痛みを抑へつつ語り給ひぬ二時間の余を

明治維新をまた先帝のみことのりを君説き給ひぬ若き友らに

病おして馳けつけ給ひし心の深さつくづく有難しと思ふ

皇国に缺かせぬ君のみ病のとく癒えませとただ祈るのみ

(二回目作品)  
たちこめし霧もあがりて丹沢の山のみどりのあざやかに見ゆ

流れゆく雲の間に青空を仰ぐを得たり久方ぶ

りに

長雨の続きし日々も合宿は友らの力に無事進み來ぬ

五日の間共にむつびし共ども家路をさしていま別れゆく

さはあれどみ国にあだなす内閣の生れ出でしが悲しきるかも

明日よりはみ国を護るすべ求め力の限り盡くさざらめや

八月夜再び合宿に戻る 関口 靖枝

亡き背子の魂まつりての戻り路は闇に閉ざされ霧雨の降る

心知る恩師友らの集ひます七沢の里へひた近づきぬ

お帰りなさいと若き友らに迎へられくぐる思ひ晴れゆく心地す

(二回目作品)  
八月十日

こぞ夏のけふのこの日はわが夫はいまだいませりこのうつし世に

容態のにはかに変り逝きます日は二日後とも知らずうかつに過ごしぬ

思はざりきひととせの後に七沢に若き友らと学び合ふとは

航空自衛隊・航空教育隊生徒隊・教官

村山 寿彦

(二回目作品)

合宿に吾が娘と共に参加する夢のかなひぬこの夏もまた

いかにしてすごしをるかど気になりて我が胸うちはおだやかならず

どの辺に座りてをるかど気になりて吾娘をさがしぬ講義室にて

心こめ語りたまひし師の君の御言葉いかに吾娘は聞きしか

わが背をポンとたたいて走りゆく吾娘の笑顔はたのしげに見ゆ

走り去る吾娘の姿にほつとして胸のつかへもうすらぎてゆく

めぐりあひし班の友らと心つくし時を忘れて語りあかせよ

七沢のこの合宿をいつまでも心にざざみて生きませ吾娘よ

「班別研修」にて  
をちこちゆ集ひ來たりし人々と語らひ行きぬ

夜のふけるまで  
「ウォークラリー」にて

緑濃き七沢の里を縫ひ走る小道細道めでつつ歩みぬ

拓殖大学外国語学部教授 松本幹男

足止めて杉のこずゑを見上ぐればうす黒き空に雄々しくそびゆ

登り来て石に腰かけ乙女子と楽しく語る  
ジュースを飲みつつ

(二回目の作品)

鐘ヶ嶽を合宿の窓より仰ぎて

濃い霧の現はれ出ててゆつたりと頂覆へり  
這ふが如くに

小田原市立富水小学校教務主任 岩越豊雄

道行きつモルダウ歌ふ乙女兒の声のひびきを  
美しと聞く

(二回目の作品)

窓をうつ激しき風雨に案じけり合宿の最終日  
いかになるかと

朝の集ひ雨風のために会場を変更すといふア  
ナウンスあり

雨にぬるることを気づかひ集合の場所代へた  
るは判断のよし

朝の集ひ終へて戸外に出でくれば雨やみてあ  
り青空も見ゆ

緑しるき鐘ヶ嶽山の山ひだに霧立ちのほり  
空に消えたり

合宿の終るこの日は久々にみ空晴れたり心も  
さやかに

風にのり紋黄蝶二羽空高く舞ひ上かりけりむ  
つびあひつつ  
いづくにて鳴くかうぐひすその声も耳に聞え  
く彼方の森ゆ

三菱重工業(株)監査役事務局 島津正數

村松剛先生の御講義を聞きて

師の君は病ひを押しして病院ゆ我がために来  
られしといふ

つねよりも声に力のなかりけり痛みを押しして  
講義されしか

新日本建設に関する詔書をば語り伝へむ友に  
我が子に

(二回目の作品)

「夜の集ひ」

乙女らと舞台に立ちてうち揃ひ指ゲームせし  
は楽しかりけり

班室で二度三度練り返し練習せしこと忘れざ  
らなむ

五日間の研修なるもかくほどに打ち解け合へ  
しは嬉しかりけり

真直なる向日葵のごと伸びやかに大きく育て  
乙女君らよ

機会あらばまた集まりて思ふこと心ゆくまで  
話しまほし

折にふれて歌詠み給へ乙女らよ美しと思ふ

心動かば

小柳陽太郎先生のご講義「日本の国から」

を聞きて

この国に生まれしことをかくほどに嬉しく思  
ふ秋なかりけり

富山県立富山工業高校教諭 岸本弘

ひぐらしのなく音もゆたに暮れてゆく厚木や  
まなみ霧にかすみて

友ら今安らぎをるか部屋中ゆもれるあかり  
を見つ、坂ゆく

誘へども来ざりし吾子を夕暮るる部屋中に  
てふと思ひけり

(二回目の作品)

久々に会ひし友らと過しつ、友の思ひに触る  
るうれしさ

葉我身に泌みる  
(二回目の作品)

「地区別懇談会」にて

辛からむにつかれをみせずうちそろひ並ぶ  
を見れば感極まれり

「来年も参加させて下さい」といふ学生の言  
葉を聞けば胸つまりたり

神奈川県立秦野曾屋高校教諭 原川 猛雄

菅原君の発表を聞きて

友は今生徒の和歌をつぎつぎと多みを浮べて読みあげにけり

順々に和歌聞きをればまざまざと航海のさま

浮かびくるごと

喜びも驚きもみなそのままに生きくとして

伝はりてくる

生徒らの和歌読みゆけば素直なる若人の心伝はりてくる

(二回目の作品)

村松剛先生の御講義を聴きて

壇上に蒼白き顔にてのぼらるる師のお姿にわれ

驚きぬ

かくも重き病をおして語らるる師のお言葉を

ゆるがせにせし

日の本に伝へこられし伝統を大切にてふみ言葉

葉尊し

中島法律事務所弁護士 中島 繁樹

七沢の学びの庭に新らしく集会棟は堂々と建

つ

(二回目の作品)

病ひ押し来られし大人の御講義のみことば

数々胸に留めり

晴れ間見ゆる空に日の丸ひるがへり厚木合宿

いま終はらんとす

九州大学医学部循環器内科助教

小柳 左門

久々に会ひたる友と雨けぶる夜道を行きぬ一

つの傘に

語らへば心なごみぬ十年とふ年月を経て相

まみゆれど

戸田建設(株)開発事業統括部開発計画部

青山 直幸

七月二日亡くなりし岳父(島田好衛)を

偲びて

夕暮の迫る深山に鳴きしきるひぐらしの声聞

けば悲しも

流れゆくさ霧の中にわが岳父のみ姿かすかに

見ゆる心地す

夕霧にけぶる山々仰ぎつつ岳父の名呼べば

面浮かびく

み病のいゆれば共に合宿に参加したしと願ひ

しものを

み病の床にありても友の上を思ひたまへる

岳父のやさしさ

天がける岳父のみ魂よ友ら皆励む姿を見守り

たまへ

(二回目の作品)

「参加者感想自由発表」にて

次々と壇上に立ちみ友らは己が思ひをひたに述べゆく

み友らの中には共に学び合へる班員三人の顔

も見えたり

こみあぐる思ひを込めて力強くエール送りし

友もありけり

来年は必ず友を誘はむと誓ひし友の姿たのも

し

美しき日本の歴史を子供らに伝へむと教師に

なりゆく友はも

関西熱化学(株)研究所 天本 和馬

菅原先生の御発表を聞きて

先生のすすめに応じ生徒らは素直なる和歌つ

ぎつぎと詠む

大波を山のごとしとふ生徒らの不安の顔が浮

かび来るなり

日本の港につきて生徒らは電話に飛びつき母

の声きく

(二回目の作品)

久しぶりに合ひし先輩らとたちまちに心なご

みて話はずみぬ

熊本市役所生活環境事業部 折田 豊生

白濱兄の講義を聴きて

先人のかなしき命に支へられて我らはありと君は訴ふ



溢るる思ひこらへて語る言の葉を聴きつつ常  
の君をし思ふ

(二回目の作品)

新たなる友を見出て新たなる道を開かむ障り  
ありとも

この道につらなるほかに道なしとあらためて  
思ふ学びの集ひに

熊本県立第二高校教諭 白濱 裕

班友とうちとけラリーに興じゐる教へからの  
姿を見れば嬉しも

これよりは心定めて励みませ再びめぐり来ぬ  
日々なれば

(二回目の作品)

大日方指揮班長へ

つぎつぎにわき来る仕事をてきばきと君努め  
ますかいとふことなく

新しき試み(ウォークラリー)せむと幾度と  
なく君通ひしかこの合宿の地に

合宿の成功せしも裏方に徹する人のありてこ  
そなり

福岡県立水産高校教諭 菅原 亨二

(二回目の作品)

班員の加藤武俊君(富山大・一年)が急  
病で入院(まもなく退院)す

思はざる病ひに君は入院すまだ日程も残りを

りにしに

お互ひに詠みたる短歌を直さむとすれど残れ  
る君の短歌一首

(株)日本興業銀行証券部調査課 小柳 志乃夫

友らみな出でて静けき教室の窓辺に虫の声の  
聞こゆる

あいまみえ間なき友らのうちとけてウォーク  
ラリーに興じいますか

今日の日のコース下見に幾度も通ひし後輩  
のいたつき思ふ

(二回目の作品)

様々の人の思ひに支へられて合宿教室も無事  
に終へにき

力足らざる我にしあれど友どちの助けたまへ  
る有難きかな

合宿教室最終日の今日やうやくに厚木の空は  
晴れわたりけり

福岡市立原小学校主任事 奈田 明憲

まっすくな瞳で語る班員と会へたうれしさ心  
がはづむ

(二回目の作品)

「夜の集ひ」終了後の会場出口にて  
ざわざわと急ぐ足音和ませるアコーディオン  
の楽しき音よ

防衛施設行施設部施設対策第一課

山根 清

白浜さんの講義を聴きて

世のために命をささげしますらをの思ひ偲ば  
れ涙わきくる

死のきはもつとめはたせしますらをの様偲ば  
れて悲しきろかも

はるかなるカンボジアの地にたまきはる命う  
せにし人を忘れじ

(二回目の作品)

あまたなる人のおかげでつつがなく合宿教室  
終へるうれしも

北九州市立八幡病院放射線科技師 森田 仁士  
佐藤公治君へ

壇上に登りし君の表情にこはばり見えてわれ  
落ちつかず

壇上ゆ開会告げしその声の高く響きて身はひ  
きしまる

新しき友を迎へて語らひにはげみつとめよ心  
開きて

(二回目の作品)

台風の過ぎて大空澄みわたり夏の陽うけて御  
旗はためく

東洋精密プレス工業(株)営業部主任

阿川 信次

ジュースのみ憩ふ友らの顔々は疲れし中にも  
楽しげにして

そこそこで記念の写真撮り合ひてにぎはしき  
かな順礼峠は

三菱電機(株)相模原製作所 工藤 可哉

二年前の合宿で同じ班だった小馬谷さん  
にウォークラリーで合つて

「工藤君久しぶりだね」と呼ぶ声にふと見上  
げれば懐しき顔

我もまたジュース配りし手をしばし休めて  
友に言葉返しぬ

(株)日立製作所エネルギー研究所 松井 哲也

### (二回目の作品)

ロビーにてたたずみをれば後より声かけられ  
し乙女子をどめごのあり

茨城では学びの会はありませぬかと尋ねてく  
れしその乙女子は水戸の友筑波の友と茨城の

地にて学びの集ひ開かん  
いつの日か持たんと思ひし茨城での会をこれ  
より持たんとぞ思ふ

タマポリ(株) 吉川 理夫

ウォークラリー

玄関前に集ひ待ち侘びし若人にピストルの音

高らかに鳴る

帰りまで雨降らざるを祈りつつ沸きて立つ若  
人らを拍手で送りぬ

(株)ルーツ 畝知 浩一

### (二回目の作品)

合宿二日目菅原亨二先生の「所感発表」  
をききて

はじめての短歌なりしも生徒らの素直な気持  
ち伝はりて来ぬ

しきしまの大和心を生徒らに教へむとする先  
生の尊し

荒波の船上で生徒らと学び励ませしみ姿浮か  
び来

東京理科大学講師 八木 秀次

班員とも皆で知恵を出しつつ進みゆくウォークラ  
リーは楽しげに見ゆ

講義では居眠りし人も生き生きと班員ともを率ゐ  
て進みゆきをり

チェックポイントのジャンケンゲームに打ち  
興ずる友らの姿は見るも楽しき

安信住宅販売(株)新宿センター 松吉 基光  
二年前再会約せしスタッフが笑顔で迎へり

七沢の宿

前回のわづかな時の共同作業汗にまみれしが  
想ひ出さるる

はつらつと声をかけくるスタッフのあたたか  
き心有難しと思ふ

神奈川県立津久井高校(定)教諭 大日方 学

いくたびも足を運びて作りたるウォークラ  
リーは今始まりぬ

不備多き下案をつぶさに調べまた直し給ひき  
安藤さんは

皆元気で帰り来ませと祈りつつスタートのピ  
ストル空に鳴らしつ

### (二回目の作品)

「閉会式」の準備のため講義室に行きし  
折、アルバイトの小林祐子さん(長内俊  
平さんのお孫さん)が一人ピアノの練習

をしてゐるのを見て  
静まれる講義室の中ゆめしきピアノの調べ聞  
こえくるかも

閉会の式で唱はむ曲のため汗を流しつ練習し  
ますか

聞きなれし「神州不滅」の曲なれどいつもに  
ましておごそかに聞こゆ

日本青年協議会研修局 佐瀬 竜哉

ふかみなすみどりに映えて咲く花に思はず足  
とめ吾は見入りき

そが花に近づきゆけば薄桃のいろの美しき  
ひるがほなりけり

よく見ればふりたる雨のあと見えて雨つぶひ  
とつ花につきをり

花びらに雨つぶのせてひるがほの花はさきた  
りみどりのもなかに

(二回目の作品)

情熱をかたむけて語ります師の君の御姿仰げ  
ば心ださる

熊本県立第一高校教諭 今村 武人

ご講義を拝聴して

ご病氣をおして来らるる講師陣その情熱に心  
打れる

古の真心我等に伝へんとその問ひ掛けに我は  
答へむ

(二回目の作品)

ひしひしと伝はる友の体験の言葉を書くに時  
を忘れつ

小諸市役所建設部建設科管理係 中澤 榮二

鳴き渡る蜩の声寂しげに心に響く夏の夕暮れ  
二時間を歩き通してもさわやかに森に響きく

乙女子らの声

(二回目の作品)

知らないといふことを知ることのみぞ大切な  
りと師(長内先生)は述べたまふ

風強く雲流れゆく七沢の終はり近づく合宿教  
室

緑濃き七沢の里さはやかに今合宿を終へなん  
とする

アダムンド工業(株) 眞田 博之

指揮班長 大日方先輩

自分から先づ乗り出して指揮班の仕事に取り

組まれる姿尊し

忙しき身にはあれどもまはりへの気配り忘れ

ぬ先輩の尊し

亜細亜大学平成三年卒 岡山 英一

初めてのつとめなれどもこの集ひよきものに  
したし力盡して

友どちの我を案ずる聲聞きてやさしき心のあ  
りがたきかな

(二回目の作品)

白濱裕先輩の「合宿導入講義」資料のソ  
クラテスの言葉を読みて

幾度か讀みにし文も刷文に見れば新たな思ひ  
の湧き出づ

魂の世話をばせむと人々に語りたまへりため  
に死すとも

女子班が「モルダウ」を美しく歌ふを聴

きて

外国に訪ねし先の家族らとこの曲を聴きしこ  
と思ひ出す

祖つ國を偲びて描かれしモルダウの歌聲響き

ぬ集ひの庭に

合宿地に寄せられた会員の短歌

元・亜細亜大学・教授 宮脇 昌三

歴史重ね三十八回厚木なるこの合宿に幸こそ  
折れ

元・福岡教育大学・教授(国文研・常務理事)

山田 輝彦

合宿参加者の皆様へ

相模なる厚木の自然教室に集ふ友らの上に幸  
あれ

日の本の道とこしへに守るべく学び給へや心  
ひとつに

元・福岡県立若松商業高校・校長

小林 国男

帰宅時の電車の中で(八月九日)

あらし襲ふ予報を聞きつつ神奈川の合宿の地  
を思ひやるかな

合宿はすでに開かれ二日目の村松講師の講義  
もすみしか

もすみしか

新内閣の閣僚名簿の夕刊を横にみれども見る  
気おこらず

うつつぬかす記事にあきたり浮気はてなき政

変の記事

友の記す講義レジメを取り出しわが皇室の御  
学風を拝す

気高くも畏<sup>かしこ</sup>し神代ゆ変らざるしきしまの道  
践みたまふかな

## あとがき

秋も日毎に深まってまゐりました。皆さんその後いかがお過ごしでせうか。緑多き厚木・七沢の地で共に学び合った「合宿教室」から早や三カ月が過ぎやうとしてをりますすが、やうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来ることになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に「走り書き」して戴いた感想文と和歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の制作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のもった文章・和歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使ひ、時間のかかる作業ですが、皆さんのお書きになった生々しい言葉に心打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの方々に編集していたいただいた編集方針は以下の通りです。

### (一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを

基本方針としました。ページ数の関係で執筆者のお心うちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持を辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤まりについては訂正してをります。

### (二) 「和歌」について

合宿では二回にわたって和歌をつくりましたが、第一回のもは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく本冊の巻末の「和歌詠章」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていた第二回目の和歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班長及び班付の方々以外にも多くの方々のご協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきました磯貝保博、鏗信弘、山根清、小柳志乃夫、

大日方学、土井郁磨、真田博之等の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成および第一回目の和歌編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は福岡の田上富実子さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がった感想文集を、ご精読下さるやう切願してやみません。

「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に蘇って来る事と思ひます。三カ月前に七沢で得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、合宿教室で得た真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長又は班付の方々に一筆御礼状を差し上げていただきたく願ひ致します。

(吉川理夫記)

内海勝彦、那須三元、八木秀次、木村俊一郎、



〔資料〕

第三十八回 “合宿教室（厚木）” 感想文集

非売品

平成五年十月三十一日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七―一〇―一八 柳瀬ビル

電話〇三―三五七二―一五二六代

FAX 〇三―三五七二―二五二七

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

編集委員 吉川 理夫・内海 勝彦

山根 清・鏖 信弘

大日方 学・小柳志乃夫

